山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第327集

山梨県内分布調査報告書

（平成31年１月～４月・令和元年５月～12月）

2020. 3

山 梨 県 教 育 委 員 会

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第三二七集

山梨県内分布調査報告書（平成31年1月～4月・令和元年5月～12月）　二〇二〇・三

山梨県教育委員会

山梨県内分布調査報告書

（平成31年１月～４月・令和元年５月～12月）

２０２０．３

山 梨 県 教 育 委 員 会

序

本書は、平成31年１月から４月、令和元年５月から12月までの間に、山梨県教育委員会（実施機関；山梨県埋蔵文化財センター）が国庫補助（文化庁；国宝重要文化財等保存整備費補助金）を受けて実施した「県内遺跡発掘調査等事業」にかかる調査成果をまとめた報告書です。本事業では、12か月間に試掘・確認調査８件、立会調査・踏査３件、詳細分布調査１件の合計12件を実施しています。

試掘・確認調査は、中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事、新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業、一般国道411号御屋敷拡幅事業、公園施設（四ツ目垣）設置工事、大月警察署上谷交番建設工事、高速自動車国道中部横断自動車道新設工事に伴い、施工に先立ち埋蔵文化財保存への影響を確認する目的で実施いたしました。

立会調査では、県立北杜高校蹄洗場の建設工事に伴って、専門職員が立ち会いながら、埋蔵文化財への影響がないことを確認しながら進めました。

踏査では、中央新幹線への電力供給を目的とした送電線建設、中央新幹線（品川・名古屋間）の施工・計画に先立ち、専門職員が現地を踏査して、地形や周辺の歴史環境などから埋蔵文化財への影響を検討する目的で実施しました。

試掘・確認調査、立会調査・踏査ともに、遺構や遺物が発見された場合、適切な保存措置が必要となります。開発による遺跡の破壊を未然に防ぐためにも、今後も開発業者との協議を重ねながら、保存に向けた取り組みを続けていく必要があります。

本書に収録した調査記録は、今後の埋蔵文化財の保護、とりわけ開発事業との円滑な調整などにおいて有益な情報となると確信しています。さらに、多くの方々の文化財に対する理解と関係諸機関の文化財保護の取り組みへの一助となれば幸いです。

末筆ではありますが、今後とも当センターの埋蔵文化財・史跡の保存活用にかかる諸事業に一層のご理解とご支援をお願いするとともに、本事業においてご協力を賜りました関係機関並びに調査実施に関わられた皆さまのご支援に厚く御礼申し上げます。

2020年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　馬 場　博 樹

例　言

1　本報告書は、山梨県教育委員会が文化庁の国庫補助（文化庁；国宝重要文化財等保存整備費補助金）を受けて平成31年１月から４月、令和元年５月から12月までに実施した「県内遺跡発掘調査等事業」の調査成果をまとめた報告書である。

2　本報告書は、国・県の道路建設事業、建物等建設事業などの開発事業に伴い、山梨県埋蔵文化財センターが実施した試掘・確認調査結果と立会調査・踏査結果、および詳細分布調査成果を収録している。

3　調査結果の報告については、調査研究課 深澤一史（主査・文化財主事）、柴田亮平（主任・文化財主事）、御山亮済（主任・文化財主事）、熊谷晋祐（文化財主事）、北澤宏明（文化財主事）、岩永祐貴（文化財主事）、佐賀桃子（文化財主事）が執筆・編集した。

4　本報告書の出土品及び記録図面・記録写真・出土遺物・デジタル化したデータ等は、一括して山梨県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

5　試掘・確認調査作業員並びに整理作業員は次のとおりである。（敬称略・順序不同）

発掘作業員：雨宮信次、大森博、岡田保彦、角田光夫、水上喜正、宮城良男、箭本公幸

整理作業員：新谷和美、上島光子、長田良二、斉藤律子、新津多恵、渡辺麗子

7　試掘・立会調査及び整理作業について、次の方々にご指導、ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。（順不同）

東海旅客鉄道株式会社（建設工事部）、中日本高速道路株式会社（NEXCO中日本）、山梨県県土整備部（新環状道路建設事務所、峡東建設事務所、中北建設事務所）、山梨県警察本部会計課、甲府市教育委員会、都留市教育委員会、北杜市教育委員会、笛吹市教育委員会、甲州市教育委員会、中央市教育委員会、南部町教育委員会、富士川町教育委員会

凡　例

1　各事業位置図は、国土地理院発行1/25,000のスケールを基本としている。

2　図版縮尺については、図版内のスケールにより統一していない。

3　実測図及び写真は主要なものに限った。

4　遺物実測図の縮尺は下記の通りである。

土器・陶磁器 1/3　石製品 1/3 , 2/5

本 文 目 次

序
例言 凡例
目次

県内分布調査全体事業位置図……1

Ⅰ　試掘・確認調査
1　中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事……2
1－1　本線　笛吹市内
1－2　本線　甲府市内
1－3　本線　中央市内
1－4　本線　南アルプス市内
1－5　本線　南巨摩郡富士川町内
2　中央新幹線成島保守基地建設工事《二又第２遺跡》……24
3　中央新幹線高下作業ヤード建設工事……28
4　新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業《北畑南遺跡》……32
5　一般国道411号御屋敷拡幅事業（塩山上萩原地内）《馬場平遺跡》……38
6　公園施設（四ツ目垣）設置工事《国指定史跡甲府城跡》……42
7　大月警察署上谷交番建設工事《三ノ側遺跡》……44
8　高速自動車国道中部横断自動車道新設工事《包蔵地外》……46

Ⅱ　立会調査
9　県立北杜高校蹄洗場建設事業　立会《原町農業高校前遺跡》……48
10　中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事　踏査（笛吹市境川町）《包蔵地外》……49
11　中央新幹線への電力供給を目的とした送電線建設　踏査……50

Ⅲ　分布調査
12　国営施設機能保全事業に先立つ詳細分布調査事業《殿林遺跡・安道寺遺跡》……51

第１図　県内遺跡分布調査全体事業位置図

1　中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事（笛吹市～富士川町）　試掘《包蔵地・外》
2　中央新幹線成島保守基地建設工事　試掘《二又第２遺跡》
3　中央新幹線高下作業ヤード建設工事　試掘《包蔵地外》
4　新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業　試掘《北畑南遺跡》
5　一般国道411号御屋敷拡幅事業（塩山上萩原地内）　試掘《馬場平遺跡》
6　公園施設（四ツ目垣）設置工事　試掘《国指定史跡甲府城跡》
7　大月警察署上谷交番建設工事　試掘《三ノ側遺跡》
8　高速自動車国道中部横断自動車道新設工事　試掘《包蔵地外》
9　県立北杜高校蹄洗場建設事業　立会《原町農業高校前遺跡》
10　中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事　踏査（笛吹市境川町）《包蔵地外》
11　中央新幹線への電力供給を目的とした送電線建設　踏査《包蔵地外》
12　国営施設機能保全事業に先立つ詳細分布調査事業《殿林遺跡・安道寺遺跡》

Ⅰ　試掘・確認調査

1　中央新幹線（品川－名古屋間）建設工事

※詳細は各地域の一覧表に示す
調査担当者　吉岡弘樹・宮里学・深澤一史・數野優・御山亮済・熊谷晋祐・岩永祐貴・高左右裕

調査の経緯・経過と方法

中央新幹線（品川－名古屋間）は、東京都品川駅付近を起点に、本県甲府市、赤石山脈南部（南アルプス）を経て愛知県名古屋市まで延長約286kmを超電動磁気浮上方式で走行する計画である。路線延長約286kmのうち、地上部は約40km、トンネルは約246kmであり、特に本県地上部は27.1kmと全体の約67％を占め、沿線都県自治体の中でも埋蔵文化財について特段の注意が必要な区間と言える。

このような背景から、山梨県教育委員会では事業主体者である東海旅客鉄道株式会社（以下、「JR東海」という）と協議を進め、平成30年度から本格的に本線部分の試掘調査を開始している。

相当な範囲で埋蔵文化財に影響が及ぶ恐れがあることから、円滑な調査と埋蔵文化財保護行政を確実に推進していくために、毎月一回以上の定例協議をJR東海、リニア交通局リニア用地事務所、教育庁学術文化財課、埋蔵文化財センターの四者で実施している。協議では用地取得の状況、調査の進捗などを相互に確認している。

また、遺跡の調査は原則用地取得後にすることが望ましいが、広域に地下情報を把握することは急務であるため、土地所有者の同意書をもって実施することもやむを得ないとした。これにより平成30年度は単独地点（筆）であっても積極的に調査を実施した。徐々に様相が明らかになった平成31年度からは、まとまってJR東海が土地を取得した地点を原則として、包蔵地が周辺にない地点については引き続き単独地点であっても調査を続けた。

平成31年１月～４月、令和元年５月～12月に、本県で試掘調査を実施した地点は、笛吹市９地点、甲府市５地点、中央市12地点、南アルプス市５地点、南巨摩郡富士川町８地点となる。合計の調査対象面積は約38,605㎡、調査面積は1,664.84㎡に及ぶ。このほかに、中央市に位置する成島保守基地に関する試掘調査を第２節に、南巨摩郡富士川町に位置する高下作業ヤードに係わる試掘調査を第３節に報告する。

試掘調査は、バックホウによりトレンチを掘削し、壁面･床面を人力で精査し遺跡の有無を判断した。笛吹市･甲府市では、掘削深度の浅い位置に埋蔵文化財が認められる場合があり、人力でトレンチを掘削することもあった。湧水の発生する盆地中央部では、水中ポンプなどを使用して排水環境を整えながら掘削を行った。

1－1　本線　笛吹市内

調査地点の環境

笛吹市における調査地点は、甲府盆地東南部～南部に形成されている曽根丘陵の一部、および御坂山地・曽根丘陵を起源とする河川が生み出す小扇状地を東西に横断している。行政区では笛吹市境川町の小山・石橋・三椚地区にあたり、小山字中丸地区以東は既に実験線の路線が完成している。当該地点において曽根丘陵は小河川により浸食された舌状台地をいくつも形成しており、起伏が激しい。

周知の埋蔵文化財包蔵地は小山地区の中丸遺跡・大塚古墳、西原遺跡、石橋地区の昆沙門遺跡、先屋敷塚古墳

が路線内に該当し、小山地区の西窪古墳、石橋地区の石橋氏館跡が近接している。特徴としては、丘陵上に縄文時代の遺跡が分布しており、古墳時代中期～後期の古墳が散在している地域でもある。

調査の結果

①境川町小山地区（西窪古墳・西原遺跡）

舌状台地の尾根先端部にあたる。数百メートル南には、西原遺跡の旧境川村教育委員会が発掘調査した箇所がある。平成30年にも同地点を調査しているが、果樹地帯であることから人力による掘削での追加トレンチを設けた。丘陵の西斜面を中心に、地山を掘りこむ遺構プランが確認された。遺物包含層は残存しておらず、地表下30cm程度で遺構確認面となる。なお、リニア建設に伴って、農道等の付け替えも想定されており、今後の周辺開発にも警戒を続ける必要がある。

②境川町小山地区（西原遺跡近接）

①地点の丘陵西斜面にあたり、斜面中でも上位部分となる。地表下20cm程度から遺物の包含層が確認された。遺物は土師器と思われる。

第１表　中央新幹線試掘調査一覧

No.			調査概要						調査情報				備　　考	
	調査地点	調査日	包蔵地区分	調査対象面積（㎡）	試掘調査面積（㎡）	調査率（%）	地形	最大深度（m）	遺構の有無	遺物の有無	遺構確認深度（m）	時代	出水深度	補足説明
1	笛吹市境川町小山	2月12日～14日	西窪古墳西原遺跡近接	872	36.5	4.2%	丘陵	0.7	有	無	GL－ 0.3m	不明	無	平成30年10月18日、11月1日に実施した地点の追加確認調査。舌状に延びる丘陵上に位置する。10号トレンチでは溝状の遺構が検出された。
2	笛吹市境川町小山	3月18日	西原遺跡近接	515	16.5	3.2%	台地丘陵	1.3	無	有	―	古墳～平安	無	No.1地点の丘陵の西斜面。地表下20cm以下から遺物包含層を確認。
3	笛吹市境川町石橋	2月7日～8日	昆沙門遺跡近接	750	25	3.3%	丘陵	2.5	有	有	GL－ 0.7m	古墳～平安	無	No.2地点の斜面の下位地点。傾斜地に遺物包含層が堆積しており、土坑状の遺構を1基確認。
4	笛吹市境川町石橋	6月20日～21日	昆沙門遺跡	592	39	6.6%	扇状地	3.6	有	有	GL－ 1.1m	古墳平安	無	石橋地区を形成する扇状地および昆沙門遺跡の東端にあたる。古墳後期～平安土器多量。1号トレンチでは2面の検出面を確認。1点だが縄文土器も出土。
5	笛吹市境川町石橋	2月18日～19日	昆沙門遺跡	1265	15	1.2%	扇状地	1.3	有	有	GL－ 0.8m	古墳平安	無	昆沙門遺跡の中心的位置。小礫の混じる遺物包含層は、厚いところで90cm程度確認された。遺物には古墳時代後期のものと平安時代のものがあり、多量に出土している。
6	笛吹市境川町石橋	3月19日～20日	昆沙門遺跡	1183	15	1.3%	扇状地	1.3	有	有	GL－ 0.3m	古墳平安	無	昆沙門遺跡の中心的位置。遺物には古墳時代後期のものと平安時代のものがあり、多量に出土している。竪穴住居跡と思われる遺構1軒と、礎石状の遺構を1基検出した。
7	笛吹市境川町石橋	2月4日	昆沙門遺跡西接	110	7.5	6.8%	扇状地	1.1	無	有	―	古墳～中世	無	昆沙門遺跡の範囲に西接する地点。遺物包含層は60cm厚程度あり、主として古墳時代後期～平安時代の遺物が出土した。
8	笛吹市境川町藤垈	3月1日	包蔵地外	1046	48	4.6%	河川扇状地谷状平野	2.5	無	有	―	―	有 GL-2.5m	坊ヶ峯の丘陵西側裾部分にあたる。河川由来の堆積が主体であり、土器の小破片が1点出土したが、流れ込みと判断できる。
9	笛吹市境川町藤垈	2月5日	包蔵地外	165	12.5	7.6%	丘陵	1.3	無	無	―	―	無	曽根丘陵から舌状に延びる台地の先端に位置している。表土層以下は真砂土の混じる地盤層が確認された。

③境川町石橋地区

西斜面の下位部分となる。出土量は少ないが斜面中に遺物包含層を確認し、一部のトレンチでは土坑と思われる落ち込みを確認した。

④境川町石橋地区（昆沙門遺跡）

昆沙門遺跡の東端に位置する。古墳時代後期の土器を主体として平安時代（10世紀）の土器と遺構（ピット２基と溝１条）を検出した。また、縄文時代の諸磯ｂ式土器を１点確認したが、周辺地点では他に確認しておらず流れ込みによるものと考えられる。１号トレンチでは、第４層と第６層に遺構検出面が認められ、２面の調査が必要と考えられる。

⑤境川町石橋地区（昆沙門遺跡）

平成30年10月に調査した地点の西側にあたる。30年10月地点では、古墳時代後期の遺物が大量に出土しているため、当該地点は昆沙門遺跡の中心域と考えられた。

石橋地区は境川が形成したと思われる小扇状地にあり、小礫を含んだ砂層が堆積している。調査では表土以下に厚い包含層が確認され、22Lプラスチック箱が満杯になる程度の遺物が出土した。遺物は古墳時代後期のものと平安時代のものがあり、土器類のほか砥石や土製紡錘車、スラグなどが含まれる。一部のトレンチより石組遺構の可能性のある石列状の遺構が確認された。

⑥笛吹市石橋地区（昆沙門遺跡）

⑤地点の西側にあたる。⑤地点と同様、古墳時代後期と平安時代の遺物が大量に出土した。トレンチの一部から竪穴住居跡の可能性があるプランと、礎石状の遺構が包含層を掘りきったところで確認された。

⑦笛吹市石橋地区（昆沙門遺跡近接）

昆沙門遺跡の包蔵地範囲からやや外れ西側に位置している。遺物包含層は60cm程度の厚さで確認され、古墳時代から平安時代の遺物が発見された。

なお、平成30年に南側の地点を試掘した際は、遺構・遺物は確認されていない。

⑧笛吹市藤垈地区

調査地点は、甲府盆地南縁にある曽根丘陵の最高峰、坊ヶ峯の麓に位置している。坊ヶ峯の山裾に沿って沢が流れており、調査地点は沢に隣接している。土層の堆積は河川由来のものが主体で、１点時期不明の土器小破片が出土したが、流れ込みと判断できる。

⑨笛吹市藤垈地区

境川パーキングエリア上り線の北側に位置している。パーキングエリア建設時には、馬乗山1号墳・2号墳が発掘調査されている。調査地点は古墳が位置していた台地の先端部から北斜面で、表土層以下はすぐ地山を確認した。

調査所見

笛吹市境川町内における試掘調査を50％程度完了することができている。石橋地区にある昆沙門遺跡は、こ

れまで大規模な調査履歴がなかったが、厚い遺物包含層中より、古墳時代後期および平安時代の２時期の遺物が多量に出土し、包含層以下から遺構も検出している。当地の古代における拠点的な集落として、重要な遺跡であると推定される。坊ヶ峯の先端部である藤垈地区周辺では、遺構・遺物ともに確認されなかったが、古墳や窯跡も近接しており、なおも注意が必要である。今後も継続的に未調査地点の試掘・確認調査を実施し、適切に埋蔵文化財の保護措置を執る。

１－２　本線　甲府市内

調査地点の環境

甲府市における調査地点は、笛吹川左岸の氾濫原から曽根丘陵先端部にあたる旧東八代郡中道町（甲府市上曽根町・白井町）、および笛吹川右岸、荒川両岸の甲府市小曲町・西下条町・大津町・高室町におよぶ地域である。笛吹川左岸の氾濫原には、曽根丘陵に由来する舌状台地や独立丘陵もいくつかみられるほか、曽根丘陵を根源とする沢や小河川によって小扇状地を形成している場所もある。また、盆地西部を流れる釜無川は、中世後半頃は現在の荒川付近を流路としていたといわれている。このため、現在の荒川河口周辺は、釜無川と笛吹川の両方の複雑な堆積作用が確認される。

河川由来の堆積が厚く、周知の埋蔵文化財包蔵地はほとんど知られるところにない。甲府市上曽根町内に位置する、中世城郭の勝山城が特筆される。

調査の結果

①白井町鳶地区（新発見遺跡）

曽根丘陵に由来する沢が形成した小扇状地上に位置している。調査地点の一部のトレンチより、地表下40cm程度において小礫を含む黒褐色土の遺物包含層を確認した。遺物包含層からは、古墳時代から平安時代頃とみられる数十点の土器片が出土した。遺物には摩耗を受けるものと摩耗がほとんどないものが認められる。

②白井町鳶地区（新発見遺跡）

甲府市①地点で、遺物の出土があった地点の北側に隣接する。①地点の調査成果からでは、出土遺物が流れ込みである可能性も考えられたが、②地点を調査した結果、遺物を伴って遺構が検出された。平安時代の竪穴住居跡のカマド部分と推定される遺構も見つかり特筆される。湧水があったため、平安時代以下の遺構面は未確認である。隣接する地点で継続的に試掘調査を進め、新しく発見された遺跡の範囲を確定する。

③上曽根町中村地区

地点の中でも東西に調査区が分かれる。浅い谷を挟んで東側の調査区は独立丘陵上に位置している。当該区は踏査により遺物が表面採集できたものの、表土を除去するとすぐ地山面となり、地中から遺物の出土はなく、遺構も検出されなかった。対して西側は勝山城の領域に近い位置にあるが、勝山城に伴うような遺構の存在は確認できなかった。

④西下条町（新発見遺跡か）

荒川の右岸堤防に隣接している。河川のすぐそばにも関わらず土層は安定した堆積であり、地表下1.4ｍより

ピットが１基確認された。摩耗した土器片が１点出土しているが、時期は不明である。

⑤西下条町（新発見遺跡か）

荒川の右岸に位置し、現状の集落内に調査箇所を設定した。当該集落は、明治年間の地形図にも示されており、その中心は当地点の北側に位置する諏訪神社である。地表下30cm以下の砂層より、明治期の陶磁器が20点程度出土したほか、地表下70cm程度より埋桶遺構を１基検出した。明治期の遺物の出土状況から、近世頃まで集落の形成が遡る可能性もあり、周辺の継続調査により本調査の必要性を判断する。

調査所見

甲府市内において、笛吹川左岸では、これまで大規模な開発行為が少なかったこともあり、遺跡の分布は希薄とされていた。しかし、今回の試掘調査により白井町鳶地区で新たに古代の遺跡が発見された。白井という地名については、古代の行政区分「白井郷」にもみられることから、注意が必要である。

荒川の右岸地区では、西下条町地区の２地点で新たに埋蔵文化財が確認されている。いずれの地点についても周辺を継続的に調査することで、本調査による記録保存の必要性を判断していく必要がある。

第２表　中央新幹線試掘調査一覧　甲府市

No.			調査概要						調査情報				備　　考	
	調査地点	調査日	包蔵地区分	調査対象面積（㎡）	試掘調査面積（㎡）	調査率（%）	地形	最大深度（m）	遺構の有無	遺物の有無	遺構確認深度（m）	時代	出水深度	補足説明
1	甲府市白井町	2月25日～27日	包蔵地外（新発見）	1277	40	3.1%	丘陵扇状地	1.9	無	有	―	古墳？	有 GL-1.0m	曽根丘陵に由来する沢が形成した小扇状地に位置している。調査地点の一部より遺物包含層を確認し、数十点の土器片が出土した。
2	甲府市白井町	6月3日～4日	包蔵地外（新発見）	619	16	2.6%	扇状地	0.9	有	有	GL- 0.7m	平安	有 GL-0.7m	No.1の遺物が出土した地点に隣接する。平安時代の竪穴住居跡のカマド部分と見られる遺構が1基検出された。隣接地点を継続調査し、新発見遺跡の範囲を確定していく必要がある。
3	甲府市上曽根町	6月11日～13日 6月17日	包蔵地外	1266	65	5.1%	造成台地丘陵	3.0	無	無	―	―	無	地点東側の独立丘陵上では、遺物を表面採集できるものの遺物包含層は確認されなかった。
4	甲府市　西下条町	3月14日	包蔵地外（新発見か）	184	16	8.7%	平地	3.5	有	有	GL- 1.4m	―	有 GL-3.3m	摩耗した土師器片1点と、ピットが1基確認された。時期を特定できず、隣接地点を継続調査し、保護対象となる遺跡かどうか確認を行う必要がある。
5	甲府市西下条町	2月25日 3月14日	包蔵地外（新発見か）	382	52	13.6%	平地	2.3	有	有	GL- 0.6m	不明	有 GL-1.9m	明治期の遺物が20点程度出土したほか、埋桶が1基検出された。

１－３　本線　中央市内

調査地点の環境

中央市北部の旧玉穂町、旧田富町は甲府盆地の低地に位置しており、この盆地底部区間を東西に横断する形でリニア中央新幹線が建設される予定である。広域に望めば釜無川の扇状地扇端部に位置し、度重なる河川氾濫によって自然堤防や旧河道となる低平地といった視認しにくい微地形が形成されている。堆積土層は釜無川や市内を南北に流れる小河川の氾濫により、粒径の細かい砂層やシルト層が主体となる。地点により洪水堆積とみられ

る砂礫層が確認される。

埋蔵文化財は、建設予定地点を併走する新山梨環状道路南部区間の建設に伴って実施した試掘・確認調査によって、概ね把握できている状況にある。周知の埋蔵文化財包蔵地となっているものは平安時代や中世のものが多く、上窪遺跡、平田宮第２遺跡、小井川遺跡が代表的である。とくにこれらの遺跡は微高地上に連綿と遺跡を形成しているため、遺構面が複数確認されるため、注意が必要である。

第３表　中央新幹線試掘調査一覧　中央市

No.			調査概要						調査情報				備　　考	
	調査地点	調査日	包蔵地区分	調査対象面積（㎡）	試掘調査面積（㎡）	調査率（%）	地形	最大深度（m）	遺構の有無	遺物の有無	遺構確認深度（m）	時代	出水深度	補足説明
1	中央市成島	7月18日	包蔵地外	481	13.5	2.8%	河川氾濫原	2.4	無	無	―	―	有 GL−1.0m	トレンチの一部で自然流路と思われる溝状の落ち込みがあったが、遺物の出土はなかった。
2	中央市成島	12月16日・18日	上窪遺跡隣接			0.0%	河川氾濫原				―	―	有 GL− m	
3	中央市上三條	2月22日 3月13日	包蔵地外	849	50	5.9%	扇状地 氾濫原 平地	2.5	無	有	―	―	有 GL−1.1m	概ね河川堆積層が確認されたが、地点東側では微高地を形成していた可能性が想定できる。
4	中央市上三條	5月22日 6月14日	包蔵地外	1134	17	1.5%	河川氾濫原	2.4	無	有	―	―	有 GL−0.7m	河川堆積層が主体で、勢いよく湧水する。極小破片の遺物が1点出土したが、流れ込みと判断できる。
5	中央市上三條	2月4日	包蔵地外	320	30	9.4%	平地 氾濫原	3.5	無	有	―	―	有 GL−1.2m	排土内より土器片が1点出土したが、湧水による壁面の崩落が激しく精査できず。
6	中央市上三條	3月19日	包蔵地外	208	12	5.8%	平地	2.7	無	無	―	―	有 GL−2.5m	地表下2.5mより安定したシルト層を確認したが、湧水により崩落し精査できず。
7	中央市布施	2月15日	小井川遺跡隣接	550	24.2	4.4%	氾濫原	2.2	無	有	―	中世〜近世	有 GL−2.0m	小井川遺跡の範囲より東側。地表下1.4m程度に遺物包含層を確認、主として中世の土器が十点程度出土した。
8	中央市布施	7月29日	小井川遺跡隣接	488	16	3.3%	氾濫原	2.5	有	無	GL− 1.6m	中世	有 GL−1.8m	上記（2月15日調査）地点に隣接。地表下1.6mよりピットを1基検出した。
9	中央市布施	3月6日	小井川遺跡	1058	25	2.4%	氾濫原	3.0	有	無	GL− 1.6m	不明	有 GL−3.0m	小井川遺跡の東端部。地表下1.6m、2.9mのそれぞれで溝状遺構を確認。2面の遺構面が想定される。
10	中央市布施	2月12日	小井川遺跡	853	62.1	7.3%	氾濫原	3.8	有	有	GL− 1.2m	中世	有 GL−3.2m	地表下1.1mで水田畦畔を確認。同層より中世の土器片が出土。
11	中央市布施	2月13日	小井川遺跡	200	37.6	18.8%	氾濫原	3.3	無	有	―	中世	有 GL−2.6m	新環状道路に伴う発掘調査で中世寺院が確認された地点に南接する。中世土器片が15点出土した。
12	中央市布施	5月13日 5月16日〜17日	臼井阿原上河原遺跡	4309	45	1.0%	氾濫原	3.0	無	無	―	―	有 GL−0.5m	平成30年12月に試掘調査を実施したが湧水が激しかったため、排水環境を整えて再度調査を実施した。地表下3.0mまで河川堆積層が確認された。

調査の結果

①成島字町東・町西地区

地点の中でも東西に調査区が分かれる。いずれの地点からも、地表下100cm以下に河川由来の砂礫層が認められ、出水する。中世末の釜無川の流路は、成島地内を流れていたとあり、氾濫原と想定される。地点西側では地

表下60cmにレンズ状の砂層堆積が認められたが、自然流路と判断した。

②成島　地区

地表面下約1.2m、2.1mより水田畦畔を検出した。周辺の上窪遺跡の調査成果を援用し、平安時代後半～鎌倉時代のものと推測される。調査対象地の東端では、河川と思われる落ち込みと河川堆積が確認でき、水田面の東端部と推測される。

③上三條字三宮司　地区

地表下90cmより、自然流路が検出された。東西方向にトレンチを設定し、西側では河川堆積が主体的で、東側ではシルト層などの土壌化した堆積を確認した。遺構・遺物は検出されなかったが、当地点より東側に微高地が形成されている可能性が考えられる。

④上三條字村添　地区

地表下70cmより河川堆積による砂礫層が認められ、激しく出水する。排水作業をしながら掘削を行い、地表下180cm程度に褐灰色シルト質砂層が薄く認められたが、遺構は検出されない。同層より１点のみ土師質土器の小片が出土したが、流れ込みと想定される。砂層以下は再び砂礫層となり、河川の旧流路と想定される。

⑤上三條字村添　地区

④地点より、東西の道路を挟んで南側にあたる。④地点と同様な堆積状況だが、排土内より須恵器の破片が１点出土している。

⑥上三條字村添　地区

④地点に比較して、粒径の細かい河川堆積層が確認される。地表下250cmに暗褐色のシルト層が確認されており、小井川遺跡の調査事例などから当該シルト層が文化層となる可能性がある。激しく出水したため精査できておらず、継続的な周辺調査が必要である。

⑦布施字小阿原　地区（小井川遺跡隣接）

小井川遺跡の範囲よりやや東側の包蔵地外にあたる。地表下140cm程度に遺物包含層となるシルト層が確認され、主として中世の土器が十点程度出土している。地表下200cm以下は砂層となり、出水する。

⑧布施字小阿原　地区（小井川遺跡隣接）

⑦地点の西側に隣接する。地表下160cmでピットが１基検出された。また、地表下180cm程度に黒褐色土層が認められ、この層が水田畦畔を形成する基盤層となる可能性も想定される。

⑨布施字小阿原　地区（小井川遺跡）

小井川遺跡の東端に位置する。地表下160cmおよび290cmのそれぞれで、溝状遺構が確認された。地表下300cmまで出水せず、安定した微高地が形成されている。

⑩布施字小阿原　地区（小井川遺跡）

地表下1.1ｍに水田の畦畔を検出した。水田遺構覆土より、平安時代～中世の土器片が出土している。

⑪布施字小阿原　地区（小井川遺跡）

新山梨環状道路南部区間建設時に発掘調査された小井川遺跡のうち、中世寺院跡が発見された地点に南接している。地表下1.2ｍ以下に暗灰色シルト層が厚く堆積しており、同層より中世のかわらけ片などが15点出土した。

⑫布施字壱丁田・臼井阿原字上河原　地区（臼井阿原上河原遺跡）

周知の埋蔵文化財包蔵地である臼井阿原上河原遺跡に位置している。平成30年12月に試掘調査を実施したところ、激しく出水し、精査が不可能であった。水中ポンプなどの排水環境を整えて再度調査を実施したが、河川堆積層が主体で遺構・遺物の検出はなかった。

調査所見

リニア中央新幹線は、中央市内に東西の大きなトレンチを開けるように建設が予定されている。対象地に所在する遺跡の多くは、路線とほぼ併走する新山梨環状道路建設に伴う発掘調査で把握されている。しかし、地中に埋没した微高地は、わずかな距離の差で様相を異にすることもあり、同市内においても全線に渡り試掘・確認調査が不可欠といえる。新山梨環状道路の建設時に発掘調査が行われた小井川遺跡は、中世寺院などの貴重な遺構が発見されているが、本年の試掘調査では、遺跡の東側にも中世段階と想定される水田遺構が確認されている。一方、臼井阿原上河原遺跡では、河川堆積が主体で、遺構・遺物は一切確認されなかった。当遺跡は表面採集資料をもとに遺跡の存在が想定されていたが、表土自体が他所から運ばれてきている可能性も想定する必要がある。

依然として、用地の取得が進んでいない地点もあり、今後も試掘調査による早急な遺跡分布の把握が必要である。

１－４　本線　南アルプス市内

調査地点の環境

リニア中央新幹線は、南アルプス市の東南部、旧若草町および旧甲西町を横断する。市内を流れる滝沢川および坪川は、巨摩山地を水源とし複数の扇状地を造りだし、これらが重なり合うことで複合扇状地を生み出している。また、旧若草町藤田地区は釜無川の右岸にあたり、幾重の洪水によって氾濫原が形成されている。かねてより遺跡の希薄な地域とされていたが、埋蔵文化財センターが甲西バイパス建設工事に伴って実施した発掘調査では、多くの遺跡が地下深くから発見され、洪水堆積によって遺構が埋没していた状況も確認されている。このうち、本線は大師東丹保遺跡や宮沢中村遺跡周辺にも建設される予定となっているが、両遺跡は弥生・古墳時代から中世・近世に至るまで複数の遺構面が認められる遺跡であり、注意が必要である。

調査の結果

①藤田字蹴出　地区

１号試掘トレンチより杭列を検出したが、これを打ち込んだ土中より近現代の遺物が認められたため、保護の対象となる遺構ではないと判断する。調査地点には砂礫層が厚く堆積しており、釜無川左岸の中央市臼井阿原地

区と同様な状況である。砂礫層の堆積時期について、今後も検討する必要がある。

②田島字北河原　地区

旧田島集落に伴う埋蔵文化財を想定して調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。堆積土層は粒径の細かい砂礫層が主体で、滝沢川の氾濫原と想定される。なお、隣接地点より近世の陶磁器が表採されるため、継続して周辺を調査していく。

③大師　地区（大師東丹保遺跡隣接）

大師東丹保遺跡、宮沢中村遺跡より150ｍ西方にあたる。地表下約30cmより遺物を包含する褐色粘性土が確認され、溝状遺構、土坑が検出された。粘性土以下には砂礫層が認められる。

④宮沢字西宮沢　地区

調査区は日本アビオニクス山梨工場の跡地に位置しており、工場建物があった位置は基礎工事により深く撹乱されている。地山層が残存していたトレンチのうち、近代以降に帰属する土坑および溝状遺構を検出したが、保護の対象となる遺構ではないと判断する。

⑤荊沢字道西　地区

秋山川の右岸、扇状地の先端部に位置している。耕作土下には砂層・礫層・シルト層が互層に堆積している。地表下180cmには、やや土壌化した灰褐色砂質シルト層が認められ、この土層の排土内から１号トレンチより１点、２号トレンチより２点の遺物を発見した。遺物の年代は中近世と想定される。地表下80cm程度より出水があり、遺構面を精査することができなかったため、排水環境を整え継続的に周辺を調査する。

第４表　中央新幹線試掘調査一覧　南アルプス市

No.			調査概要						調査情報				備　　考	
	調査地点	調査日	包蔵地区分	調査対象面積（㎡）	試掘調査面積（㎡）	調査率（%）	地形	最大深度（m）	遺構の有無	遺物の有無	遺構確認深度（m）	時代	出水深度	補足説明
1	南アルプス市藤田	6月19日～20日	包蔵地外	2200	125	5.7%	河川氾濫原	2.5	無	無	―	―	有 GL-0.8m	近現代の遺物を伴って杭列が確認されたが、保護の対象とはならない。激しく湧水する。
2	南アルプス市田島	5月27日～29日	包蔵地外	1544	89	5.8%	扇状地	3.0	無	無	―	―	有 GL-1.0m	滝沢川の左岸に位置する。粒径の小さい礫を含む河川堆積が主体。隣接地点に陶磁器片が表採でき要警戒。
3	南アルプス市大師	2月19日～20日	大師東丹保遺跡近接	410	24	5.9%	平地	2.0	有	有	GL- 0.3m	奈良～近世	有 GL-1.5m	大師東丹保遺跡の西側に位置する。溝および土坑が検出され、遺物を伴う。
4	南アルプス市宮沢	6月11日～14日	包蔵地外	4840	270	5.6%	扇状地氾濫原	5.6	無	無	―	―	有 GL-2.5m	近代以降に帰属する遺構（土坑、溝）を確認したが、保護の対象とならない。
5	南アルプス市荊沢	7月22日	包蔵地外（新発見）	590	20	3.4%	扇状地	3.3	無	有	―	中世近世	有 GL-0.8m	秋山川の右岸に位置する。地表下1.8ｍより遺物包含層を確認。遺物が数点出土した。

調査所見

南アルプス市内において、本年試掘調査が実施できたのは５地点に留まっており、未だ全体的な埋蔵文化財の調査計画の見通しが立っていない。このような状況の中でも、大師地区では大師東丹保遺跡や宮沢中村遺跡の範

囲が拡大する様相が確認され、荊沢地区では新たに遺跡のある可能性が指摘できるなど、扇状地扇端部における遺跡分布が想定される。

また、藤田地区や田島地区においては、過去に大規模開発が少なく、埋蔵文化財も希薄な分布となっている。試掘調査の実施は、まとまった用地の取得が前提だが、これらの地区においては小範囲であっても積極的に調査を実施し、埋蔵文化財の有無を早急に把握していく必要がある。

１－５　本線　南巨摩郡富士川町内

調査地点の環境

リニア中央新幹線は、富士川町内の小林、天神中條、最勝寺地区を縦断する。小林、天神中條地区は、戸川や利根川によって形成された複合扇状地にあり、本線予定地はその扇央部から扇端部にかかる。最勝寺地区の戸川の右岸では、櫛形山層から河岸段丘が形成される。路線内には大規模な開発行為が少ないため、周知の埋蔵文化財包蔵地はほとんど把握されておらず、最勝寺西ノ入遺跡が位置する程度である。

調査の結果

①小林字河原堀田　地区

表土層下は、130cm厚の砂礫層の堆積が認められ、それ以下は粘土層が確認された。遺構や遺物は検出されていない。

②小林字回り木　地区　（新発見遺跡）

利根川公園内の旧富士川町民体育館跡地に位置している。調査では、堤体幅10ｍ程度の堤防遺構が検出された。旧利根川の左岸であり、1998年刊行の『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』では、“堤防遺跡推定地”となっており、調査で検出された遺構も推定ライン上となっている。遺物は近世以降と思われる陶磁器片が１点出土しているが、明確な築造年代は不明である。川表は石積みが施されており、整層積みとなっていることから、近世まで遡る可能性もある。川裏側には妙諸寺や集落が位置していることから、これらは地域において重要な歴史資料と捉えることができ、本調査による記録保存の対象とする。

③天神中條字北河原　地区

調査区内より、厚く堆積する砂礫層が検出された。これらは利根川に由来する堆積と考えられ、砂礫層の上層には、旧水田面と考えられる粘質土が堆積していた。今回確認された旧水田は近代のものと考えられ、本地点の埋蔵文化財保護措置は不要と判断する。

④天神中條字村西　地区

地表下100cmの明褐色粘性土から、摩耗した土器が１点出土した。時期も不明であり、摩耗の状況から流れ込みと想定されるが、継続的に周辺の調査を実施していく。

⑤最勝寺猿頭　地区

地表下140cmに明褐色シルト層が確認され、足跡を検出したことから、水田遺構と想定される。ただし、共伴する遺物が出土していないため、今後も継続的に周辺を調査し、本調査の必要性を判断する。

⑥最勝寺字西ノ入　地区

地表下150cmまでは造成土が確認される。それ以下は戸川に近い北側では河川堆積物が、山麓に近い南側では山麓部由来の堆積物が確認された。

⑦最勝寺西ノ入　地区（最勝寺西ノ入遺跡隣接）

２カ所のトレンチを設定し、そのうち北側の１カ所のトレンチより、縄文時代の遺構・遺物が発見された。遺構面は地表下45cm程度にあり、遺物包含層からは25点程度の縄文時代中期の遺物が出土した。遺構は、竪穴住居跡の可能性があるプラン１基と、土坑状のプラン４基を確認した。最勝寺西ノ入に近接しており、遺跡の範囲が当該地点に拡大することが想定される。遺構面は戸川に向かって緩く傾斜しているが、現地表は段々畑あるいは宅地として整地されており注意が必要である。

⑧最勝寺西ノ入　地区（最勝寺西ノ入遺跡隣接）

最勝寺西ノ入遺跡の南側にあたる。調査地点は段々畑となっている。地表下70cmで地盤層とみられる土層が確認され、遺構・遺物の発見はなかった。

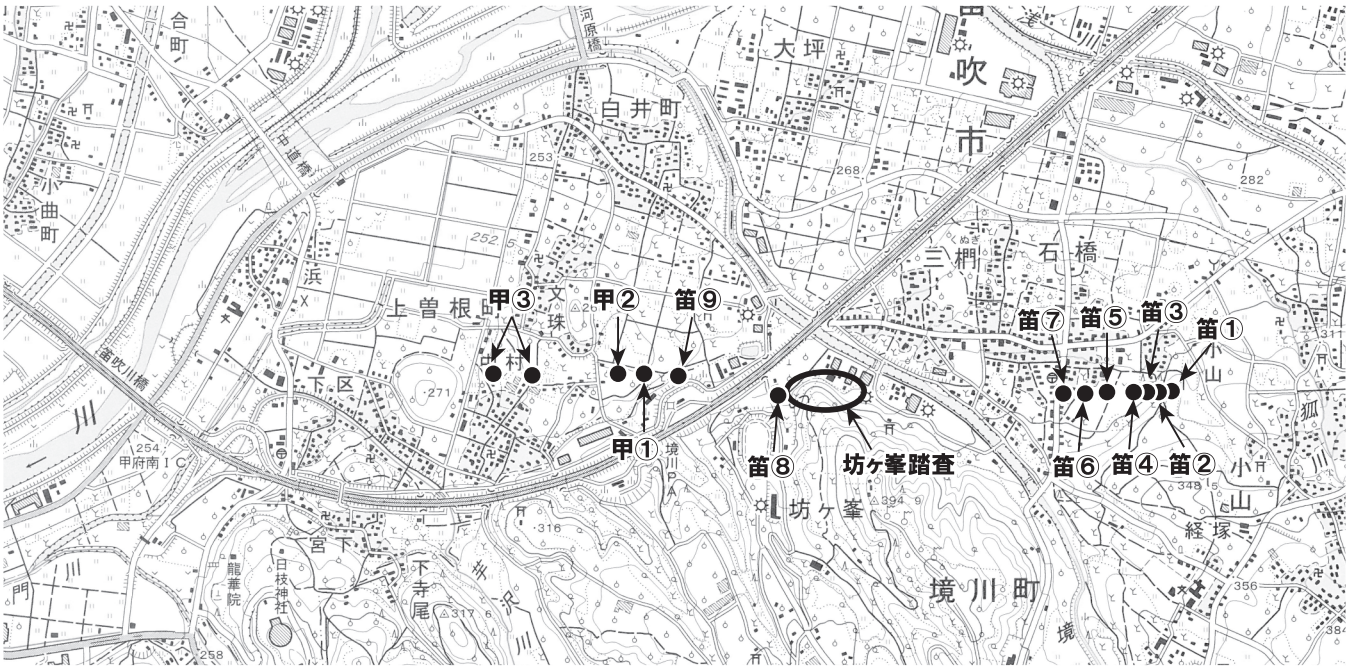
調査所見

富士川町におけるリニア本線予定地点は、これまで大規模な開発行為も少なく、また洪水堆積が支配的であることから、埋蔵文化財包蔵地があまり把握されていない地域である。本年に調査を実施した８地点のうちにも、洪水とみられる河川由来の堆積が多く確認されている。一方で、小林地区では、堤防推定地より堤防遺構の下半部が確認された。具体的な遺跡の年代は不明だが、近世以降の築造であっても、水との戦いを物語る地域にとっての重要な遺跡であり、保護対象として記録保存のための発掘調査を実施する必要がある。また、最勝寺猿頭地区では時期不明の水田遺構が検出されており、継続的に周辺の調査を行っていく。最勝寺西ノ入遺跡では、北側に隣接する地点において、縄文時代中期の遺構・遺物が発見された。用地の取得状況に応じて随時調査を実施していく。

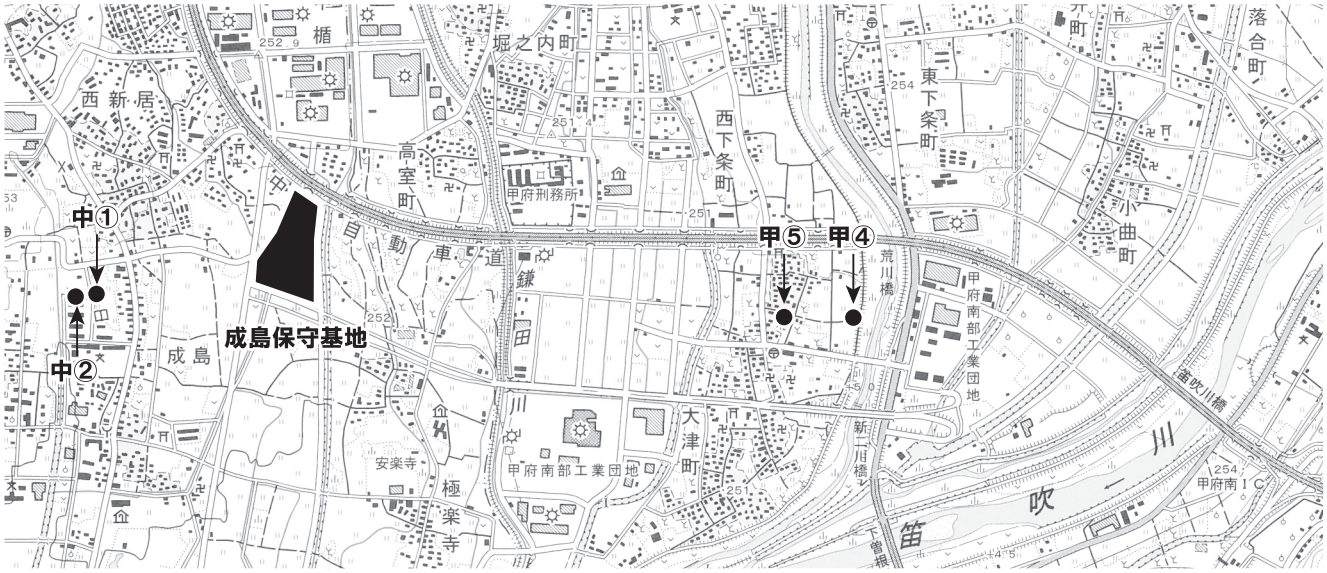
第５表　中央新幹線試掘調査一覧　南巨摩郡富士川町

No.			調査概要						調査情報				備　　考	
	調査地点	調査日	包蔵地区分	調査対象面積（㎡）	試掘調査面積（㎡）	調査率（%）	地形	最大深度（m）	遺構の有無	遺物の有無	遺構確認深度（m）	時代	出水深度	補足説明
1	富士川町小林	3月1日	包蔵地外	145	17.7	12.2%	河川氾濫原	3.0	無	無	―	―	有 GL-2.5m	複合扇状地の先端部に位置する。砂礫層および粘土層が確認された。
2	富士川町小林	10月28日 30日・31日	包蔵地外（新発見）	3700	164.1	4.4%	河川	3.0	有	有	―	―	無	旧利根川の旧堤防推定地であり、幅およそ10ｍの堤防跡が検出された。川表は石積みが認められた。堤体から近世以降の陶磁器が出土した。
3	富士川町天神中條	6月25日	包蔵地外	477	26.64	5.6%	河川氾濫原	4.4	無	無	―	―	無	利根川の右岸に位置する。河川堆積層が確認された。
4	富士川町天神中條	2月27日	包蔵地外	114	20	17.5%	丘陵	2.6	無	有	―	―	無	地表下1.0ｍより時期不明の土器片が1点出土した。流れ込みとみられる。
5	富士川町最勝寺	2月27日	包蔵地外（新発見）	1011	28.2	2.8%	氾濫原	4.5	有	無	GL- 1.4ｍ	不明	無	地表下1.4ｍの明褐色土に足跡が検出された。水田遺構とみられる。出土遺物がなく、周辺を継続調査し検討する。
6	富士川町最勝寺	3月12日	包蔵地外	660	36	5.5%	河川扇状地氾濫原	3.8	無	無	―	―	無	山麓部由来の堆積と、河川堆積層がそれぞれのトレンチから確認された。
7	富士川町最勝寺	8月27日	最勝寺西ノ入遺跡近接	388	13.5	3.5%	丘陵扇状地	2.4	有	有	GL- 0.5ｍ	縄文	無	縄文時代中期後半の土器とそれを伴う遺構を発見した。最勝寺西ノ入遺跡の範囲が当該地点まで広がるか。
8	富士川町最勝寺	2月26日	最勝寺西ノ入遺跡近接	150	11.3	7.5%	扇状地	2.2	無	無	―	―	無	斜面地中腹に位置する。地表下70cmで地山層が確認された。

笛吹市・甲府市中道地区



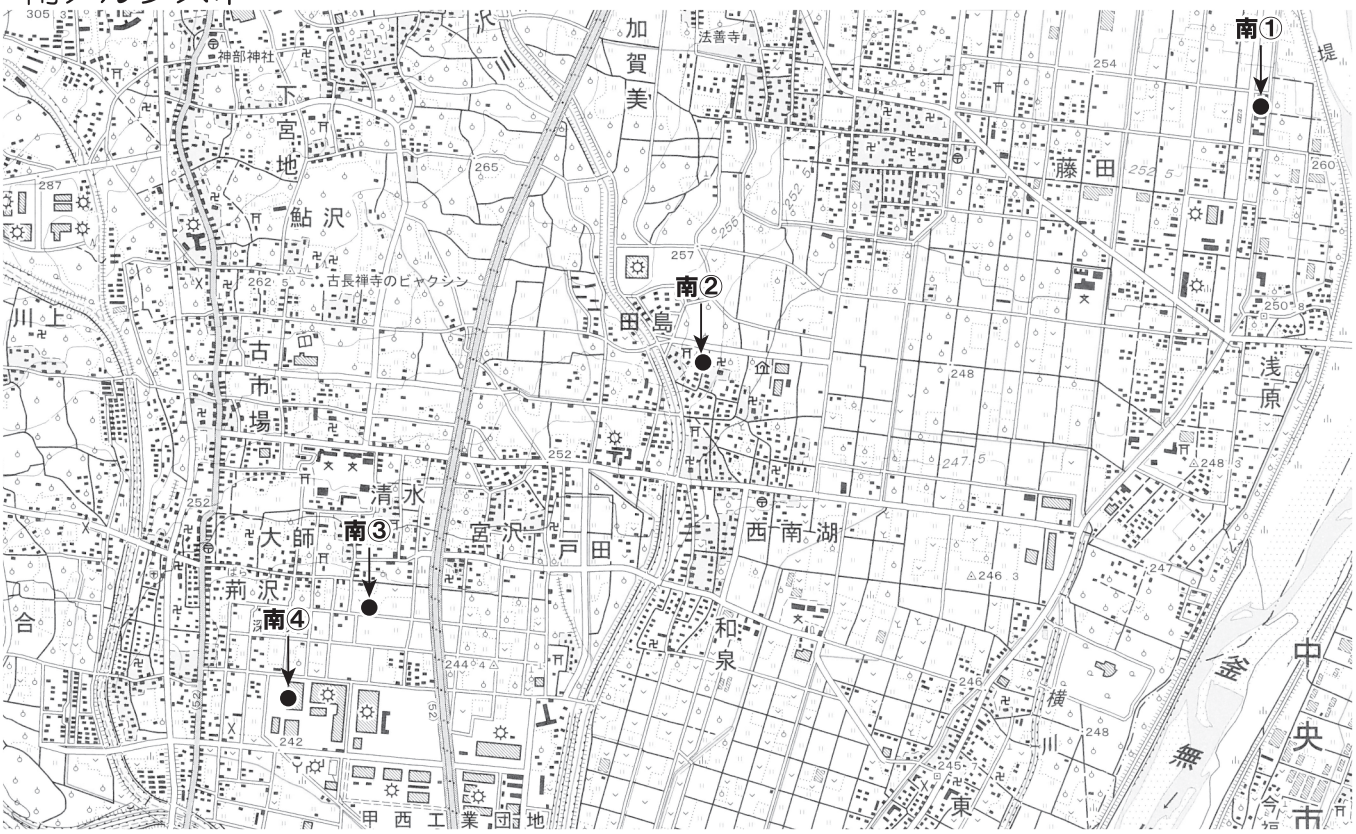
甲府市・中央市東部



中央市

第２図　中央新幹線事業事業位置図①

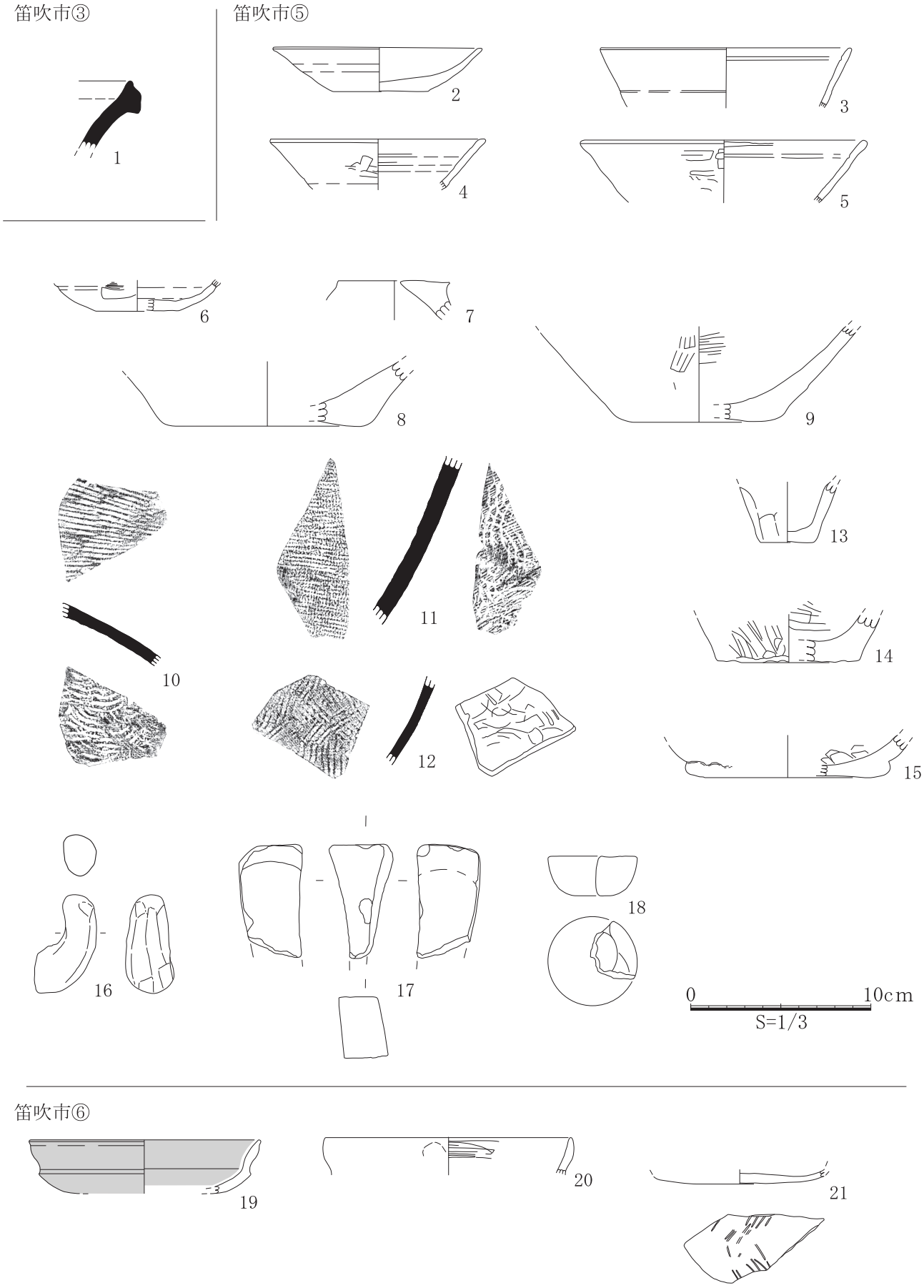
南アルプス市



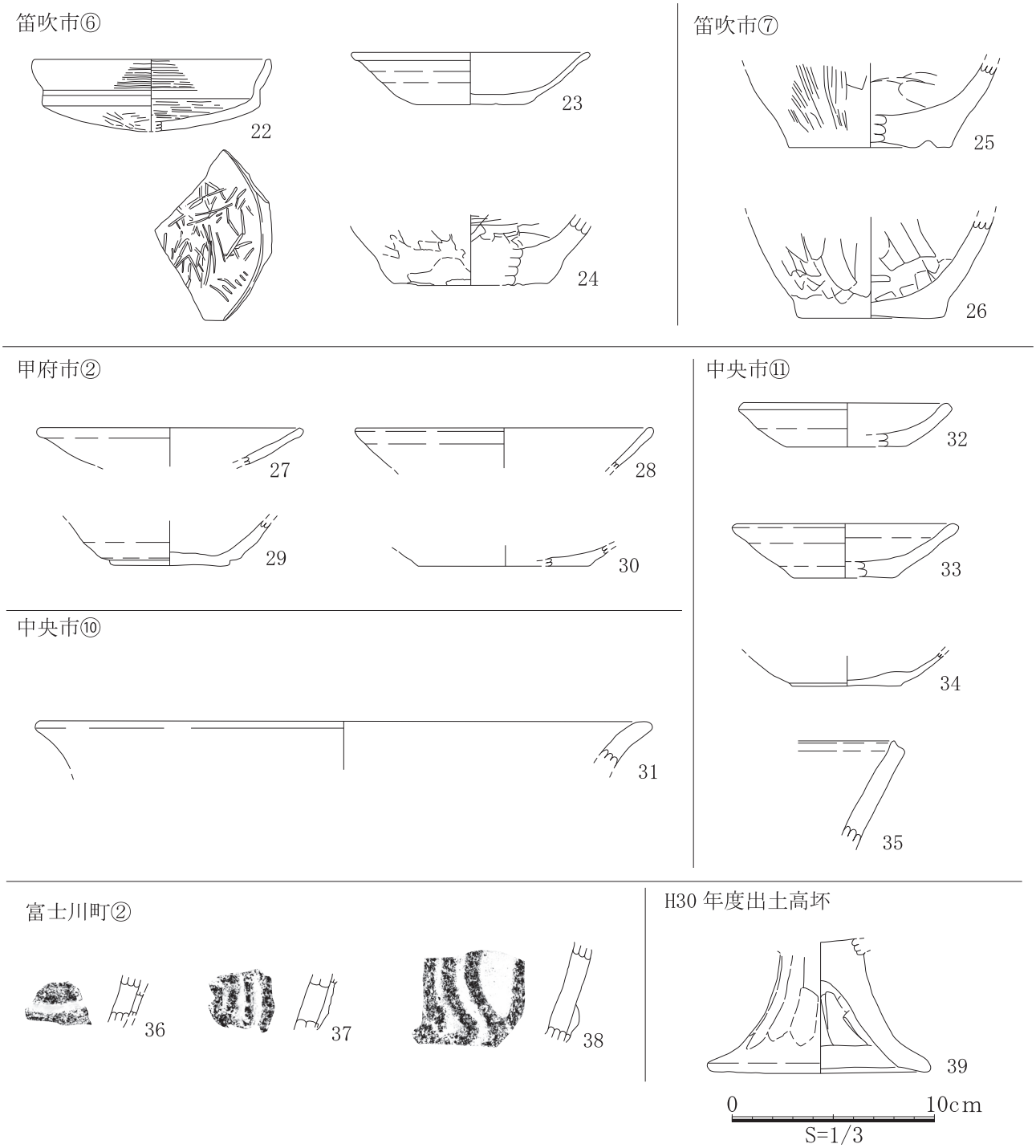
南アルプス市甲西地区・富士川町

富士川町高下地区

第３図　中央新幹線事業事業位置図②



第４図　中央新幹線事業試掘調査出土遺物（１）



第５図　中央新幹線事業試掘調査出土遺物（２）

第６表　出土遺物観察表（中央新幹線（品川ー名古屋間）建設工事）

報告番号	図版番号	出土地点	器種分類		寸法（cm）			調整技法		胎土色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
			種別	器形	口径（長さ）	器高（幅）	底径（厚さ）	内外面	底面						
1	第４図	笛吹市③	須恵器	壺	―	(3.9)	―	ナデ	―	7.5YR4/1	密	良好	破片	古墳	
2	第４図	笛吹市⑤	土師器	坏	11.6	2.5	5.3	ロクロナデ	回転糸切り	5YR7/6	密　白色・赤色粒子	良好	70%	平安	
3	第４図	笛吹市⑤	土師器	坏	13.8	(2.3)	―	ロクロナデ	―	10YR7/3	密	良好	破片	平安か	
4	第４図	笛吹市⑤	土師器	坏	11.8	(2.8)	―	ロクロナデ	―	5YR6/6	密	良好	破片	古墳か	
5	第４図	笛吹市⑤	土師器	坏	15.6	(3.5)	―	ロクロナデ、ヘラナデ	―	10YR3/2	密	良好	破片	平安か	
6	第４図	笛吹市⑤	土師器	坏	―	(1.8)	4.6	ナデ、ヘラナデ	―	5YR6/6	密	良好	破片	古墳か	
7	第４図	笛吹市⑤	土師器	脚高高台付坏	―	(2.2)	―	ロクロナデ	付高台	5YR5/6	やや密	良好	破片	平安	
8	第４図	笛吹市⑤	土師器	甕	―	(3.6)	10.4	ナデ	―	外面：7.5YR6/6 内面：5YR5/6	密　赤色粒子、径1～2mmの砂粒	良好	破片	古墳か	
9	第４図	笛吹市⑤	土師器	甕	―	(5.3)	8.0	外面：タテハケ 内面：ヨコハケ	―	5YR7/6	密　白色粒子	良好	破片	古墳	
10	第４図	笛吹市⑤	須恵器	甕	―	―	―	外面：タタキ 内面：同心円文	―	7.5Y5/	密	良好	破片	古墳	
11	第４図	笛吹市⑤	須恵器	甕	―	―	―	外面：タタキ 内面：同心円文	―	2.5Y7/1	密	良好	破片	古墳	
12	第４図	笛吹市⑤	須恵器	甕	―	―	―	外面：タタキ 内面：オサエ	―		密	良好	破片	古墳	
13	第４図	笛吹市⑤	土師器	甕	―	(3.4)	3.0	ヘラケズリ、指頭圧痕	―	5YR5/6	やや粗　赤色粒子	良好	破片	古墳	
14	第４図	笛吹市⑤	土師器	甕	―	(2.7)	5.2	内面：ヨコハケ 外面：タテハケ	木葉痕	7.5YR6/6	やや密	良好	破片	古墳～平安	
15	第４図	笛吹市⑤	土師器	甕	―	(2.4)	9.2	内面：ヘラナデ 外面：ナデ	木葉痕	5YR5/6	やや密	良好	破片	古墳～平安	
16	第４図	笛吹市⑤	土師器	甑	―	―	―	ケズリ	―	5YR5/6	密　赤色粒子、径1mmの砂粒	良好	破片	古墳	
17	第４図	笛吹市⑤	石製品	砥石	(6.3)	3.6	3.4	―	―	―	―	―	50%	―	割れ面以外の５面に擦痕
18	第４図	笛吹市⑤	土製品	紡錘車	(3.2)	2.2	(2.6)	ナデ	―	5YR5/6	密	良好	30%	古墳	
19	第４図	笛吹市⑥	土師器	坏	12.6	3.0	(8.0)	ロクロナデ	―	外面：7.5YR5/4 内面：7.5YR3/3	密　赤色粒子	良好	破片	古墳	
20	第４図	笛吹市⑥	土師器	坏	13.6	(2.1)	―	ロクロナデ、内面：ヨコミガキ	―	7.5YR7/3	密	良好	破片	古墳	
21	第４図	笛吹市⑥	土師器	坏	―	(0.8)	(7.0)	ロクロナデ	ミガキ	外面：7.5YR5/4 内面：7.5YR6/4	密　赤色粒子	良好	破片	古墳	
22	第５図	笛吹市⑥	土師器	坏	11.8	3.6	10.8	ミガキ	ミガキ	外面：10YR4/2 内面：7.5YR6/3	緻密	良好	40%	古墳	
23	第５図	笛吹市⑥	土師器	坏	11.8	2.6	5.5	ロクロナデ	回転糸切り	2.5YR6/6	密	良好	80%	平安	
24	第５図	笛吹市⑥	土師器	甕	―	(3.0)	7.6	ヘラナデ	ヘラナデ	5YR5/6	密	良好	破片	古墳か	
25	第５図	笛吹市⑦	土師器	甕	―	(4.2)	8.0	外面：タテハケ 内面：指頭圧痕	木葉痕	5YR5/6	密	良好	破片	平安か	
26	第５図	笛吹市⑦	土師器	甕	―	(5.0)	7.2	タテハケ	木葉痕	7.5YR6/6	密	良好	破片	平安か	
27	第５図	甲府市②	土師器	坏	12.8	(1,9)	―	ロクロナデ	―	外面：5YR6/6 内面：7.5YR4/2	密　白色・赤色粒子、雲母微量	良好	破片	平安	
28	第５図	甲府市②	土師器	坏	14.6	(2.0)	―	ロクロナデ	―	5YR6/6	密　赤色粒子、径1mmの砂粒	良好	破片	平安	
29	第５図	甲府市②	土師器	坏	―	(2.3)	5.8	ロクロナデ	回転糸切り	2.5YR6/8	密　赤色粒子、径0.5mmの砂粒	良好	破片	平安	
30	第５図	甲府市②	土師器	坏	―	(1.0)	8.5	ロクロナデ	回転糸切り	5YR5/6	密　赤色粒子、雲母	良好	破片	平安	
31	第５図	中央市⑩	土師器	甕	30.0	(2.4)	―	ヨコナデ	―	7.5YR6/4	密　赤色粒子、雲母	良好	破片	平安	
32	第５図	中央市⑪	土器	かわらけ	10.0	2.2	6.0	ロクロナデ	静止糸切り	外面：7.5YR7/6 内面：7.5YR6/4	密　赤色粒子、雲母	良好	30%	中世	
33	第５図	中央市⑪	土器	かわらけ	10.2	2.7	5.0	ロクロナデ	回転糸切りか	7.5YR6/4	密　赤色粒子、細砂	良好	30%	中世	
34	第５図	中央市⑪	土器	かわらけ	―	(1.8)	5.2	ロクロナデ	回転糸切り	外面：10YR6/3 内面：2.5Y7/2	密　雲母微量混じる	良好	破片	中世	
35	第５図	中央市⑪	土器	鍋	―	(6.4)	―	ヨコナデ	―	7.5YR6/4	密　雲母混じる	良好	破片	中世	
36	第５図	富士川町②	縄文土器	破片	―	―	―	―	―	10YR	粗　白色粒	良好	破片	縄文	
37	第５図	富士川町②	縄文土器	破片	―	―	―	―	―	7.5YR7/6	粗　白色・赤色粒子	良好	破片	縄文	
38	第５図	富士川町②	縄文土器	破片	―	―	―	―	―	10YR7/4	粗　白色粒子	良好	破片	縄文	

重機の搬入（笛吹市④）

人力による掘削作業（笛吹市⑨）

土層堆積状況（笛吹市⑥）

溝状遺構検出状況（笛吹市①）

土坑検出状況（笛吹市③）

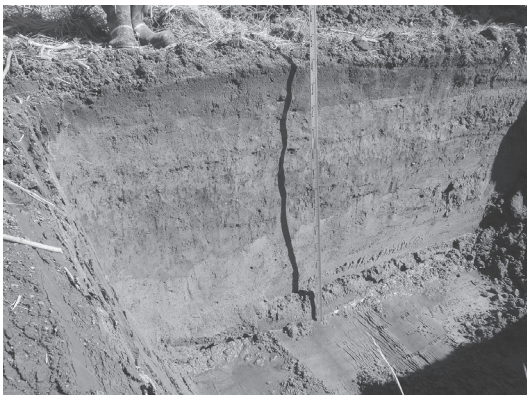
遺物出土位置記録作業（笛吹市⑤）

人力による埋め戻し作業（笛吹市⑦）

重機の搬出（笛吹市③）

人力による掘削作業（甲府市②）

遺構検出状況（甲府市②）



土層堆積状況（甲府市④）

埋め桶検出状況（甲府市⑤）

重機の搬入（中央市⑩）

重機による表土の掘削（中央市⑩）

掘削に伴う出水のようす（中央市⑦）

水中ポンプの設置状況（中央市④）

出水による壁面崩落（中央市⑫）

土層堆積状況（中央市⑤）

川砂層の落ち込み（中央市②）

畦畔検出状況（中央市②）

畦畔検出状況（中央市⑩）

埋め戻し完了状況（中央市⑨）

重機の搬入（南アルプス市②）

重機による掘削（南アルプス市①）

出水のようす（南アルプス市①）

掘削の状況（南アルプス市④）

重機の搬入（富士川町④）

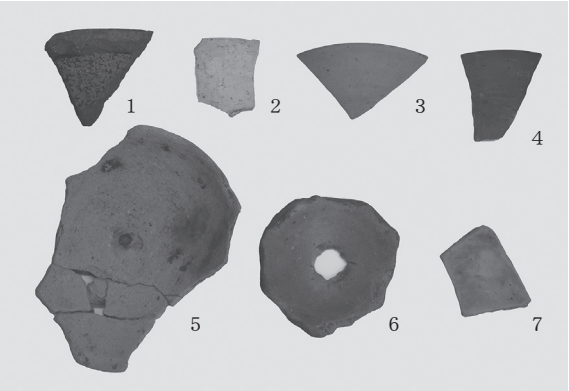
重機による掘削作業（富士川町③）

堤防の石積み検出状況（富士川町③）

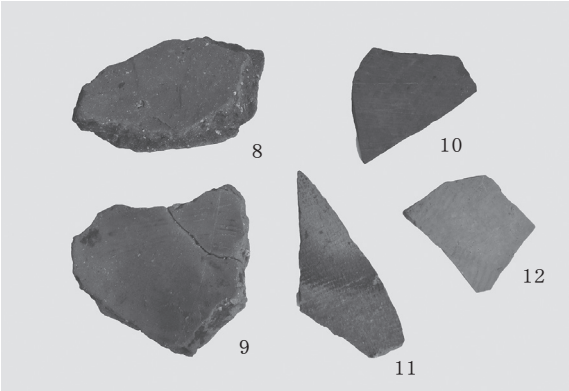
遺構検出状況（富士川町⑦）

水田の足跡検出状況（富士川町⑤）

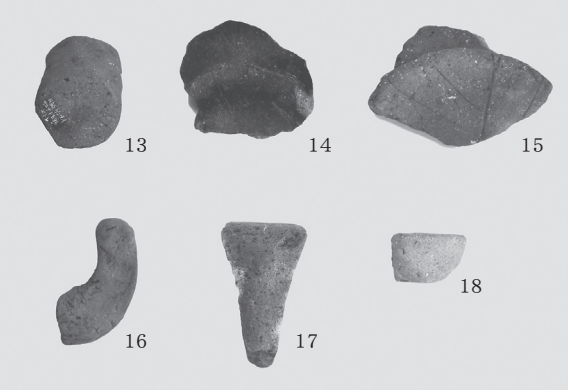
調査中のようす（富士川町⑥）



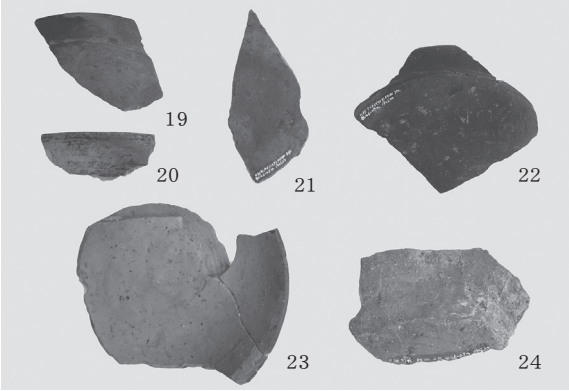
出土遺物1～7



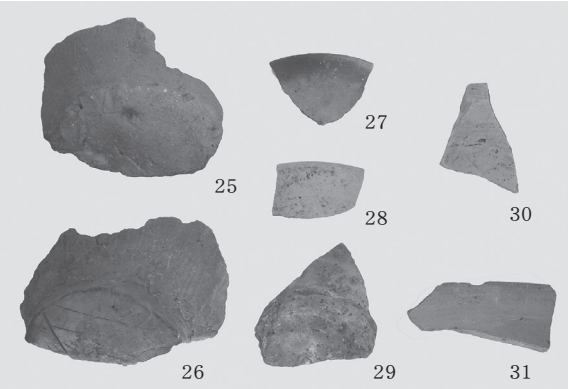
出土遺物8～12



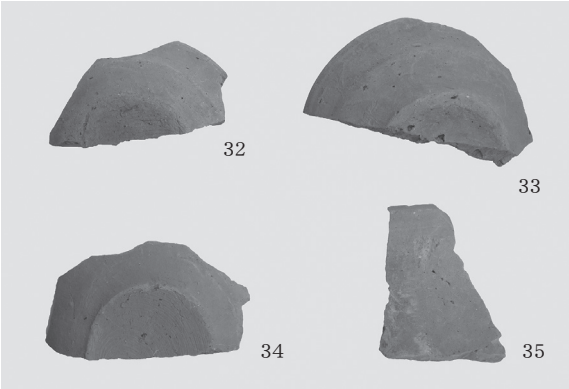
出土遺物13～18



出土遺物19～24

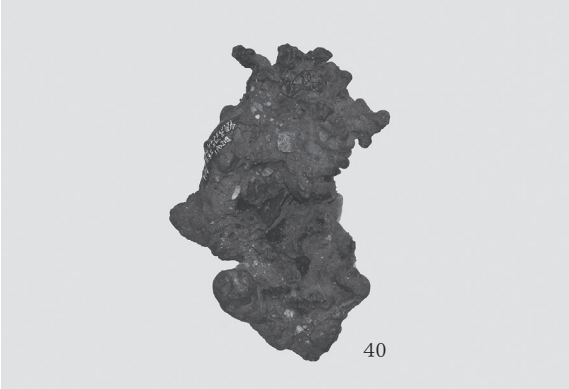


出土遺物25～31



出土遺物32～35

出土遺物36～38



出土遺物40　笛吹市⑤出土スラグ

2　中央新幹線成島保守基地建設工事《二又第２遺跡》

所在地	中央市成島地内	調査期間	①平成 31 年１月 28 日～２月１日 ②令和元年８月 20 日～ 22 日 ③令和元年 11 月 25 日～ 29 日
担当者	宮里　学・深澤一史・熊谷晋祐・高左右裕	調査面積	813 ㎡（調査対象面積約 31,082 ㎡）

調査の経緯と調査地点の環境

当調査は､中央新幹線（品川･名古屋間）に伴う保守点検基地の建設に先立つ埋蔵文化財の試掘調査である（調査地点は第２図甲府市・中央市東部「成島保守基地」)。調査地点が所在する中央市の旧玉穂町地域は、広域に望めば釜無川扇状地の扇端部に位置する。本地点の地形は、河川氾濫が形成する自然堤防と旧河道や低平地により構成され、釜無川や笛吹川によるシルト層や砂層の堆積と、南流する数条の小河川の新色や粗粒土壌の堆積が繰り返されて形成されたものである。調査地点の東側には、周知の埋蔵文化財包蔵地である二又第２遺跡が位置している。

調査の結果

試掘調査は平成31年１月以来３度にわたり、約31,000㎡の調査対象地に対して63本の試掘トレンチを設定して実施した。平成31年１～２月に実施した１度目の試掘調査では、近接する上窪遺跡で見られる10世紀代の鍵層に近似する植物遺体を多量に含む黒色土層を確認し、数点の中世～近世の土器片を採取したものの、出水が激しく遺構を捉えることができなかった。２度目の試掘調査では、地表面下約350 ～ 500mmの深さにおいて中世の遺物を包含する灰黄褐色シルト質砂層を確認することができ、３度目の試掘調査において、当該層の掘削中に水田畦畔を捉えることができたことで、中世の水田が当該地に広く展開していることが分かった。ただし、調査対象地の南東部にあたる区域では水田層を確認できなかったが、中世の遺物が出土している。

また、中世の水田が展開すると考えられる範囲のうち、中央部の一部については、水田層よりも下層の地表面下約 500 ～ 700mm 前後に堆積している暗灰黄色の砂混じりシルト層から平安時代後半を主体とする遺物が出土した。この層の下層では、砂層を掘り込む土坑１基が検出している。

調査対象地の東側を流れる明神川に接する地点では、河川堆積層が支配的となり、上述の遺物出土層とは堆積状況が大きく異なる。調査対象地の南東隅に当たる試掘トレンチでは、木杭２本が並列して打ち込まれている様子が検出しており、同層から近世の陶磁器片が出土した。現状では、護岸に関連する遺構と捉えている。

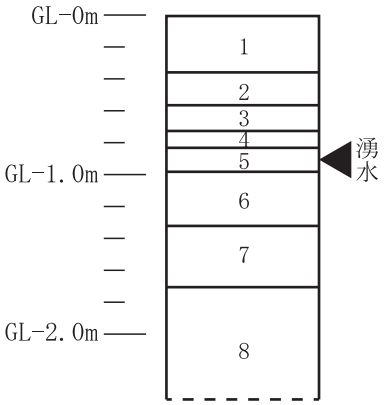
調査地点の多くは地表面下約800mmで出水し、トレンチ壁面の崩落が発生するため掘削をとどめることとした。

調査所見

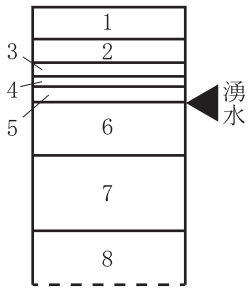
３度の試掘調査を経て、当該地においては中世の水田遺構（第１面）が広く展開しており、調査区中央付近では、水田遺構の下層から平安時代後半の遺物を包含する遺構面（第２面）を確認した。なお、調査区南東隅で検出した護岸に関連すると想定される杭列についても、二又第２遺跡が平安時代・中世・近世の遺跡散布地とされていることから、保護の対象と捉えることができる。

これまでの試掘調査により、保護を必要とする埋蔵文化財が一部２面存在することが明らかになった。引き続き、調査未着手の部分についても試掘調査を実施し、保護が必要な範囲を確定していく必要がある。

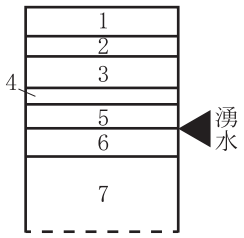
調査区西部 ──────────→ 調査区中央部



1. 表土層（耕作土＋鋤床層）
2. 灰黄褐色（10YR6/2）シルト質砂層
   しまり弱、炭化物含む、小礫含む、斑鉄あり
   （中世遺物包含層）
3. にぶい黄褐色（10YR5/1）シルト質砂層
   しまり強、小礫含む、斑鉄多い
4. 褐灰色（10YR5/1）シルト質砂層
   しまりなし、炭化物含む、礫含む
5. 灰色砂層
6. 灰白色砂層
7. 褐灰色シルト質砂層　植物遺体多く含む
8. 砂礫層（河川堆積）

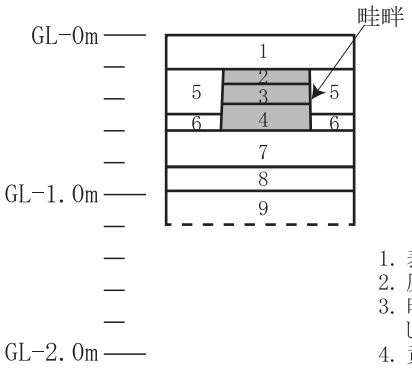


1. 表土層（耕作土）
2. 黄灰色細砂層　炭化物含む
3. 灰黄褐色シルト層
   遺物包含層（第１面）
4. 褐灰色砂層
   礫混じる　遺物包含層（第２面）
5. 灰色砂層
6. 灰白色砂層　小礫混じる
7. 白色砂礫層
8. 灰色砂層

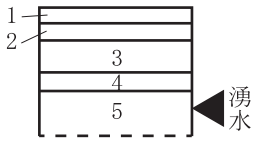


1. 表土層（耕作土）
2. 黄灰色細砂層　しまりあり
   遺物包含層（第１面）
3. 灰白色細砂層　粗砂混じる
4. 暗灰黄色シルト
   灰色シルト混じる
   遺物包含層（第２面）
5. 灰色砂質シルト層　斑鉄含む
6. 灰色シルト層　小礫混じる
7. 褐灰色粗砂層　礫混じる
   （河川堆積か）

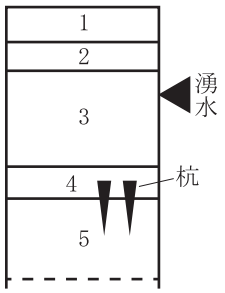
調査区中央部 ──────────→ 調査区東部



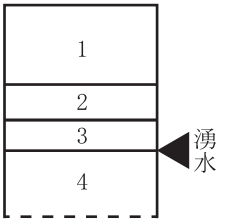
1. 表土層（耕作土）
2. 明橙色シルト層（床土状）
3. 暗黄褐色シルト層　しまり強
4. 灰褐色砂層　しまり強　礫混じる
5. 暗灰黄色砂質シルト層
   小礫含む、炭化物含む
   遺物包含層（第１面）
6. 褐灰色砂質シルト層
   小礫多く含む
   遺物包含層（第２面）
7. 褐灰色粗砂層　礫含む
   （河川堆積か）



1. 表土層（耕作土＋鋤床層）
2. 灰色砂　斑鉄混じる
3. 暗灰黄色砂質シルト層
   しまりやや強、斑鉄多い
4. 黄灰色シルト質砂層
   しまりなし、炭化物含む
   （遺物包含層）
5. 灰色砂層　斑鉄・炭化物少し含む

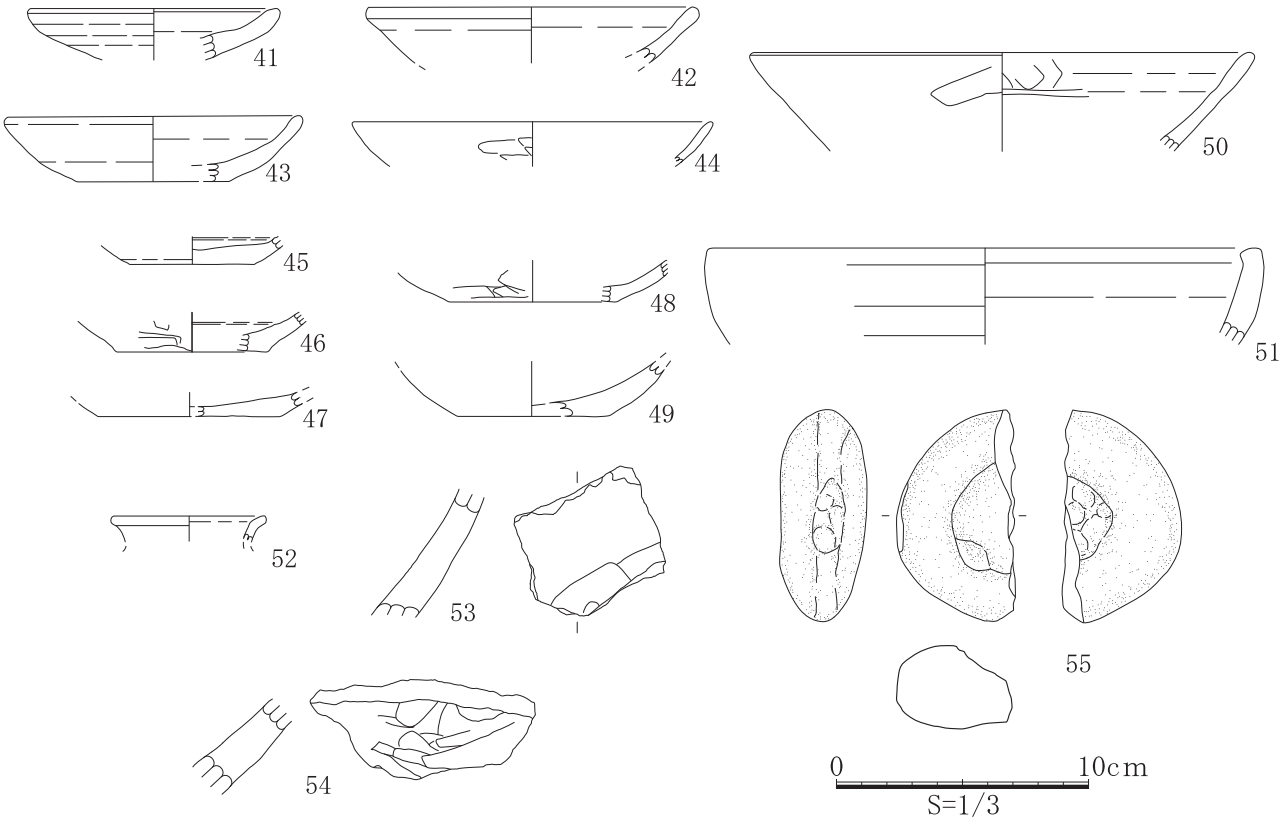


1. 表土層（耕作土＋鋤床層）
2. 灰色砂層　斑鉄混じる
3. 灰色粗砂に小礫混じる
4. 暗オリーブ褐色シルト層
   （杭列検出面）
5. 灰白色砂層



1．表土層（耕作土）
2．灰黄色砂層
   礫少し混じる　斑鉄含む
3．白色砂層
   斑鉄含む
4．灰色粗砂に小礫混じる
   ”砂利”層

第6図　土層堆積状況図（成島保守基地）



第7図　出土遺物（成島保守基地）

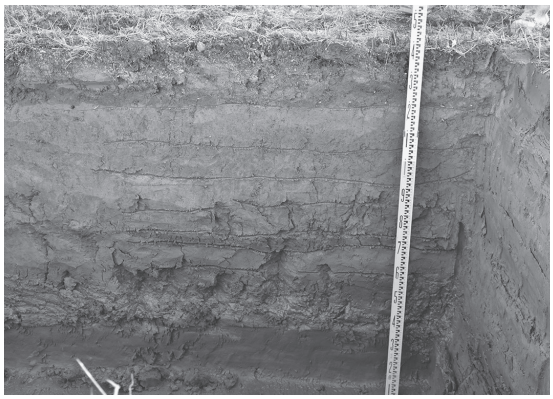
第7表　出土遺物観察表（成島保守基地）

報告番号	図版番号	出土地点	器種分類		寸法（cm）			調整技法		胎土色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
			種別	器形	口径	器高	底径	内外面	底面						
41	第7図	成島保守基地	土器	かわらけ	10.0	(2.4)	－	ロクロナデ	－	内面：7.5YR7/4 外面：5YR7/6	密　雲母、白色・赤色粒子	良好	破片	中世	
42	第7図	成島保守基地	土器	かわらけ	12.8	(2.2)	－	ロクロナデ	－	7.5YR7/6	密　赤色粒子、雲母	良好	破片	中世	
43	第7図	成島保守基地	土器	かわらけ	11.5	2.6	(6.1)	ロクロナデ	回転糸切り	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR7/4	密　赤色粒子、雲母	良好	破片	中世	
44	第7図	成島保守基地	土器	かわらけ	14.0	(1.8)	－	ロクロナデ、ヨコナデ	－	7.5YR7/4	密	良好	破片	中世	
45	第7図	成島保守基地	須恵質	かわらけ	－	(1.1)	5.0	ロクロナデ	回転糸切り	N7/	密	良好	破片	中世？	
46	第7図	成島保守基地	土師器	坏	－	(1.6)	6.0	ヘラナデ	回転糸切り	7.5YR7/4	密	良好	破片	平安？	
47	第7図	成島保守基地	土師器	かわらけ	－	(1.0)	7.3	ロクロナデ	回転糸切り	2.5YR5/6	密	良好	破片	平安～中世	
48	第7図	成島保守基地	土師器	坏	－	(1.7)	7.2	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ヘラナデ	回転糸切り	7.5YR7/4	密	良好	破片	平安？	
49	第7図	成島保守基地	土師器	坏	－	(2.2)	6.0	ロクロナデ	回転糸切り	内面：5YR6/6 外面：7.5YR7/4	密　赤色粒子、雲母	良好	破片	平安	
50	第7図	成島保守基地	土師器	坏	12.2	(2.6)	－	ヘラナデ	－		密	良好	破片	平安	
51	第7図	成島保守基地	土器	鍋か	22.0	(3.8)	－	ロクロナデ	－	内面：7.5YR7/4 外面：5YR7/6	密　白色・赤色粒子	良好	破片	中世	
52	第7図	成島保守基地	陶器	茶壺？	6.0	(1.0)	－	ロクロナデ	－	X 内外面：鉄釉	緻密	良好	破片	近世	瀬戸美濃
53	第7図	成島保守基地	土器	擂鉢	－	－	－	内面：条痕	－	10R6/6	密	良好	破片	中世	
54	第7図	成島保守基地	土器	擂鉢	－	－	－	内面：条痕	－	10YR6/2	密	良好	破片	中世	
55	第7図	成島保守基地	石製品	叩き石	(4.6)	8.3	3.4	－	－	－	－	－	50%	不明	上下面、側面叩き

重機による掘削

土層堆積状況（出水状況）

畦畔検出状況



土層堆積状況（調査区中央部）

土層堆積状況（調査区東部）

遺物出土状況

調査中のようす

埋め戻し完了

3　中央新幹線高下作業ヤード建設工事《包蔵地外》

所在地	南巨摩郡富士川町高下 407 外	調査期間	令和元年 6 月 3 日～ 4 日
担当者	熊谷晋祐・深澤一史	調査面積	94㎡（調査対象面積 2,129㎡）

調査経緯

本事業は、富士川町高下地区に建設予定の車両基地建設に伴う工事用道路予定地であり、一部工事ヤードに係っている（調査地点は第３図「富士川町高下地区」）。北側に隣接する箇所までは、平成29年度に調査を実施しており、埋蔵文化財は確認されていない。

試掘調査は令和元年６月３日、４日の２日間で実施した。

事業内容と結果

当該地は、巨摩山地から流れる小柳川の上流に位置しており、山間の中に集落が細長く展開している。小柳川と段丘の比高差は激しく、集落も急斜面を造成して生活していることから、全体的に河川の浸食により、形成された土地であると考えられる。

高下地区は室町時代に南部次郎重清が入植し、集落を開いたという伝承があり、妙楽寺が南部次郎重清の館跡であるとされている。また、川の西側の段丘を登ったところにある平地には、縄文時代や弥生時代の散布地である下高下遺跡が存在する。よって、中世の痕跡や上からの流れ込みが警戒される地区である。

調査地点は町道を挟んで西側の小台地上と、東側の棚田３段に分けることが可能である。西側の小台地上では１～３号トレンチを設定した。このうち２号トレンチ・３号トレンチでは、炭化物や焼土を含む土層が表土下に認められたが、遺物の出土はなく遺構も認められなかった。いずれのトレンチにも共通して、くされ礫を含むにぶい黄褐色砂層があり、地盤層と推定される。

東側の棚田内では、棚田１枚ごとに２本のトレンチを設定した（４～９号トレンチ）。４～８号トレンチからは、表土層より下層に礫を含むシルト質の堆積土層があり、これらは山体の崩落による土砂崩れ等に由来すると推定される。９号トレンチではGL-90cmで地盤層とみられるにぶい黄褐色土層を確認した。なお、８号トレンチのGL－100cm付近で凹み石が1点出土しているが、先述の土砂崩れ等に由来すると思われる土層内からの出土である。

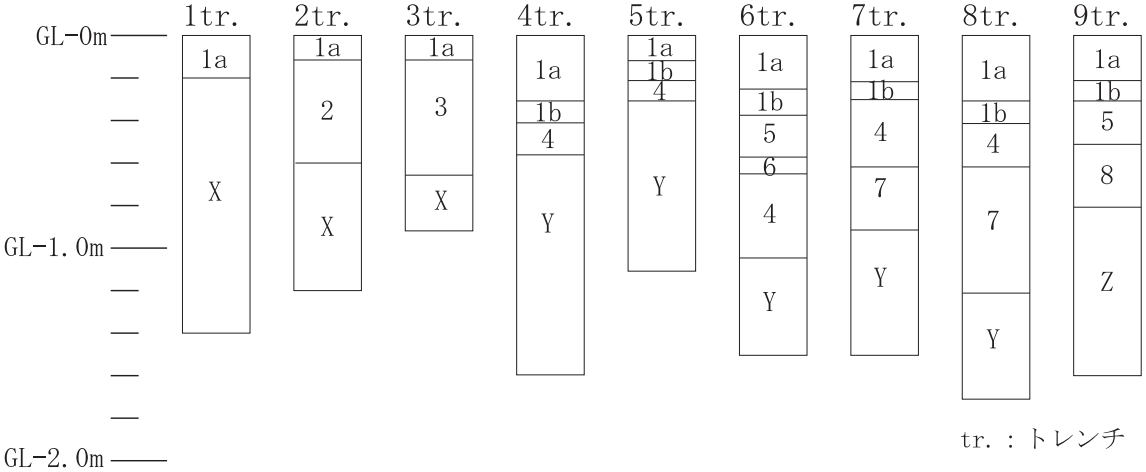
調査所見

今回の調査地点からは、遺物包含層の確認あるいは遺構の検出をすることができなかった。８号トレンチより出土した凹み石は、土砂崩れと推定される堆積土層中に含まれるものであり、当地点より西に位置する山地中腹にある縄文時代の遺跡に由来すると推定される。

以上のことから、当該地点において工事を進めることは差し支えないが、山地中腹には遺跡の存在が想定でき、周辺の開発時には埋蔵文化財の試掘確認調査が必要となる。

第８図　トレンチ配置図（高下作業ヤード）

第8図　トレンチ配置図（高下作業ヤード）



１ａ　表土（耕作土）　１ｂ　表土（水田床土）
２　暗褐色シルト質土層　しまりあり　焼土・炭化物少量含む　礫含む
３　灰黄褐色シルト質砂層　しまりあり　炭化物少量含む　斑鉄あり　くされ礫含む
４　灰褐色砂質シルト層　しまり強い　礫混じる
５　にぶい褐色砂質シルト層　しまり強い　斑鉄多い　礫含む
６　灰褐色シルト層　しまり弱い　斑鉄多い　耕作利用か
７　にぶい黄褐色砂質シルト層　しまり強い　礫少量含む
　８号トレンチで遺物出土　土砂崩れ由来の堆積層か
８　暗褐色シルト層　しまり弱い　砂利礫含む

Ｘ　にぶい黄褐色細砂層　しまり強い　くされ礫を含む　地山層か
Ｙ　にぶい褐色砂質シルト層　しまり強い　くされ礫を含む　土砂崩れの堆積層か
Ｚ　にぶい黄褐色細砂層　しまり強い　Ｘ層よりやや明るい

第９図　土層堆積状況（高下作業ヤード）

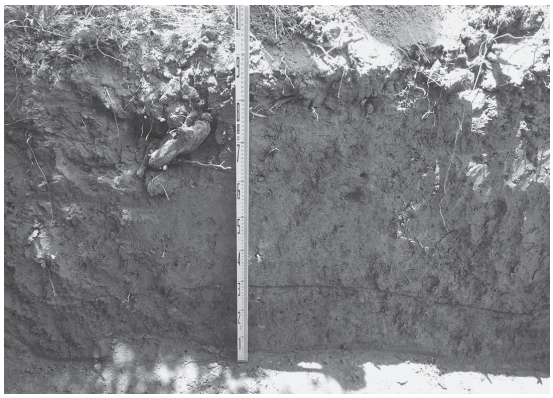
第9図　土層堆積状況（高下作業ヤード）

調査前状況①

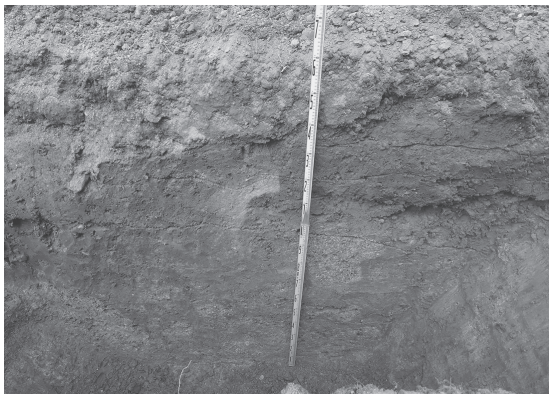
重機の搬入

1号トレンチ土層堆積状況

2号トレンチ土層堆積状況



3号トレンチ土層堆積状況



4号トレンチ土層堆積状況

4号トレンチ掘削後

5号トレンチ土層堆積状況

調査前状況②

重機による掘削

6号トレンチ土層堆積状況

7号トレンチ土層堆積状況

8号トレンチ土層堆積状況

9号トレンチ土層堆積状況

埋め戻し完了

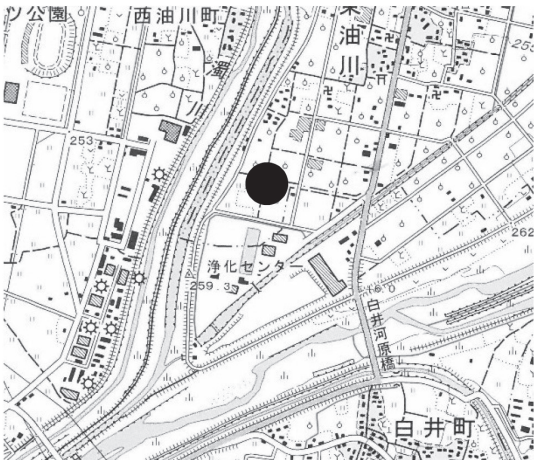
出土凹み石

4　新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業（北畑南遺跡）

所在地	笛吹市石和町東油川地内	調査期間	（第１次）令和元年５月 27 日～ 30 日 （第２次）令和元年６月 25・26 日、７月２日
担当者	深澤一史・熊谷晋祐	調査面積	813 ㎡（調査対象面積 8996.53 ㎡）

調査の経緯と調査地点の環境

新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業は、甲府市落合町から笛吹市石和町広瀬までの区間における事業である。調査地点は濁川および平等川の橋脚を建設する箇所であり、橋脚の西側について平成29年度に試掘調査を実施したが、遺跡は確認されていない。今年度の工事に先立って平成31年４月12日に行われた埋蔵文化財センター、学術文化財課、事業課との三者による協議の結果、工事予定地の一部について試掘調査を実施することとなった。平成31年４月23日に学術文化財課から教学文第267号にて試掘調査の依頼を受け、令和元年５月27日～ 30日の４日間で実施したところ、埋蔵文化財の存在が確認された（第１次試掘調査）。これにより、早急に記録保存のための発掘調査を実施することが求められ、本調査範囲の確定および明確な遺構面の検出を課題とした２回目の試掘調査を実施することとなった（第２次試掘調査）。第２次試掘調査は、令和元年６月25･26日、７月２日の３日間で実施した。



第 10 図　調査地点位置図

調査地点は濁川および平等川（旧笛吹川）と現笛吹川が合流する地点にあり、標高は254m程度である。平等川の旧流路は判然としないが、笛吹市内に東油川、甲府市内に西油川という地名が残るように、現在の地理的環境をそのまま旧然のものとみなすことはできない。調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地外であり、周辺には散布地がわずかに認められる程度だが、濁川の上流には甲府市が発掘調査したヂクヤ遺跡があり、古墳時代から中世の遺構が調査されている。

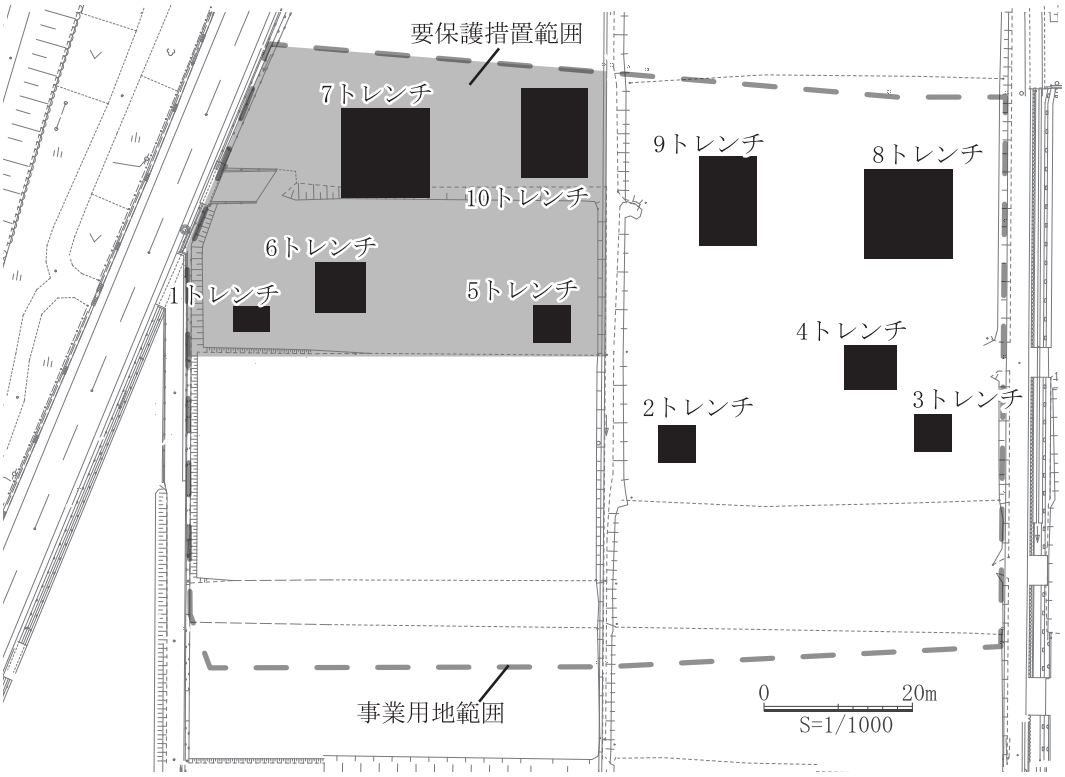
調査の結果

試掘調査は、第一次調査時に0.4クラスバックホウ、第2次調査時は0.7クラスバックホウを使用して掘削を行い、壁面および床面は人力により精査したが、掘削深度が深くなり崩落の危険もあったため、一部のトレンチでは精査が不可能な状況であった。

トレンチは上端を大きくとり、法面をつけながら掘削をおこなった。第１次調査では５ｍ× ５ｍ程度、第２次調査では 10 ｍ× 10 ｍ程度とり、法面をつけたぶん下端の面積は減じることとなった。

堆積層順については、調査区西側では10号トレンチが基本土層として捉えられる。GL-0.5mまでの表土（耕作土）以下は、GL-2.2m程度まで粒度の細かい砂層およびシルト層が相互に堆積している。GL2.2m ～ 3.0ｍの間に厚く堆積している灰色シルト層は、各トレンチでも共通する鍵層である。GL-3.0ｍ～ 3.5ｍには暗灰色の砂質シルト層が確認され、７号トレンチでは排土より中世の遺物が５点出土している。間層を挟み、以下には、炭化物を含む黒褐色砂質シルト層がGL-4.0mで確認された。この黒褐色土層は平安時代の遺物包含層であり、７号トレンチの排土からは平安時代の遺物が15点ほど出土した。また、10号トレンチでは黒褐色土上面にてピッ

ト５基、プラン不明の遺構１基が確認された。ピットのうち１基から編物石と思われる石製品が１点出土している。遺構検出面第1面として捉え、平安時代～中世頃と想定する。黒褐色土層は10号トレンチでは70cm程度の厚みがあり、GL-4.7mで青灰色砂層となる。同トレンチでは、この砂層を掘りこむ遺構プランが少なくとも２基検出された。これを遺構検出面第２面として捉え、平安時代のものと想定する。



第 11 図　トレンチ配置図

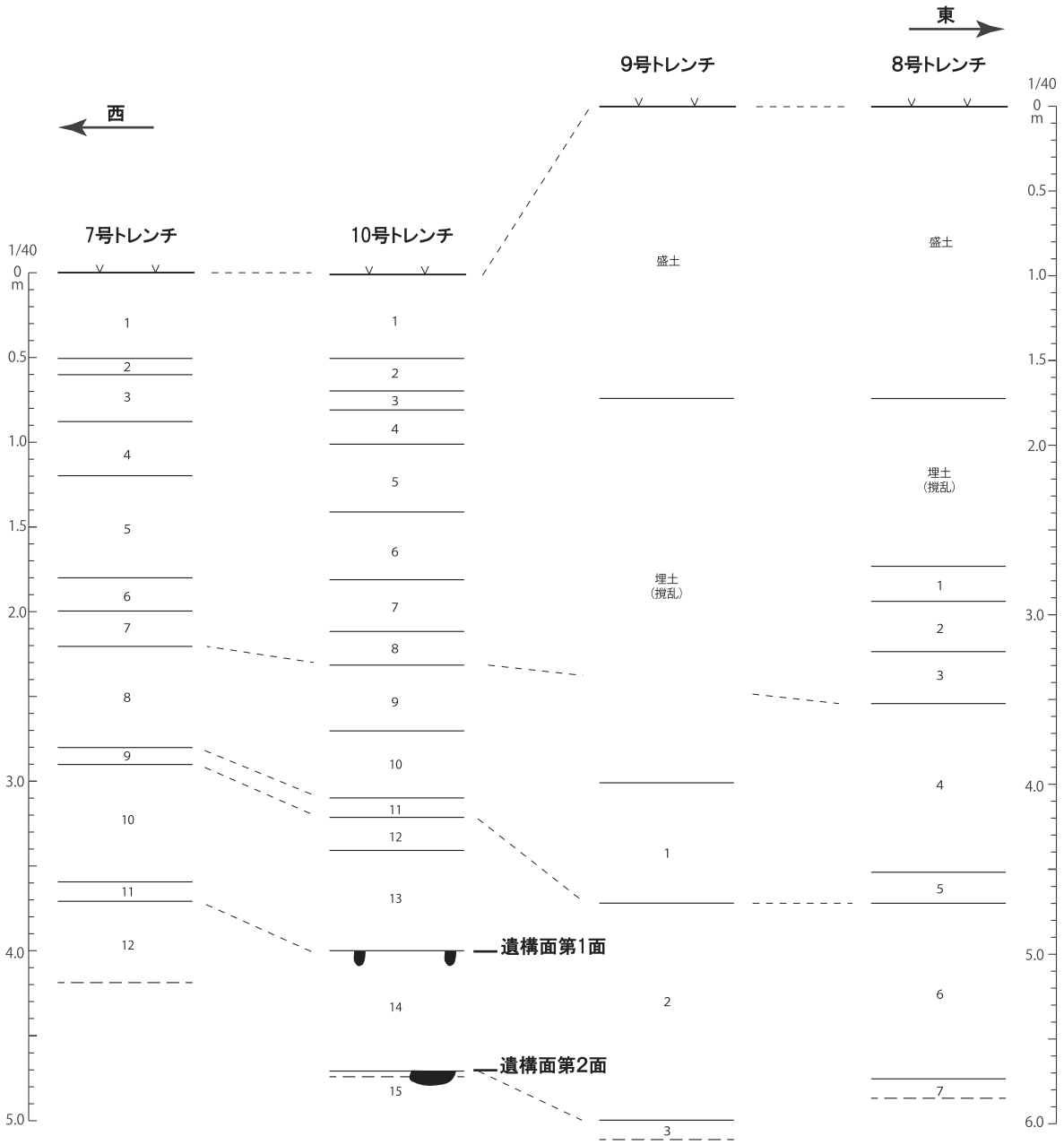
一方、調査区東側では、トレンチのすべてに上位層の撹乱が認められ、深いところではGL- ４m程度まで現代のゴミ等が埋められていた。それより下層は、調査区西側に共通する黒褐色土層および青灰色砂層が確認されたが、黒褐色土層からは極小遺物破片が数点出土した程度で、青灰色砂層を掘りこむような遺構プランは検出されなかった。

調査所見

遺構の有無については、10号トレンチで遺構を検出した。検出面は２面あり、平安時代～中世と推定される第１面はGL-4.0m前後、古墳時代～平安時代と推定される第２面はGL-4.7m前後に位置している。調査区東側では遺構は検出されなかった。遺物包含層は中世の包含層と、古墳～平安時代の遺物包含層を確認した。中世の包含層から出土する遺物は全体的に散漫であり、古墳時代～平安時代の包含層から出土する遺物は、調査区西側では多量の出土があり、東側では散見される程度である。

このことから、本調査による記録保存が必要な範囲を、1・5・6・7・10号トレンチを含む開発範囲の西側とし、２・3・4・8・9号トレンチを含む開発範囲東側については、調査対象から除外し、慎重な工事による対応とする。遺跡の範囲については、遺物の出土があることから調査区全体を含むものとし、調査地点の字名「北畑」をとり、笛吹市遺跡台帳に新たに「No. 石和 -62　北畑南遺跡」として登録した。

なお、開発範囲南側の未試掘地点の確認調査も含めて今年度発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることとなった。



7号トレンチ
1．表土層（黄褐色耕作土）
2．青灰色シルト層
3．褐灰色砂質シルト層
4．オリーブ褐色砂層
5．灰色砂質シルト層
6．褐色砂質シルト層
　斑鉄多く含む　植物遺体含む
7．暗青灰色シルト質砂層
8．灰色シルト層
9．青白色砂層
10．暗灰色シルト質砂層　しまる
　中世の遺物を包含する
11．青灰色砂層
12．黒褐色砂質シルト層　炭化物含む
　平安時代の遺物を包含する

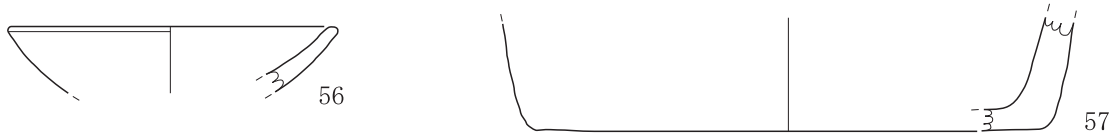
10号トレンチ
1．表土層（黄褐色耕作土）
2．青灰色シルト層
3．灰色砂層
4．オリーブ灰色砂質シルト層　炭化物を含む
5．灰色シルト質砂層　しまりなし　植物遺体含む
6．オリーブ灰色シルト質砂層　しまりなし
　５層より粒度粗い　植物遺体含む
7．灰色砂質シルト層　ややしまる
8．青灰色シルト質砂層　炭化物わずかに含む
9．灰色砂質シルト層　ややしまる　炭化物を含む
10．暗灰色砂質シルト層　ややしまる
　中世の遺物を包含する
11．青白色砂層　わずかに灰色シルト混じる
12．暗灰色砂質シルト層　炭化物を含む
　古代～中世の遺物を包含する
13．灰色シルト質砂層　ややしまる　炭化物を含む
14．黒褐色砂質シルト層　しまる　炭化物含む
　平安時代の遺物を包含する
15．青灰色砂層　遺構の検出面

８号トレンチ
1．青白色中砂層
2．褐灰色シルト層　ややしまる
　植物遺体を含む
3．青灰色砂層
4．灰色シルト質砂層　しまる
5．青灰色砂層
6．灰色シルト質砂層　しまる
7．青白色砂層

９号トレンチ
1．青灰色シルト層　しまる
　砂層が混じる
2．暗灰色砂質シルト層　しまる
　炭化物を含む
3．青白色砂層

第 12 図　土層堆積柱状図

7 トレンチ GL-3.0m 地点



7 トレンチ GL-4.0m 地点

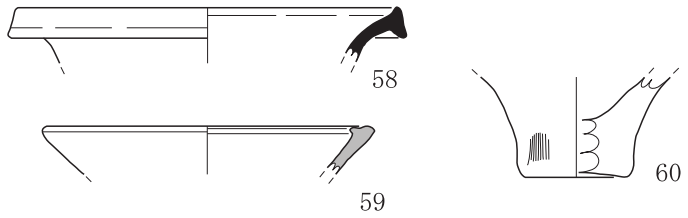
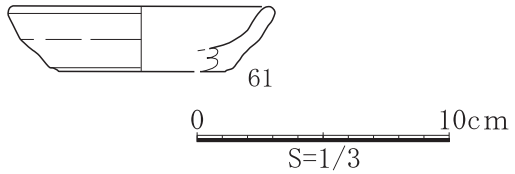


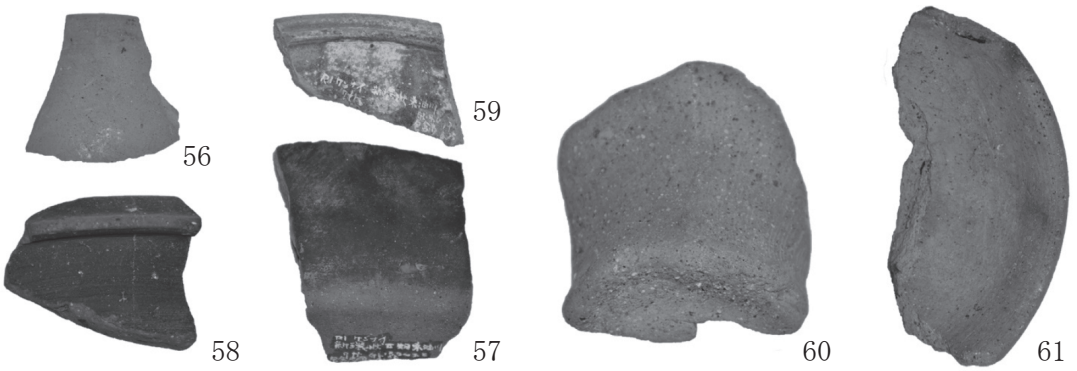
表 採



第 13 図 出土遺物（新環状道路建設）

第8表 出土遺物観察表

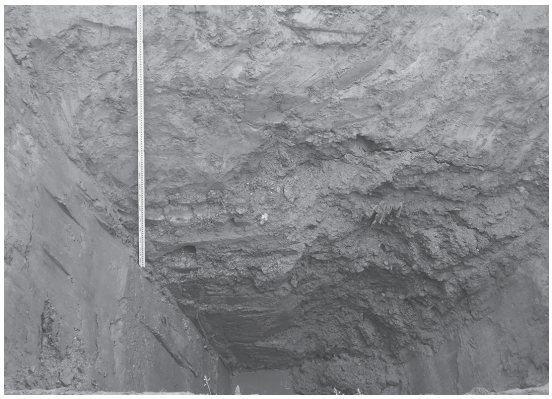
報告番号	挿図番号	出土地点		器種分類		寸法（cm）			調整技法		胎土色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
		トレンチ	層位	種別	器形	口径	器高	底径	内外面	底面						
56	第 11 図	7トレンチ	GL-3.0m	土器	かわらけ	12.8	(2.6)	−	ロクロナデ	−	10YR7/4	密 黒色粒子	良好	破片	中世	
57	第 11 図	7トレンチ	GL-3.0m	土器	焙烙	−	(4.5)	20.0	ヨコナデ	−	外面 10YR4/1 内面：7.5Y5/1	密 細砂多く含む、雲母	良好	破片	中世	
58	第 11 図	7トレンチ	GL-4.0m	須恵器	壺	15.0	(2.2)	−	ナデ	−	外面：7.5Y4/1 内面：7.5Y5/1	緻密	良好	破片	古墳	
59	第 11 図	7トレンチ	GL-4.0m	灰釉陶器		12.8	(1.9)	−	ロクロナデ	−	外面：5Y7/4 内面：5YR5/8	密	良好	破片	不明	
60	第 11 図	7トレンチ	GL-4.0m	土師器	壺	−	(4.0)	4.0	タテハケ	−	外面：7.5YR6/4 内面：5Y4/1	密 赤色粒子	良好	破片	古墳	
61	第 11 図	7トレンチ	GL-4.0m	土器	かわらけ	10.2	2.6	6.6	ロクロナデ	静止糸切りか	5YR5/4	密 雲母、0.5mm の砂粒含む	良好	50%	中世	



出土遺物写真（新環状道路建設）

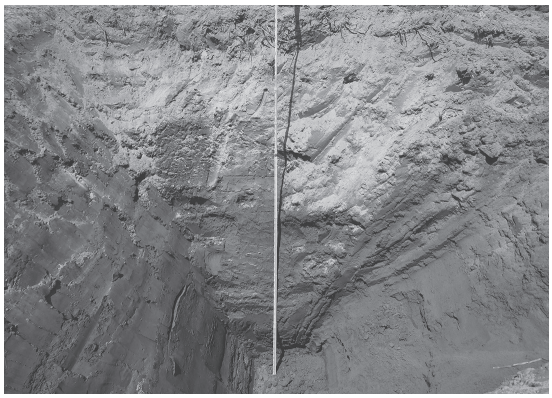
試掘調査着手前状況

1号トレンチ調査状況



2号トレンチ土層堆積状況

3号トレンチ土層堆積状況



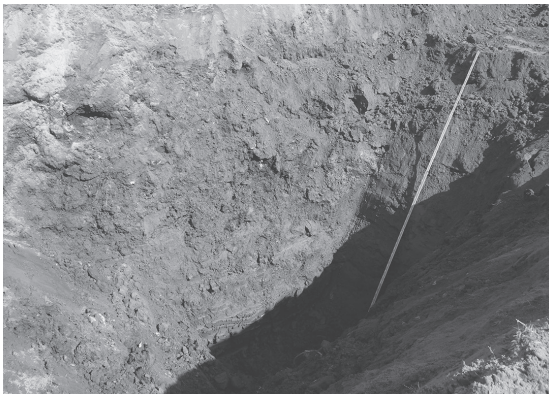
6号トレンチ土層堆積状況

埋め戻し（第1次調査）

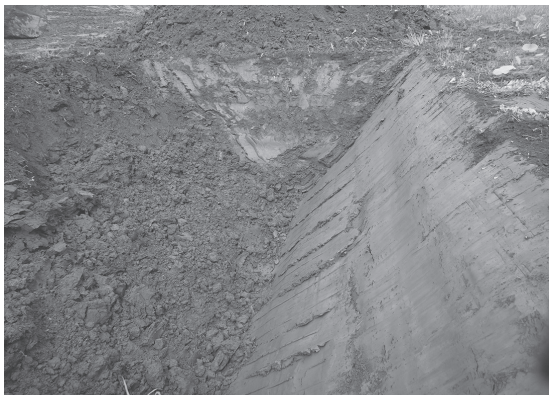
7号トレンチ調査状況

7号トレンチ調査状況（その2）

8号トレンチ土層堆積状況



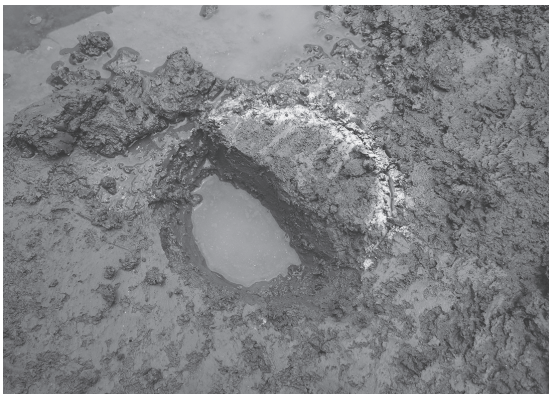
9号トレンチ土層堆積状況



法面の整形状況

重機による掘削

遺構検出状況



ピット半裁状況

埋め戻し

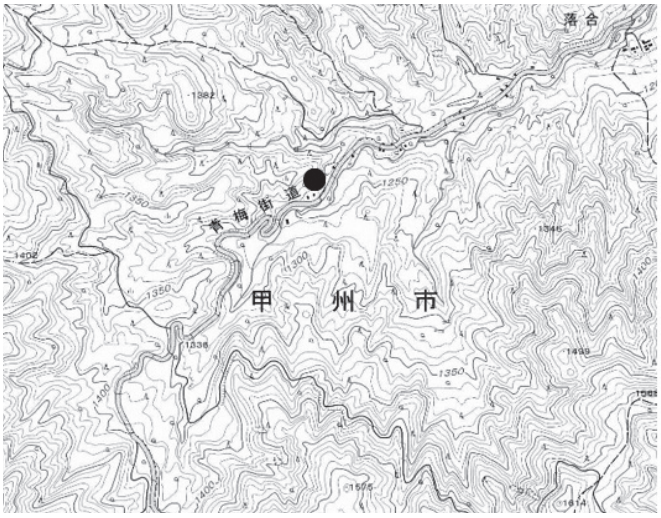
埋め戻し完了

5　一般国道411号御屋敷拡幅事業《馬場平遺跡》

所在地	甲州市塩山上萩原地内	調査期間	令和元年５月15日～16日（第１次） 令和元年８月１日（第２次）
担当者	熊谷晋祐・岩永祐貴・小池準一・深澤一史	調査面積	第1次　40㎡（調査対象面積 7,200㎡） 第2次　９㎡

調査経緯

本事業は、峡東建設事務所が実施している一般国道411号御屋敷拡幅事業に伴う試掘調査である。事業予定地は柳沢川左岸に位置し、旧青梅街道と重複する。調査地点は山間部で急斜面となっているが、一部緩斜面・平坦面があり「馬場平遺跡（旧石器時代）」の周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれる。令和元年５月９日に岩波建設株式会社、学術文化財課、埋蔵文化財センターで現地協議を行い、５月13日付け教学文第1226号で学術文化財課から試掘依頼を受け、試掘調査を行った。また、第１次調査地点より東側において、樹木の伐採が終了し試掘調査が可能となったため、７月３０日に昭和建設株式会社、峡東建設事務所、学術文化財課、埋蔵文化財センターで現地協議のうえ、８月１日に第２次試掘調査を実施した。



第 14 図　調査地点位置図（1/25,000）

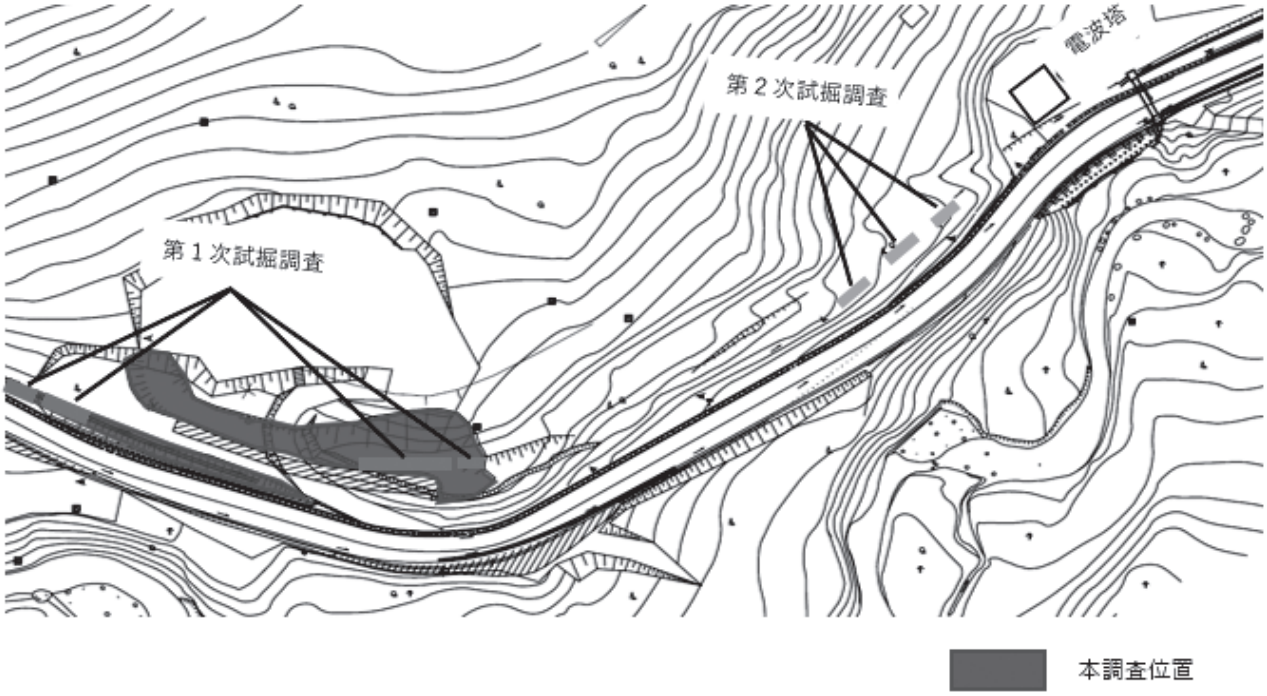
調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地内で遺跡がある可能性が高い緩斜面・平坦面で行った。第１次試掘調査において、旧石器時代の埋蔵文化財の有無の確認を主眼として、試掘調査を実施した。第２次試掘調査は、第1次試掘調査で確認した縄文時代中期の文化面と、旧石器時代の埋蔵文化財の有無を主眼として調査を実施した。

事業内容と結果

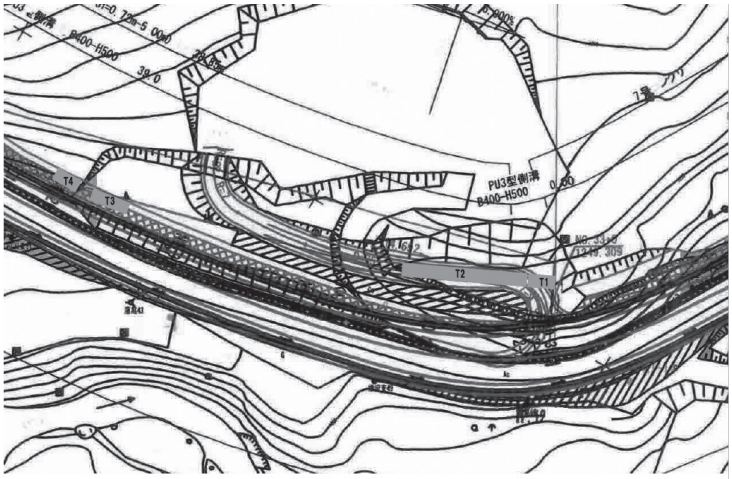
(1)第１次調査

５月15日に２ヶ所、５月16日に２ヶ所の合計４ヶ所のトレンチを設置し、重機による掘り下げと人力による精査作業及び記録作業を行った。トレンチの配置図は第13、14図参照、各トレンチの堆積状況は第16図参照。

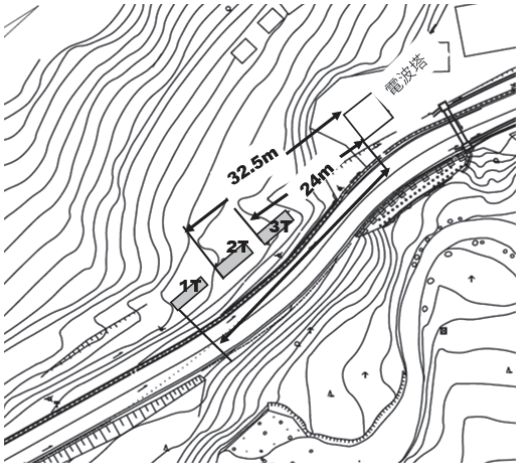
１号トレンチは、地表下0.4ｍから地山となった。地山内を慎重に地表下1.5ｍまで調査をしたが、遺構・遺物は認められなかった。２号トレンチは長さ18ｍ幅1.1ｍで設定し、調査を行った。地表下約0.4ｍ以下から縄文時代中期中葉（新道式）の土器片が出土した。精査の結果、２号トレンチから、地表下0.7ｍから土坑３基を確認した。このうち１基から土器片１点と水晶の石核が出土した。シートによる養生措置を行い埋め戻した。３号トレンチは、２号トレンチで遺構・遺物の確認されたため、本調査の範囲を決めることを目的に、道路拡幅区間内にある緩斜面・平坦面の西端に設定した。精査の結果、遺物は確認できなかったが、地表下1.1ｍから土坑を２基確認した。遺物が伴っていないが、２号トレンチと遺構検出面が同じであり、縄文時代中期のものと想定される。シートによる養生措置を行い埋め戻した。４号トレンチは、３号トレンチの西２ｍ程の斜面地に設定した。地表下0.6ｍまでは、衣服等のゴミが混じる攪乱層であった。これより下層は、砂岩が多く混じる黄褐色砂質土であり地山と判断した。４号トレンチは、地山の質がほかの３つのトレンチとは異なることと、表土にゴミ



第 15 図　試掘トレンチの配置図



第 16 図　第1次試掘トレンチの詳細配置図

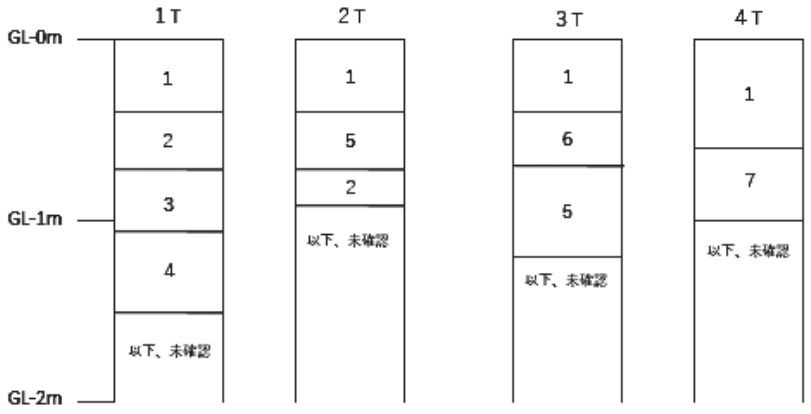


第 17 図　第2次試掘トレンチの詳細配置図

が混ざることから、斜面が削平されたと思われる。

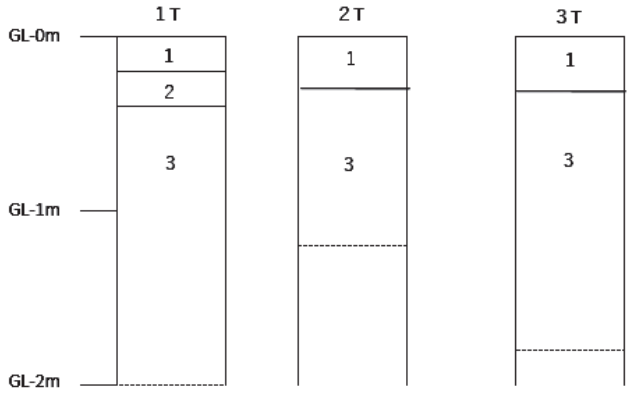
馬場平遺跡は、石刃が表採されたため旧石器時代の遺跡として登録されている。しかし、第１次調査で出土した遺物は、縄文時代中期中葉（新道式）の土器と水晶であった。旧石器時代以降に平坦面を選び土地利用されていたことが推察され、旧石器と縄文時代の複合遺跡の可能性がある。なお、平成24年に甲州市が携帯電話基地局建設に伴い近接地を試掘調査しているが、遺構・遺物は確認されていない（甲州市教育委員会2014『市内遺跡発掘調査等事業報告書』より）。

調査の結果から、調査地点である緩斜地と平坦面に縄文時代中期の遺跡が認められ、事業に先立って記録保存による保護措置が必要であると判断した。



1層：10YR1.7/1　黒色土　しまりなし　粘性弱　表土
2層：10YR7/6　明褐色ローム質土　しまり弱　粘性強　雲母混じる　地山
3層：10YR5/6　黄褐色粘土　しまり弱　粘性強　雲母多く混じる　φ12㎜程の石少量混じる　地山
4層：10YR5/6　黄褐色粘土　しまり強　粘性強（3層より弱）　雲母混じる　地山
5層：10YR1.7/1　黒色粘質土　しまりやや弱　粘性やや強　炭化物混じる　遺物包含層
6層：10YR5/6　黄褐色砂質土　しまり弱　粘性やや強　客土
7層：10YR6/4　にぶい黄褐色砂質土　しまりやや弱　粘性弱　雲母多く含み砂岩混じる

第 18 図　第1次試掘トレンチの土層柱状図



1層：10YR1.7/1　黒色土　しまりなし　粘性弱　表土　木の根によりカクラン
2層：10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　しまりやや弱　粘性強　漸位層か？
3層：10YR7/6　明褐色ローム質土　しまり弱　粘性強　地山

第 19 図　第2次試掘トレンチの土層柱状図

(2)第２次調査

８月１日に３ヶ所のトレンチを設置し、重機による掘り下げと人力による精査作業及び記録作業を行った。トレンチの配置図は第13、15図参照、各トレンチの堆積状況は第17図参照。

１号トレンチは、長さ３ｍ幅１ｍで設定した。地表下0.2ｍから明黄褐色ローム質土の地山となった。地山内を慎重に地表下３ｍまで調査をしたが、遺構・遺物は認められなかった。２号トレンチは長さ３ｍ幅1ｍで設定し、調査を行った。地表下約0.3ｍから１号トレンチと同様の地山が認められた。精査の結果、地山検出面に遺構は認められず、地山内においても遺構・遺物は確認できなかった。３号トレンチも、長さ３ｍ幅１ｍで設定した。この調査区も地表下約0.3ｍから地山を確認した。地山検出面に遺構は認められなかった。また、地山内を地表下1.9ｍまで掘削したが旧石器と考えられる遺構・遺物も確認できなかった。

第１次試掘調査では、縄文時代中期中葉の土器と水晶、土坑が確認できた。しかし、第２次調査では、前回より地山面が0.1～0.2ｍほど浅い地点で認められ、遺物包含層は無く、縄文時代中期の遺構・遺物は確認できなかった。また、地山内の掘削を行ったところ、ローム質土が継続して堆積していた。この層内から旧石器時代に関連する遺構・遺物は認められなかった。調査の結果から、第２次試掘調査地点では工事を進めて差し支えないと判断した。

今回の調査では、旧石器時代の遺物は確認できなかったが、周辺には旧石器時代の文化面があることが想定でき、今後開発事業がある場合には注意が必要である。

第2トレンチ検出状況

第4トレンチ南壁セクション

第3トレンチ検出状況

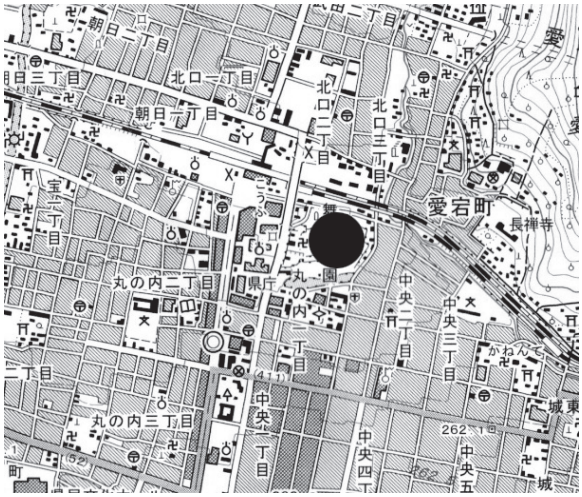
第2トレンチ土坑検出状況　中央付近に水晶片

6　公園施設（四ツ目垣）設置工事　試掘《国指定史跡甲府城跡》

所在地	甲府市丸の内一丁目 49，636	調査期間	令和元年 6 月 11 日～ 14 日
担当者	正木季洋・柴田亮平・佐賀桃子	調査面積	7㎡（調査対象面積 78㎡）

調査経緯

甲府市丸の内一丁目49，636番地内の試掘調査は、舞鶴城公園における公園施設工事に先立ち実施したものである。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城跡」に位置している。当該事業では、３地点において掘削を伴う工事が計画されている。事業予定地は、地点①は公園北側の道路沿い（第21図地点①）、地点②は本丸曲輪天守台西側（第21図地点②）、地点③はあじさい広場に西接する石垣前（第21図地点③）である。



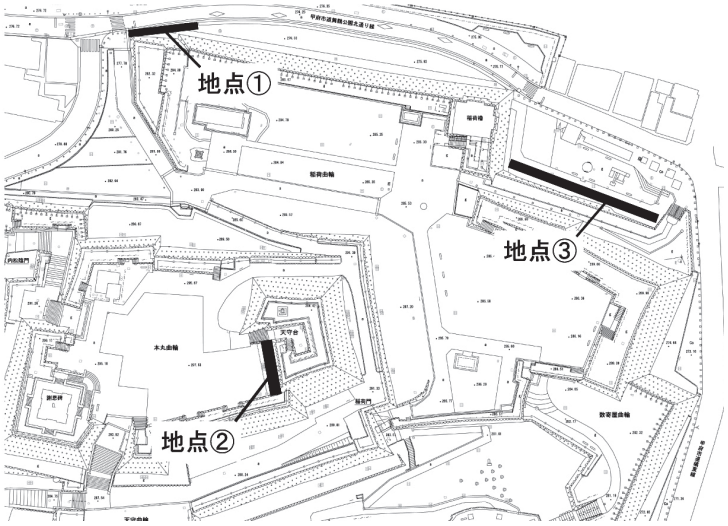
第 20 図　事業位置図

調査に当たっては、令和元年５月８日に中北建設事務所都市整備課（事業課）、施工業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターの四者により事前協議を行った。協議により、地点①については平成17年度に実施した試掘調査成果[註1]により地下遺構への影響はないと判断し、地点②、③について試掘調査を行ったうえで埋蔵文化財の保護措置を決定することとなった。試掘調査は令和元年６月11日～ 14日にかけて調査を実施した。

事業内容と結果

【地点②】 ２ヶ所の試掘トレンチを設定して調査をおこなった。１トレンチでは地表面下約0.8mにおいて、近世の石垣に関連する可能性がある人頭大の礫の集中を確認した。２トレンチでは地表面下約0.55mにおいて安山岩の礫集中を確認した。いずれも人為的な礫の集積と考えられ、遺構と捉えられるが形成時期は不明である。各トレンチからは、瓦破片が数点出土した。

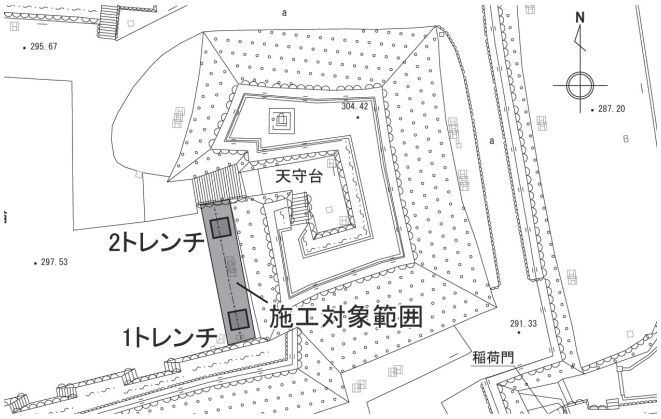
【地点③】 ５ヶ所の試掘トレンチを設定して調査をおこなった。各トレンチとも地表面下約0.8 ～ 1.2mまで現代の盛土層であることを確認した。



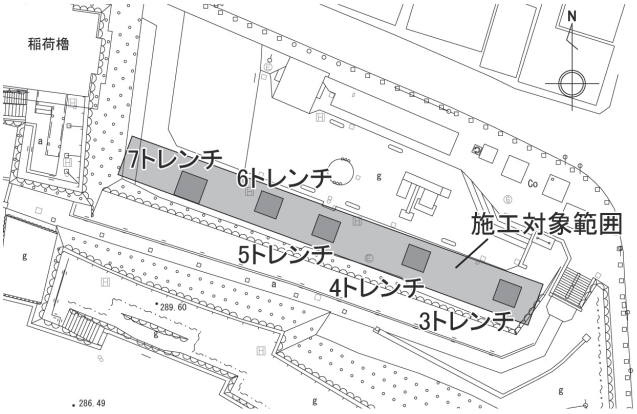
第 21 図　調査地点位置図

以上から、地点②、③ともに計画掘削高以内において埋蔵文化財が無いことを確認したため、施工を実施しても影響がない旨を報告した（教埋文第193号）。なお、甲府城跡及び甲府城下町遺跡周辺の埋蔵文化財は、過去の調査実績から地下遺構が良好な状態で遺存していることがわかっており、引き続き開発工事等に当たっては十分な協議・調整と埋蔵文化財への注視が必要である。

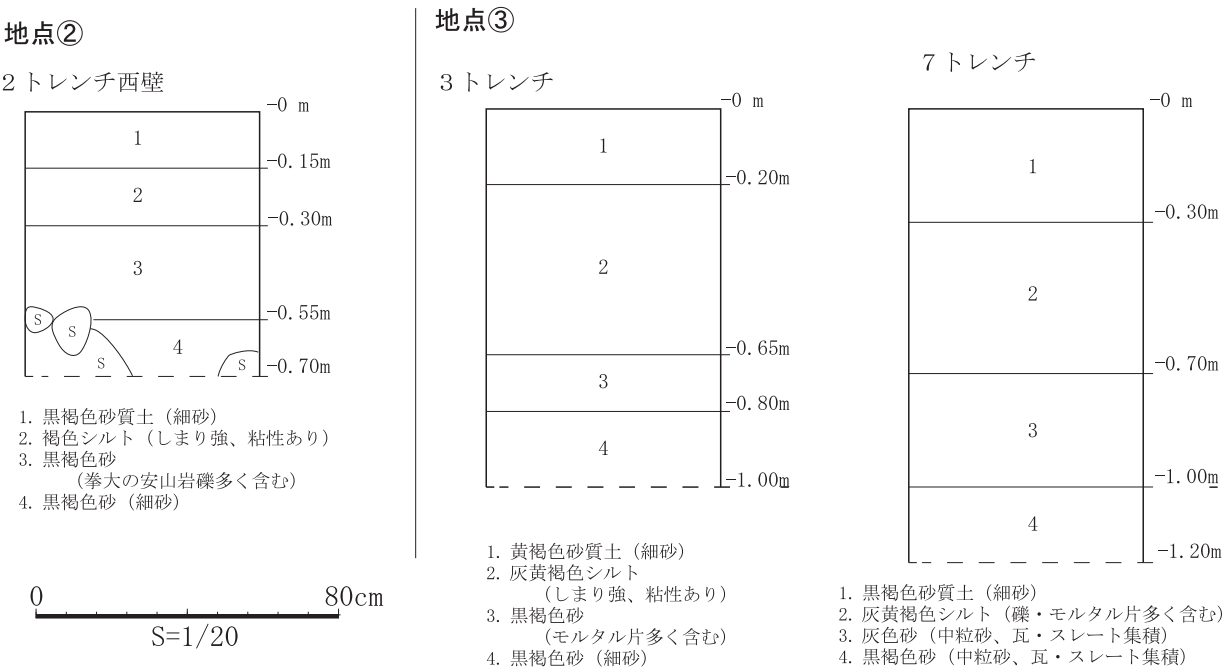
註１）山梨県教育委員会2006『甲府城跡周辺確認調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第232集



第 22 図 トレンチ配置図（地点②）



第 23 図 トレンチ配置図（地点③）



第 24 図 土層堆積状況（柱状図）

1トレンチ土層堆積状況

7トレンチ土層堆積状況

7　大月警察署上谷交番建設工事　試掘（三ノ側遺跡）

所在地	都留市田原地内	調査期間	令和元年9月26日
担当者	深澤一史・熊谷晋祐	調査面積	12㎡（調査対象面積60.80㎡）

調査経緯

本事業は、大月警察署上谷交番建設工事による都留市田原地内の交番新築に伴う試掘調査である。調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地である三ノ側遺跡の範囲であり、隣接する都留文科大学駅駅舎およびロータリーの整備に伴い都留市教委が調査を実施している。工事に先立ち埋蔵文化財センター、学術文化財課、事業課との三者による協議を令和元年９月13日に行い、その結果、工事予定地の一部について試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、令和元年9月25日に学術文化財課より教学文第1926号にて依頼を受け、令和元年9月26日に実施した。

事業内容と結果

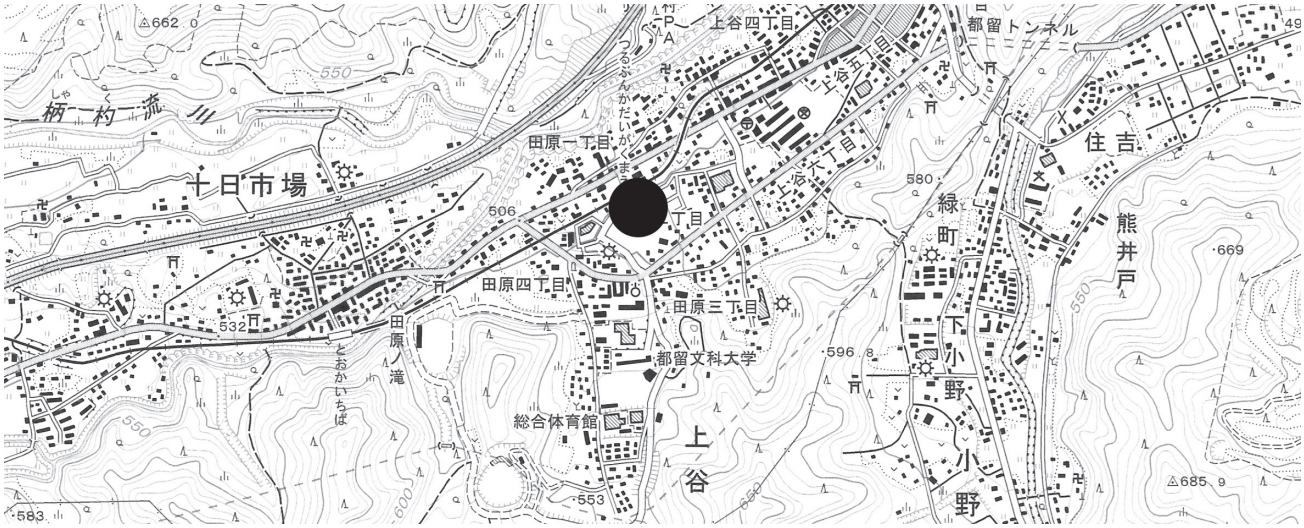
調査地点は桂川右岸の河岸段丘上に位置しており、北東へ向かって地形が傾斜している。標高は503ｍで、南側には谷村大堰から流れる家中川が勢いよく流れている。三ノ側遺跡は、先述した隣接地点のほか、数地点において発掘調査が進んでおり、古代都留郡多良郷の中心的な集落と考えられている。

試掘調査は0.25クラスバックホウを使用してトレンチ掘削を行い、床面・壁面を人力で精査した。なお、事業課の依頼でトレンチは建物予定地よりも西側に設定した（第27図）。

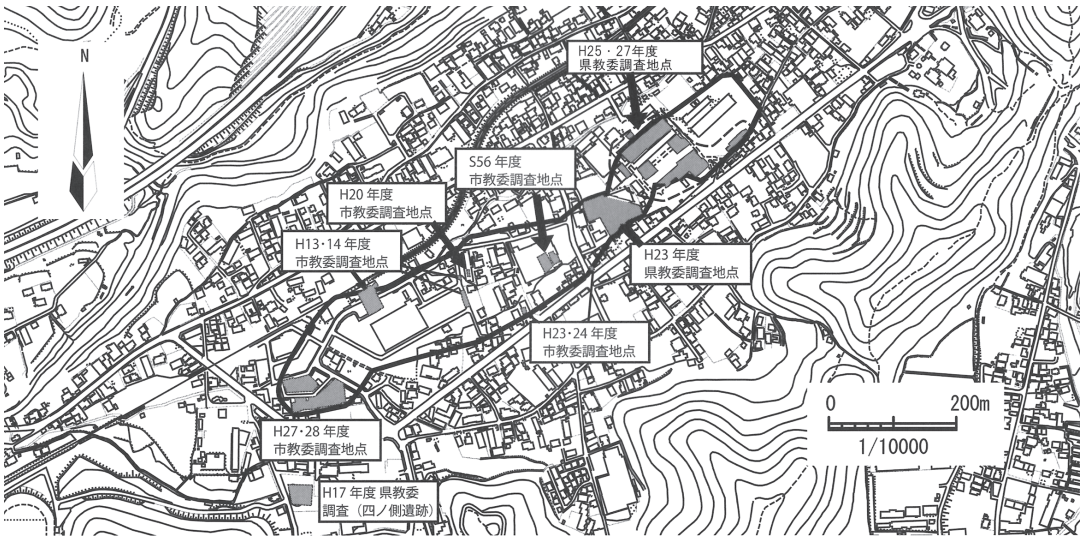
試掘トレンチは1.5ｍ×８ｍで、GL-1.45ｍまで現代のゴミや礫などが混じる盛土層が確認された。盛土層以下は、30cm厚のスコリア混じり黒色砂層、35cm厚のスコリア混じり黒褐色砂層が続く。GL-2.1ｍ以下は黒色のスコリアが主体となる層となり、下層では溶岩礫が混じる。GL-3.2ｍまで確認したが掘削深度が限界となった。

調査地点では厚く盛土層（撹乱層）が堆積していたが、これらはおそらく奈良・平安時代の遺構面および遺物包含層を削平したのちに盛土されていると考えられる。これらの原因は家中川の改修を含む田原地区の土地区画整理段階に求められるだろう。また、スコリアが混じる黒色砂層は、縄文時代中期のいわゆる「曽利のスコリア」と思われるが、この層まで掘りこまれる遺構および遺物は確認できなかった。

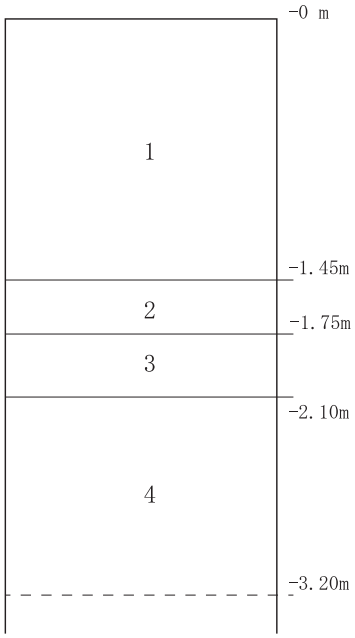
以上のことから、調査地点において工事を進めることは、埋蔵文化財保護上差し支えないと判断した。

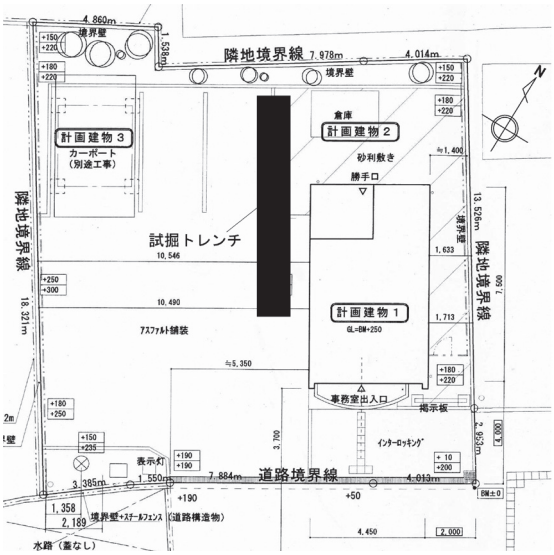


第25図　事業位置図



第 26 図　試掘調査地点と周辺の調査位置図（山梨県教育委員会 2017『三ノ側遺跡』を一部改変）



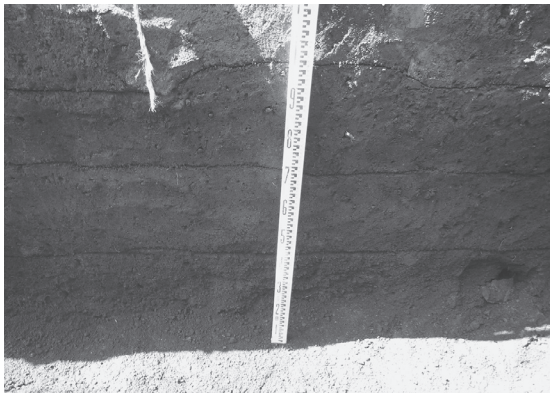


第 27 図　トレンチ配置図

1. 表土（現代のゴミ、礫が混じる盛土）
2. 黒色細砂層（ややしまる、黒色スコリア（径 10mm）含む、
　　赤色スコリア（径 2mm）少し含む（曽利のスコリアか））
3. 黒褐色細砂層（ややしまる、黒色スコリア（径 5mm）含む、
　　赤色スコリア（径 2mm）含む）
4. 黒色スコリア（径 10mm 以下主体、赤色スコリア（径 2mm）混じる
　　下層は溶岩（～拳大）を含む）

第 28 図　試掘トレンチ土層堆積状況

土層堆積状況（その1）



土層堆積状況（その2）

8　高速自動車国道中部横断自動車道新設工事　試掘（包蔵地外）

所在地	南巨摩郡南部町矢島地内	調査期間	令和元年 12 月 11 日～ 13 日
担当者	深澤一史・御山亮済	調査面積	99.1㎡（調査対象面積 1,500㎡）

調査の経緯と調査地点の環境

南部町福士字矢島地内の試掘調査は、中部横断自動車道建設に伴う暫定２車線区間の４車線化工事に先立ち実施したものである。令和元年11月18日に中日本高速道路株式会社（事業者）と学術文化財課、埋蔵文化財センターの三者で現地において協議を行い、調査対象範囲、構造物の有無確認、調査時期について確認した。

平成 30 年度の隣接地点における試掘調査では、当該地に厚い砂礫層の下に自然の後背沼地が展開する状況を確認したが遺構及び遺物の出土は認められず、埋蔵文化財の保護措置は不要と判断している。

第 29 図　事業位置図

試掘調査は、令和元年12月11日付け教学文第2721号により学術文化財課から依頼を受け、同11日～ 13日に実施した。

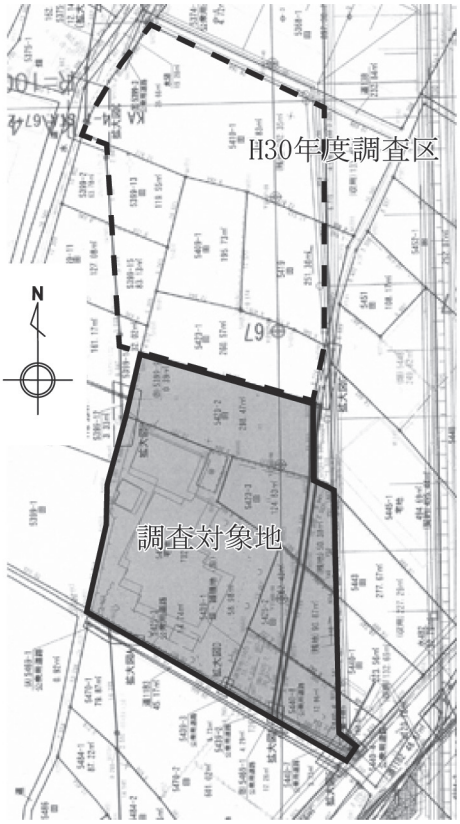
調査の結果

試掘調査では、幅約2mの試掘トレンチを６箇所設定した（第31図）。表層の旧耕作土または宅地造成土（１層：表土）を除去すると、河川由来の砂礫層が地表面下約2,200 ～ 2,600mmまで堆積していた（２～８層）。砂礫層は、小径粒と大径粒の小礫～礫が互層に堆積しており、部分的に福士川下流方向に向かって発達するラミナが観察できる。砂礫層の下からは明褐色粘土層を確認した（９層）。９層は調査対象地の東から西に向かって厚く堆積し、５・６トレンチでは東に向かって深く落ち込んでいる状況を確認した。２～４トレンチでは落ち込み上面と同様の深さで９層が確認できることから、調査対象範囲の中央部で筋状に深くえぐれていると推測でき、富士川方向に向かう氾濫流路であると考えられる。

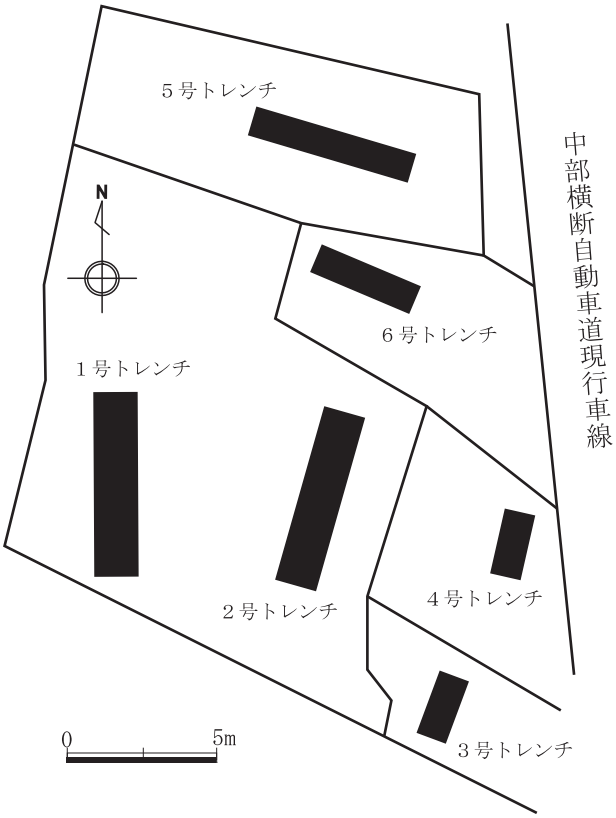
調査所見

今回の調査では、平成30年度の調査で確認した自然の後背沼地が今回調査対象地にまで及んでいることを確認し、当該地が度重なる氾濫により形成された氾濫平野であることを追認した。昨年度成果と同様に、遺構や遺物の出土は認められないため、当該地における遺跡は無いと判断した。

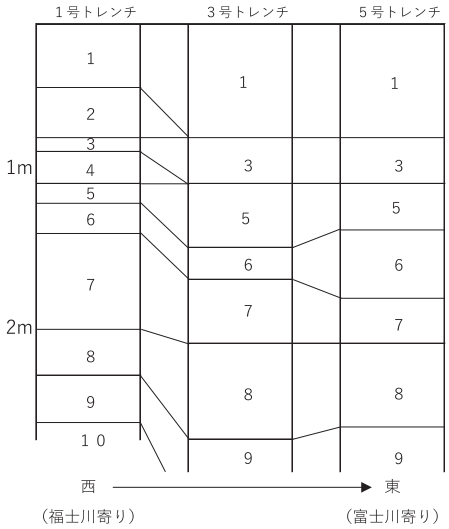
したがって、当該試掘調査対象地における埋蔵文化財の保護措置は不要と判断したが、佐野十右衛門屋敷が近接することから、近隣において開発が行われる際には、改めて埋蔵文化財の調査を実施する必要がある。



第30図　調査区周辺図



第31図　トレンチ配置図



1. 表土
2. 褐色砂礫層（径20～100㎜の円礫）
3. 褐色砂層（下層ほど粒径小）
4. 褐色砂礫層（径20㎜の小礫主体、下層ほど粒径小）
5. 褐色砂層（北に向かって層厚薄い）
6. 暗褐色砂礫層（径20～50㎜の円礫主体）
7. 暗褐色砂礫層（径50～150㎜の円礫、葉理観察）
8. 暗褐色砂層（粘性・しまり強、炭化物微量含む）
9. 明褐色粘土層（炭化物微量含む）
10. 褐色砂礫層（径20～200㎜の礫主体）

第32図　土層堆積柱状図

礫層の厚い堆積状況

河川流路の痕跡

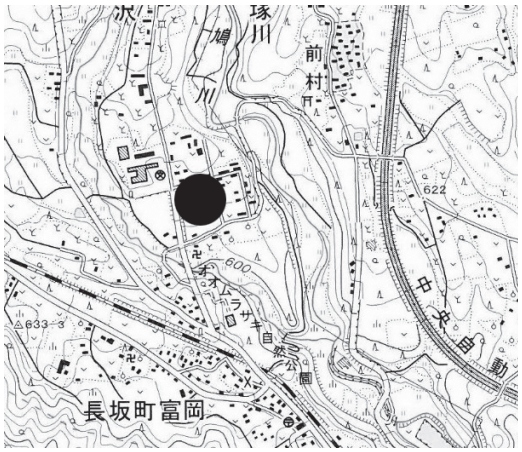
Ⅱ　立会調査

9　県立北杜高校蹄洗場建設事業　立会（原町農業高校前遺跡）

所在地	北杜市長坂町渋沢 1007-19	調査期間	令和元年 10 月 17 日
担当者	吉岡弘樹	調査面積	1.14㎡（調査対象面積 14.73㎡）

調査経緯

本事業は、県立北杜高校蹄洗場建設事業に伴う立会調査である。調査に先立ち、令和元年10月11日に学校施設課（事業課）と学術文化財課が協議を行い、厩舎に接続する支柱（6本）の施工で掘削範囲は余掘りを含めて500mm四方、最大掘削深度は現地表面下約500mmの軽微な掘削であることから、施工に際して立会調査により対応することとなった。



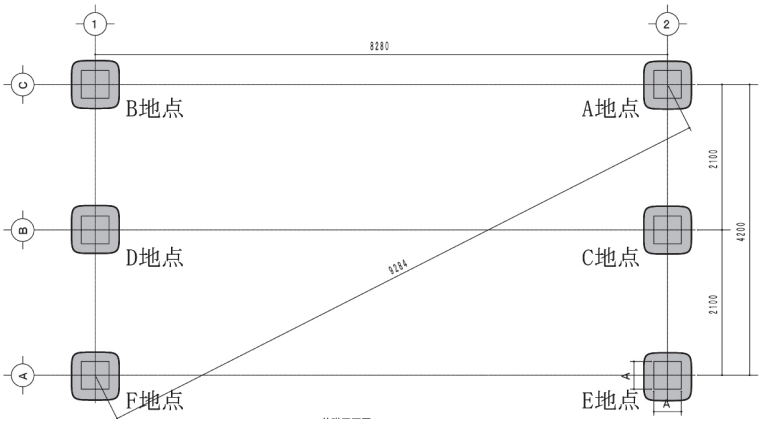
第33図　事業位置図

事業内容と結果

立会調査では、A及びB地点では約400～500mmの盛土の下に2次調査の基本層序にみられる遺構検出面下層のハードローム層が検出された。C～F地点では、100～150mmのコンクリートの下約150～400mmにおいて砕石と盛土層の堆積を確認した。F地点では、下層にA・B地点で確認したハードローム層が観察された。立会調査では、すべての掘削区において遺構は検出されず、遺物の出土も認められなかった。

調査の結果、調査地点は原町農業高校前遺跡の範囲内に位置するが、遺構面が削平された後に盛土され平坦地化された場所と類推され、遺構・遺物ともに認められなかった。したがって、当地点において工事施工を実施しても支障はないものと判断した。

第34図　施工対象地点



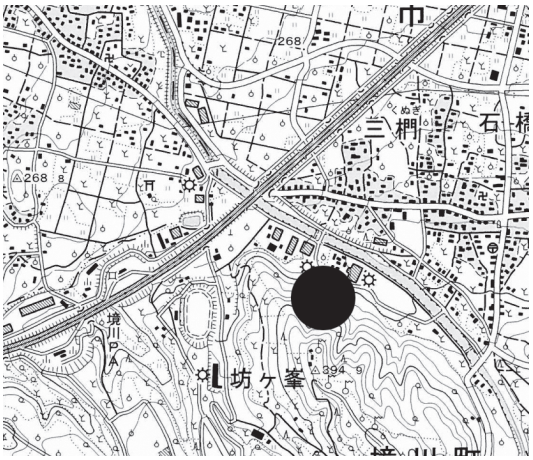
第35図　掘削区配置図

10　中央新幹線（品川－名古屋間）建設事業　踏査（包蔵地外）

所在地	笛吹市境川町三椚・坊ヶ峰地内	調査期間	平成 31 年2月 20 日
担当者	熊谷晋祐・岩永祐貴	調査面積	約 4,500㎡

調査経緯

御坂山地に沿って延びる曽根丘陵は、所々で甲府盆地に向かって突出する部分があり、旧境川村に位置する坊ヶ峰はその代表的なもののひとつで、頂部の標高は392ｍとなる。調査地点は、坊ヶ峰の尾根上から北側斜面地および丘陵裾部に当たる。坊ヶ峰の尾根上および西側はやや緩やかな斜面となるが、東側は旧斜面地となる。



第36図　事業位置図

周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地は、北側約100ｍに当センターが調査した口開遺跡があるほか、口開塚古墳、向山窯跡が位置しており古墳時代から古代にかけての遺跡が確認されている。

当該地の調査には、調査員２名と作業員５名による周辺の踏査を６時間かけて実施した。踏査では、目視および検土杖による遺構の有無の確認、下草等を除去した上で遺物の散布状況を確認した。踏査の結果、遺物の散布は認められず、石造物あるいは横穴系の遺構などの存在も認められなかった。検土杖も深くまで刺さらないことから、表土直下はすぐに地盤層になると予想される。

事業内容と結果

踏査では遺構および遺物の散布が確認されなかったため、当該踏査地点においては試掘調査等の追加の埋蔵文化財調査は不要と判断した。ただし、尾根の裾部付近からは堆積状況や土地の利用状況が異なることが想定されることから、部分的に追加調査を必要とする。

踏査のようす①

踏査のようす②

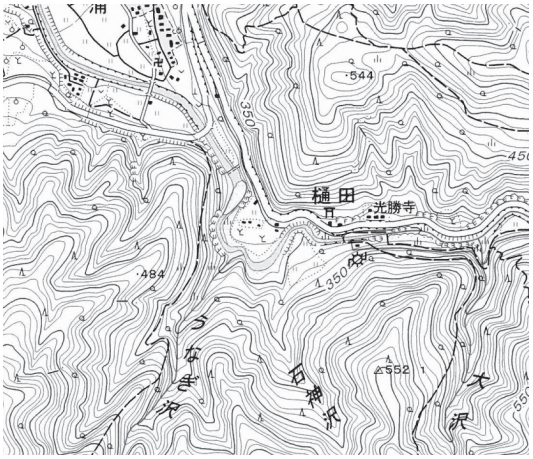
11　中央新幹線への電力供給を目的とした送電線建設　踏査

所在地	市川三郷町市川大門地内	調査期間	令和元年 12 月5日
担当者	深澤一史・御山亮済	調査面積	－

調査経緯

本事業は、東京電力パワーグリッド株式会社リニア供給線山梨建設事務所が実施する、リニア中央新幹線に電力供給するための送電線建設に先立つ現地踏査である。

現計画では、笛吹市から富士川町の山中の各所に送電線を建設する計画である。送電線経路のうち１箇所について、山中の比較的平坦地に該当することから、計画段階で事前に埋蔵文化財包蔵地に該当する可能性があるか、事業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターの三者で現地確認を行うこととなった。



第37図　事業位置図

事業内容と結果

対象地点は芦川左岸の山中にあり、頂部の標高は 556.8 mである。調査の結果、頂部には本丸に該当する平場があり、平場に続く尾根上には堀切や土塁が築かれており、曲輪が造成されている状況を確認した。したがって、当該地には山城が存在するといえる。これまでに『甲斐国志』をはじめとする文献史料では当該地に城（跡）が存在したといった記録が見当たらない。規模も小規模であることから、烽火台の可能性も考えられる。

今後、山城の専門家や市川三郷町の文化財担当職員と情報を共有しながら、埋蔵文化財包蔵地の範囲を検討するとともに周知を行う。また、施工に当たっては、堀切や土塁、曲輪が良好に残存している状況を踏まえ、事業者と情報共有をするとともに、埋蔵文化財の保護について協議を継続する。

第38図　遺構配置図

主郭と思われる平坦面

残存する堀切

Ⅲ　分布調査

12　国営施設機能保全事業に先立つ詳細分布調査事業（殿林遺跡・安道寺遺跡）

所在地	甲州市塩山上萩原・中萩原・下粟生野地内	調査期間	平成 31 年 1 月 7 日～ 3 月 29 日 平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
担当者	柴田亮平、御山亮済、熊谷晋祐、北澤宏明、岩永祐貴、佐賀桃子	調査面積	殿林遺跡：約 55,000㎡ 安道寺遺跡：約 70,000㎡

第 1 章　調査経緯と過去の調査成果

第 1 節　調査に至る経緯

本事業は、農林水産省関東農政局西関東土地改良調査管理事務所笛吹川沿岸支所が実施する笛吹川沿岸国営施設機能保全事業（平成24 ～令和3年度予定）に先立ち、事業により影響が懸念される甲州市殿林遺跡及び安道寺遺跡周辺の埋蔵文化財の状況を把握するために、埋蔵文化財センターが平成26年度より実施している。

これまでの詳細分布調査として、平成 27 年 2 月には事業対象地において地権者からの発掘調査承諾書に基づいて各遺跡の範囲確認のための試掘調査を実施した。平成 28 年度は事業対象地及びその周辺において地形の詳細観察や踏査、地域住民への聞き取り調査を実施した。平成 29 ～ 30 年度にかけて、引き続き地域住民への聞き取り調査を行いつつ、埋蔵文化財調査のための基準点測量設置（平成 29 年実施）や過年度に実施した調査成果の整理作業を実施した。調査実施状況は、各年の『山梨県内分布調査報告書』に詳細を記載しているので、参照していただきたい。

これまでの聞き取り調査では、事業対象地周辺の住民から聴取した河川氾濫・土地造成等の土地履歴に関する情報や土地地権者の耕作に伴う土器の出土情報といった成果があり、自然地形の構造や景観、遺跡の広がりといった地理的環境、歴史的環境の検討を行うに至っている。

第 2 節　過去の調査履歴

安道寺遺跡（第 1 図）

安道寺遺跡は、笛吹川土地改良事業管水路敷設に伴う分布調査によって確認された。その後、昭和 51（1976）年に発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡 19 軒、土器集積遺構 1 基、土器埋設遺構２基が検出された。竪穴住居跡は五領ヶ台式期から曽利Ⅱ式期までのものが存在し、縄文時代中期の集落遺跡であることが判明した。特筆されるのは 17 号住居跡である。住居床面の東壁付近で土坑が検出され、中には土器が複数埋納されていた。まず、焼土塊が入った完形土器を土坑に入れ、１個の把手で蓋をし、土器の周辺に３つの把手を配置する。さらに４つの把手がついた完形の大形水煙文土器を破壊し、先に４つの把手を入れ、これらを覆う様に胴部破片を納め、土をかけて埋めたものと考えられている。この土坑は、他の土坑から出土するものとは様相が異なり、土器を埋設するために用意された特殊な土坑であると考察している。遺構が良好に残り、資料的価値の高い縄文土器や土偶が出土している（山梨県教育委員会編 1978）。

その後、甲州市教育委員会により、平成 20（2008）年には農道拡幅工事に伴う試掘調査が行われ、中世から近世の陶器類や内耳土器が出土した。古銭やキセルもあることから、寺院に伴う墓の存在が想定されている。調査区は谷状の地形が埋まった箇所であり、この谷状地形が近接する松泉寺か現存しない「安道寺」に付随するものである可能性が指摘されている（甲州市教育委員会編 2010）。平成 21（2009）年には土地改良中に多量の縄文土器が出土したとの連絡を受けたことにより、緊急発掘調査が実施された。調査区は昭和 51 年の調査区から北

へ30ｍほど離れた地点である。調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡の周溝が２条検出され、２軒の住居跡が重複している一部分が見つかったと報告されている。遺物は縄文土器や土偶を中心に、土嚢袋20袋程度出土しており、遺存状態が良好の資料も多い（甲州市教育委員会編2011）。

殿林遺跡（第２図）

殿林遺跡は、昭和36（1961）年、地域住民が耕作中に縄文時代中期の大形深鉢形土器を偶然掘り出したことから発見された遺跡である。この土器は山梨県に保管され、知事室、文化課、図書館、考古博物館へと移転し、昭和63（1988）年に国の重要文化財に指定された。周辺の畑で表面採集される遺物の種類や量から、縄文時代中期の拠点的な集落であったことが想定されている（塩山市史編さん委員会1996）。

平成23（2011）年には甲州市教育委員会が高齢者デイサービス施設建設に伴う試掘調査を実施している。しかし、遺構確認面までの深さが非常に浅いことから、調査区は過去に削平されたことが判明した。時代・性格の判定できる遺構・遺物も見つからなかった（甲州市教育委員会編2013）。

安道寺遺跡・殿林遺跡が所在する甲州市塩山は、中部山岳地帯の南東端、多摩丘陵を経て関東平野へと続く地域に位置する。いわば中部高地の文化と関東の文化の接触点にある地域である。そのため、両地域の文化を対比するためにも良好な資料を有する遺跡であることが評価されている。しかし、安道寺遺跡は発掘調査が行われているが、整理作業の途中で中断しており、本報告書が刊行されていない。殿林遺跡は発掘調査が行われておらず、両遺跡とも実態が把握されていないという課題がある。両遺跡の重要性は周知されているため、改めて遺跡の評価を行う必要性が求められている。

第３節　本事業に伴う発掘調査経過

今回報告する両遺跡について、平成26年度に試掘調査、27年度に踏査を実施している。それぞれの調査について経過をまとめる。

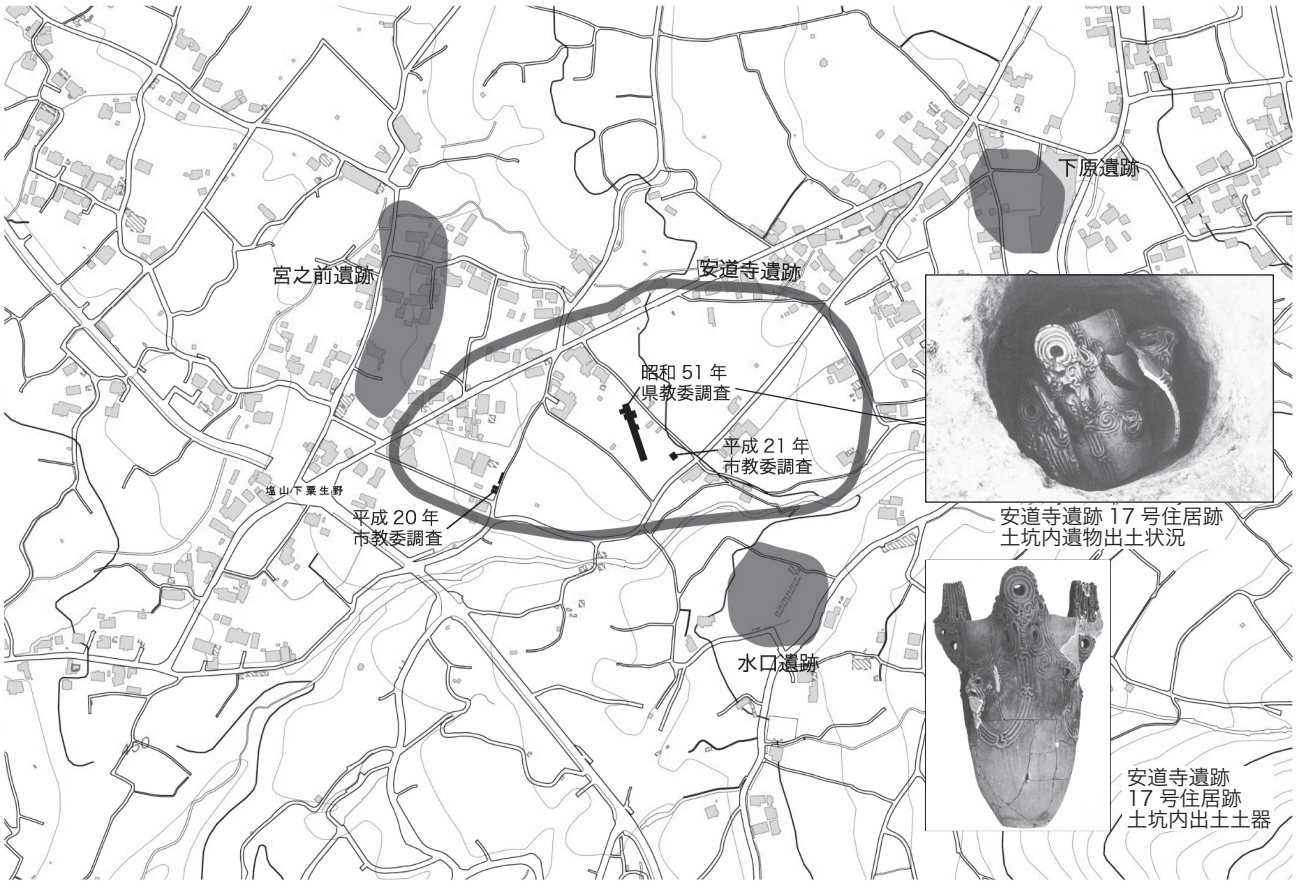
①試掘調査

殿林遺跡の試掘調査は平成27（2015）年２月９日に着手した。１日につき試掘トレンチ４本程度のペースで、9・10日、12・13日の４日間、計17本のトレンチ調査を実施した。試掘調査時には周辺住民への聞き取り調査も行っている。安道寺遺跡では、同年２月16日に着手し、16日、18～20日の４日間で、計13本のトレンチ調査を実施している。この際、過去に調査地点より出土した土器片について、地権者から譲渡されている。

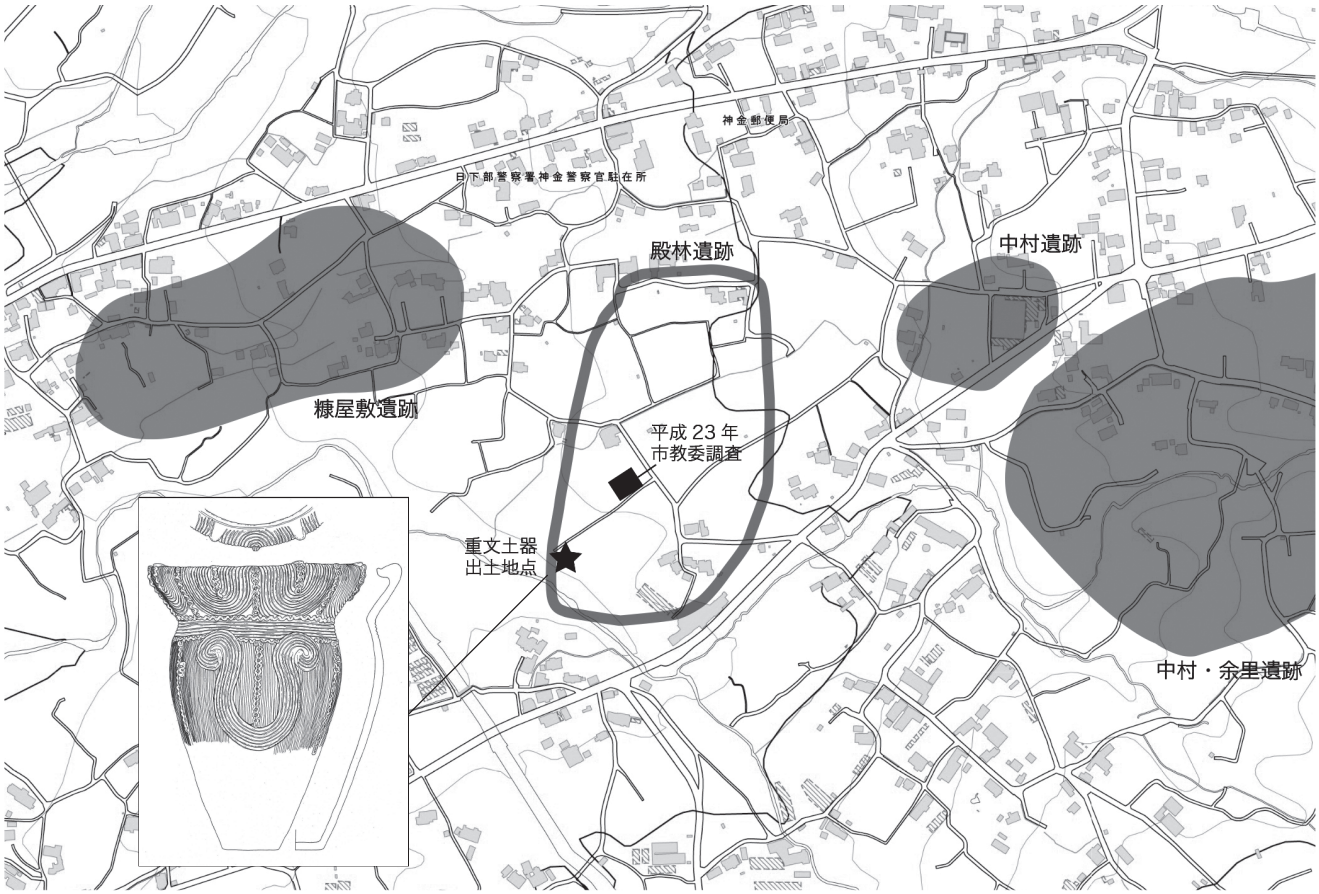
②踏査

遺跡の範囲を、地形や遺物の露出状況などから検討するため、遺跡周辺の踏査を実施している。なお、地表面に露出している遺物については、保護を目的として採集することとした。殿林遺跡では、平成28年３月15～17日の３日間で、約55,000㎡を対象に行い、プラスチック箱にして１箱分の遺物を採集した。安道寺遺跡では、同年３月18日・22日の２日間で約70,000㎡を対象に行い、プラスチック箱にして２箱分の遺物を採集した。なお、踏査と並行しながら周辺住民に聞き取り調査を実施している。調査地点の土地所有者より、当該地で出土した遺物を譲渡されることもあり、そのうちの一つは既に報告しているほぼ完形の釣手土器である（山梨県教育委員会編2018）。

実地踏査を終了した後、採集遺物について土地所有者より埋蔵物に係わる権利放棄の承諾を得ることとした。この作業は平成28年度から31年度まで実施し、同時に土地所有者に対して聞き取り調査を行っている。



第1図　安道寺遺跡の範囲と過去の調査地点



第2図　殿林遺跡の範囲と過去の調査地点

第４節　本事業に伴う整理作業経過

平成 26 年度に試掘調査で出土した遺物、27 年度に表面採集して埋蔵物の権利放棄を承諾された遺物について、平成 27 年度から 31 年度にかけて整理作業を実施した。

平成 27 年度は、平成 28 年 1 月 25 日から 3 月 18 日までの期間で行い、試掘調査で出土した遺物の注記･接合･実測・拓本・トレースを実施した。

平成 28 年度は、平成 29 年 3 月 6 日から 24 日までの期間で行い、土器の洗浄・注記、および安道寺遺跡から出土した釣手土器の実測作業を実施した。

平成 29 年度は、釣手土器の実測図についてデジタルトレースの業務委託を行い、調査報告書に掲載するとともに、平成 30 年 1 月 9 日～ 3 月 28 日にかけて、踏査で採集した遺物の実測・拓本およびトレース作業を実施した。なお、平成 29 年度に実施した「知ろう山梨の歴史！山梨の遺跡発掘展 2018」では釣手土器の展示を行った。また、平成 30 年 3 月 20 日に刊行された『埋文やまなし』第 56 号にも、安道寺遺跡および釣手土器についての記事を掲載した。

平成 30 年度は、調査担当者による出土遺物の検討会を 5 回実施し、試掘トレンチごとの遺物の年代観を検討した。また、平成 31 年 1 月 7 日～ 2 月 14 日にかけて、踏査で採集した遺物の実測・拓本およびデジタル作業によるトレース・図版作成を実施した。

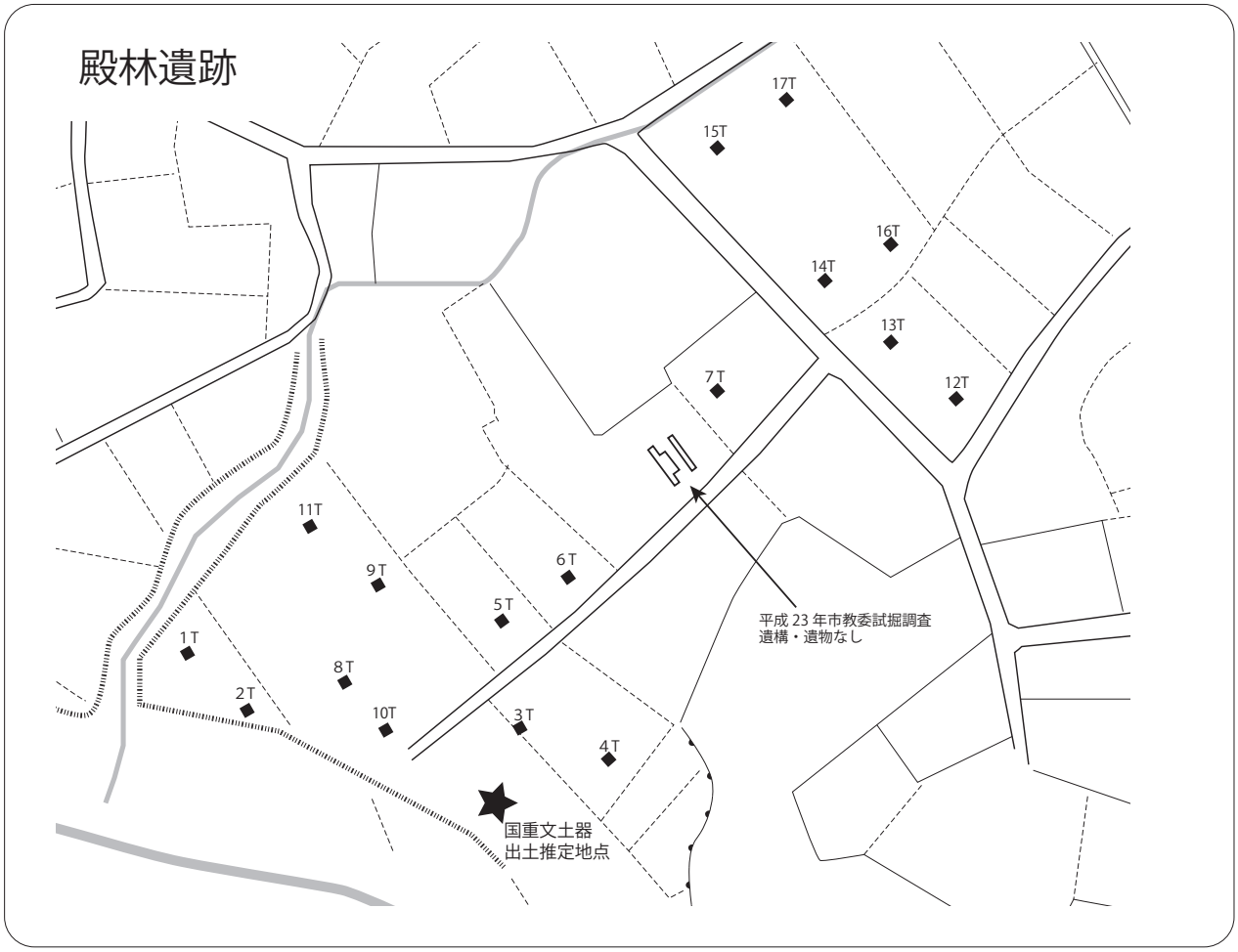
平成 31 年度は、令和元年 9 月 2 日～ 10 月 30 日、令和 2 年 1 月 14 日～ 2 月 21 日にかけて、図版作成および遺物の写真撮影､写真図版の作成を行った｡また年間を通して報告書の執筆作業を行い､必要な図版等を作成した。

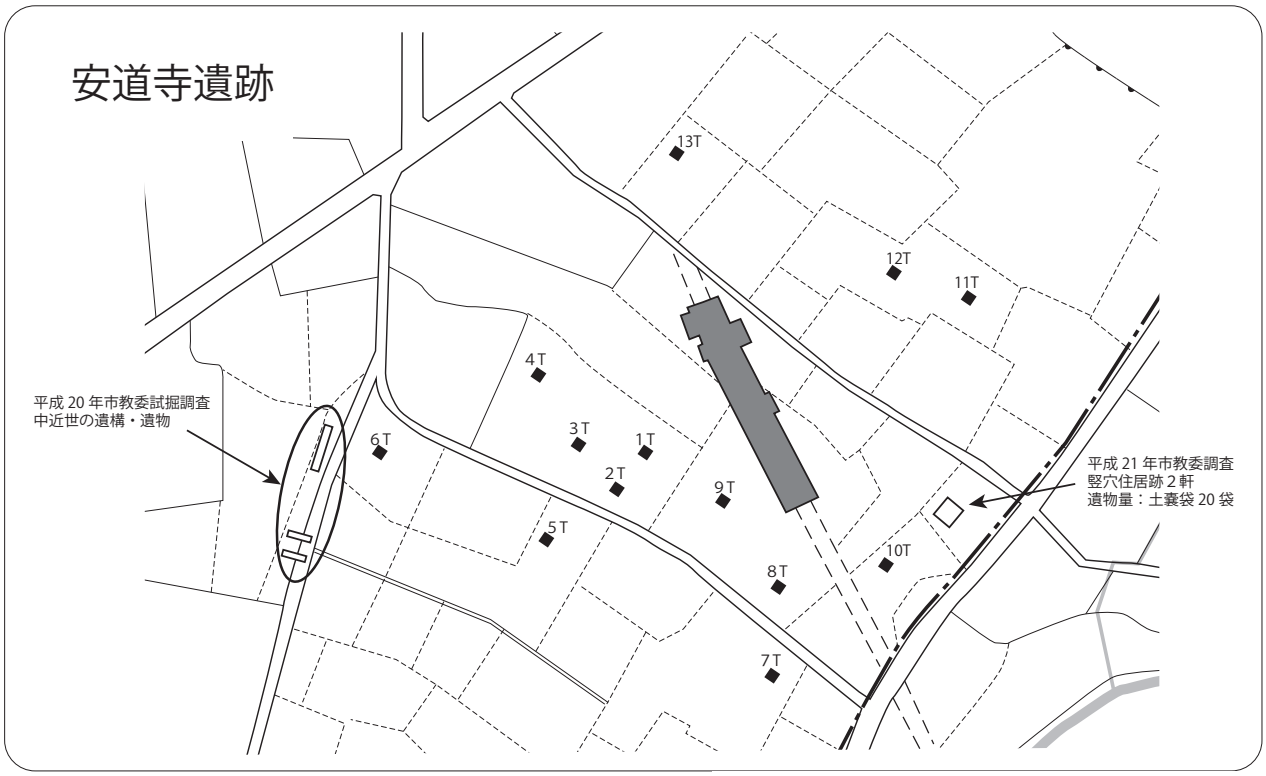
第５節　調査の目的と課題

今回の一連の調査で対象となっているのは、周知の埋蔵文化財包蔵地である殿林遺跡と安道寺遺跡の 2 遺跡である。これらの遺跡では縄文時代中期の造形的に優れた深鉢土器が出土しており、安道寺遺跡出土の深鉢は県指定有形文化財、殿林遺跡出土の深鉢は国指定重要文化財に指定されている。一方で、これらの遺跡の内容や分布については、過去の調査履歴からも未解明な部分が多い。

したがって、本年度はこれまでの調査成果の取りまとめを行いつつ、事業により影響を受ける範囲を含めた埋蔵文化財（主に殿林遺跡・安道寺遺跡）の範囲を検討することを課題とした。過年度に実施した試掘調査、踏査によって採取した縄文土器の型式や分布状況を地形と照らし合わせることで、遺跡の範囲について学術的な検討を行う。

塩山市史編さん委員会 1996「安道寺遺跡」『塩山市史』史料編 第一巻 原始・古代・中世　塩山市
甲州市教育委員会編 2010「安道寺遺跡」『平成 20 年度市内遺跡発掘調査等事業報告書』甲州市教育委員会
甲州市教育委員会編 2011「安道寺遺跡」『平成 21 年度市内遺跡発掘調査等事業報告書』甲州市教育委員会
甲州市教育委員会編 2013「殿林遺跡」『平成 23 年度市内遺跡発掘調査等事業報告書』甲州市教育委員会
山梨県教育委員会編 1978『安道寺遺跡調査報告書（概報）』山梨県教育委員会
山梨県教育委員会編 2018『山梨県内分布調査報告書（平成 29 年 1 月～ 12 月）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 317 集　山梨県教育委員会





0m　100m

第3図　H26 年度試掘調査トレンチ分布図

第4図　平成27年度　安道寺遺跡分布調査　概略図

第5図　平成27年度　殿林遺跡分布調査　概略図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

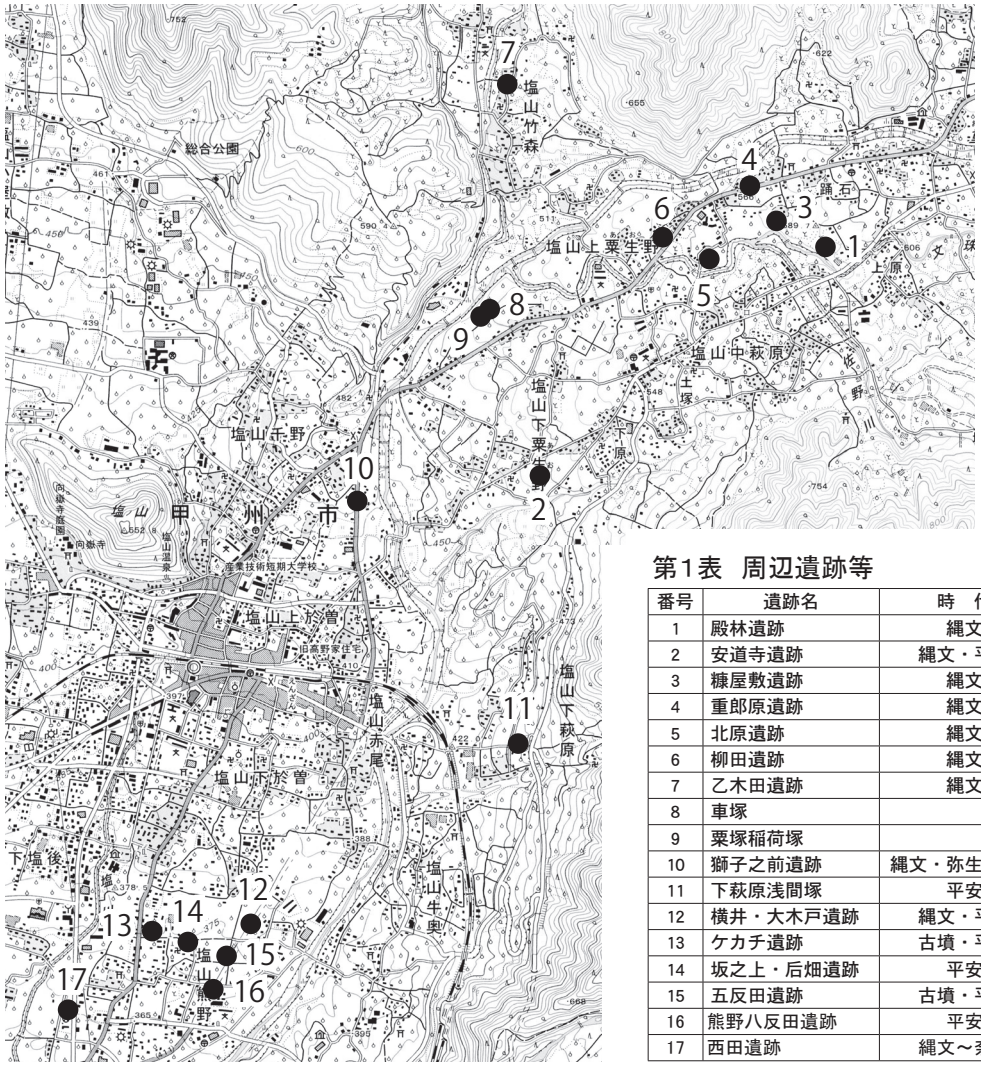
甲州市は甲府盆地の東側に位置しており、北側に埼玉県秩父市、東側に大月市、丹波山村、小菅村、南に笛吹市、西に山梨市が隣接している。遺跡が所在する甲州市塩山は、盆地の東縁に伸びる大菩薩嶺の西麓に位置し、周辺の山地から流れ込む河川が造り出した台地、扇状地により成り立っている。遺跡の北側には、大菩薩山系に水源を持つ重川が東から西へ流れており、殿林遺跡、安道寺遺跡はその支流が造り出した緩やかな傾斜を持つ台地上に立地している。現在、遺跡周辺には果樹を中心とした畑と集落が広がっている。

第２節　歴史的環境

殿林遺跡、安道寺遺跡は、共に縄文時代中期の遺跡である（第１表、第６図）。重川流域には山梨県を代表する縄文時代の遺跡が多く分布しており、下流には前期の獅子之前遺跡、大木戸遺跡などが確認出来る。中期の遺跡は上流に位置しており、殿林遺跡、安道寺遺跡、重郎原遺跡、糠屋敷遺跡、北原遺跡などが確認されている。

塩山地域は、弥生時代の遺跡は希薄だが、古墳時代になると、重川を下った扇状地に西田遺跡や熊野八反田遺跡で集落が確認される。さらに奈良・平安時代になると、和歌を刻書した土師器坏が発掘されたケカチ遺跡や五反田遺跡など大規模な集落が見つかっており、古代甲斐国の於曽郷の中心的な地域であったと推測される。

平安時代末期の修験に関する塚である下萩原浅間塚をはじめとして、重川流域では中世から近世にかけての塚が点在しており、安道寺遺跡の範囲内にも、かつて塚（土塚）が存在したと言われている。



第6図　周辺の遺跡地図

第1表　周辺遺跡等

番号	遺跡名	時　代
1	殿林遺跡	縄文
2	安道寺遺跡	縄文・平安
3	糠屋敷遺跡	縄文
4	重郎原遺跡	縄文
5	北原遺跡	縄文
6	柳田遺跡	縄文
7	乙木田遺跡	縄文
8	車塚	
9	粟塚稲荷塚	
10	獅子之前遺跡	縄文・弥生・平安
11	下萩原浅間塚	平安
12	横井・大木戸遺跡	縄文・平安
13	ケカチ遺跡	古墳・平安
14	坂之上・后畑遺跡	平安
15	五反田遺跡	古墳・平安
16	熊野八反田遺跡	平安
17	西田遺跡	縄文～奈良

第３章　出土した遺物

第１節　土器

安道寺遺跡（Ｈ26年度試掘調査）

第１号トレンチ（第７図１～54）前期１、２。１は諸磯ｃ式で細い隆帯に竹管文で刻みを入れる。２は半裁竹管による平行沈線が施文される十三菩提式である。五領ヶ台式土器３～９。出土したすべてが、集合沈線文系で３は縄文施文後に沈線を引く。４は交互刺突文の下部に沈線を斜めに交差するように施文する。５は平行沈線を縦位・横位に施文する。勝坂式土器10～29。10は口縁部片で上部に角押文が施文される狢沢式段階の土器である。11～17は新道式段階の土器である。11、12、14は隆帯に沿うキャタピラ文と三角押文がセットで施文される。三角押文は連続ではなく押圧のため新道式２段階である。13、15、16は連続刺突の三角押文が施文される新道式１段階である。17は、底部片で破片上部に隆帯に沿うキャタピラ文がある。18は藤内式に当たる。隆帯にキャタピラ文が沿い、その脇に沈線が施文される。外面は丁寧にナデがされている19～27は井戸尻式段階の土器である。19は幅広い隆帯に沈線で三叉文がと円形の刺突がつく。20～26は、０段３条の縄文が施文される。23は波状口縁部片と思われる。24は隆帯上に綾杉状刻みと刺突による刻みがつく。27は鎖状隆帯が横位につく。28は沈線で波状文が描かれる。29は沈線内を半裁竹管による平行沈線が描かれる。30は隆帯に刻みが沿っている。曽利式土器31～49。31は曽利Ⅰ式の胴部片で、多段化した波状隆帯が横位についており、曽利Ⅰ式でも新段階と考えられる。32～37は曽利Ⅰ～Ⅱ式の土器である。32～34は口縁部片で外面はナデられ、内側に肥厚する。35、37、39は条線小甕か重弧文タイプの土器の口縁部片である。36は波状隆帯が横位に描かれる。38は曽利Ⅱ式の胴部片で櫛歯状工具による条線を地文とし、半裁竹管のナデがされた隆帯が施文される。40は曽利Ⅲ式の土器で、棒状工具による沈線で文様が描かれる。41～49は曽利式に属すると考えられる土器である。49は口縁部片で縄文を地文として、隆帯が横位に展開していくと考えられる。モチーフの詳細が不明だが曽利Ⅱ式に併行する可能性が高い。

第２号トレンチ（第８図55～70）五領ヶ台式土器55、56。55は薄く細かな縄文と結節縄文が描かれる。勝坂式土器57～64。57は口縁部片で角押文が描かれる狢沢式である。58はキャタピラ文と沈線文が描かれており、藤内式と考えられる。59～63は井戸尻式で、59は隆帯上に刺突による刻みがされている。60、63は沈線で半肉彫り的にモチーフが描かれる。61は59と同様の刻みと綾杉状の刻みが描かれる。62は縄文のみが残っているが、０段３条の縄文である。64は隆帯脇にキャタピラ文沿う。曽利式土器65。65は無文の口縁部片と考えられる。

第３号トレンチ（第８・９図71～97）五領ヶ台式土器71～82。71は波状の口縁部片で口唇部に刻みを持つ。72、80は底部片で、底は外側に張り出す五領ヶ台式の特徴が認められる。73、74は縄文を地文として平行沈線が描かれる。75は沈線による円形モチーフの下部から沈線が引かれ、その周りを刺突で埋める。地文には結節縄文が採用されている。76は半裁竹管による平行沈線が描かれ、横位の下は斜位の沈線が交互に引かれている。79は縄文を地文として、隆帯上にも描かれる。沈線下は無文とする。81は断面三角形の工具で刺突がされる。82は76とほぼ同様の土器である。勝坂式土器83～86。83は口縁部片で三角押文が連続で刺突される新道式１段階である。84は隆帯にキャタピラ文と波状の沈線文が沿っており、藤内式と考えられる。85は半肉彫り的な波状文が描かれ、隆帯上に刻みがつく。曽利式土器88～91。88は重弧文タイプの口縁から頸部片で、波状隆帯が横位につく曽利Ⅱ式と考えられる。89は棒状工具で沈線を描き、３本の隆帯に見えるように描かれる曽利Ⅲ式である。91は半裁竹管でナデた隆帯を持つ曽利Ⅱ式である。

第４号トレンチ（第９図98～100）98は底部片で結節縄文を施文し、底が張り出す形になっている五領ヶ台式土器である。99は角押文がつく狢沢式の胴部片で、100は三角押文がつく新道式である。

第５号トレンチ（第９・10図101～112）五領ヶ台式土器101、102。102は刻みを口唇部につけ、直径４㎜程の円形の刺突がつく。勝坂式土器103。103は隆帯脇にキャタピラ文がつく土器であるが、詳細な時期の断定はできない。曽利式土器104～109。106、107は条線を施文する土器である。108は口縁部片であり、口唇部を内側に肥厚させ細い隆帯で渦巻状のモチーフを描き、その渦から細い波状隆帯がつく。地文は縄文である。

第6号トレンチ（第10図113 ～ 115）五領ヶ台式から曽利式まで１点ずつ出土している。114は井戸尻式の口縁部片で、鎖状隆帯がつく。

第７号トレンチ（第10図116、117）116は五領ヶ台式の口縁部片で、117は３本の隆帯上を指で押圧する胴部片である。

第８号トレンチ（第10図118 ～ 130）。前期118 ～ 120。118は諸磯ｂ式に位置付けられ、低く幅の狭い隆帯上を斜めに刻む。119、120は十三菩提式土器で、胴部片で薄く浅い平行沈線を斜位に施文する。五領ヶ台式土器121、122。121は横に隆帯を貼り、その下から半裁竹管による平行沈線が引かれる。122は縄文施文後に平行沈線が引かれる。隆帯上にも縄文がつく。勝坂式土器123 ～ 126。124は胴部片で半肉彫り的な文様モチーフとなっている。また、沈線で三叉文が描かれる井戸尻式である。126は口縁部片で立体的な円形モチーフがつく。外面の円形モチーフから下がる隆帯上には線状の刻みが入る。曽利式土器127、128。２点とも無文の口縁部片である。127は内側に肥厚する。

第９号トレンチ（第11図131 ～ 140）五領ヶ台式土器131 ～ 135。131は浅鉢の口縁部であり器面の内側に文様帯を持つ。135は底部片で胎土に金雲母が含まれる。勝坂式土器136、137。136は隆帯脇にキャタピラ文が沿う。137は綾杉状の刻みがつく。

第10号トレンチ（第11図141 ～ 143）すべて勝坂式土器である。141は狢沢式で角押文が縦・横方向に描かれる。142は半裁竹管で刻みをした隆帯を持つ藤内式である。143は井戸尻式に特徴的な縄文が施文される。

第11号トレンチ（第11図144 ～ 153）勝坂式土器144 ～ 147。144は隆帯が横位に貼られ、その脇にキャタピラ文がつく。その下部は角押文が垂下する。147は無文の口縁部片である。曽利式土器148 ～ 150。148、150は無文の口縁部片である。149は条線が描かれている。いずれの土器も詳細な時期は判断できない。

第12号トレンチ（第11図154 ～ 159）154は刻まれた隆帯と縄文が施文され、条が縦に入る縄文が施文され井戸尻式と考えられる。155 ～ 157すべて胴部片であり、条線が地文として描かれ曽利式と考えられる。

第13号トレンチ（第12図160 ～ 170）五領ヶ台式土器160、161。２点とも縄文系で平行沈線が描かれる土器である。勝坂式土器162 ～ 168。162は口唇部を刻み、その下部の文様帯は半裁竹管によるキャタピラ文と三角押文が施文される新道式１段階である。166は半裁竹管で沈線を引いた後、隆帯を張り付け半裁竹管で刻む。井戸尻式と思われる。

平成26年度回収（第12・13図171 ～ 216）ここで記載する遺物は、平成26年度試掘調査時に回収・表採されたもので、詳細な地点は分からない。五領ヶ台式土器171 ～ 179。171は外反していく器形の土器の胴部片で、隆帯の上部は交互刺突文が描かれる。173は五領ヶ台式に特徴的な外に張り出す底部片で結節縄文が施文される。勝坂式土器180 ～ 201。181はキャタピラ文のみが認められるが、丁寧に押し引きされる。そのキャタピラ文の脇にさらに刻みを加える。186は低隆帯で楕円区画をつくり、その内部を縦の条線で充填する井戸尻式と考えられる。187は井戸尻式１段階の屈曲底部片である。低い位置に角度の強い屈曲がつく。197は口縁部片で円形のモチーフをつける下面のナデは甘い。曽利式土器202 ～ 212。202は半裁竹管でナデられた隆帯でその間に条線が充填される曽利Ⅱ式である。

平成26年度表採・住民採集（第14・15図217 ～ 255）ここで記載する遺物においても、平成26年度試掘調査時に表採されたものであるが、詳細な地点は不明である。五領ヶ台式土器217 ～ 220。217は胴部片で平行沈線が描かれる。219は交互刺突文が施文される。220は五領ヶ台式に特徴的な底部で、底は張り出す形となる。勝坂式土器221 ～ 236。226から230までキャタピラ文がつく新道から藤内式にあたる土器である。226は三角押文による刺突が認められる。235は、井戸尻式３段階にあたる土器で、半肉彫り的な文様で器面を丁寧に磨いている。曽利式土器237 ～ 244。237は無文の口縁部片。239は、地文に条線を持ち、細い隆帯で加飾をする曽利Ⅱ式である。240の文様の一部は渦巻きモチーフと思われる。そして、この文様は、棒状工具で施文されており、曽利Ⅲ式と考えられる。また、平成26年度では、近隣住民が表採した遺物の提供を受けた（253 ～ 255）。253は、井戸尻式の口縁部片と思われる。立体的な円形ドーム状で肉彫り的な文様が描かれる。接合痕から半球状の粘土を接

合して作られていることがわかる。

平成27年度表採（第16～19図256～365）平成27年度の表採は、簡易GPSを用い、表採地点を記録した。五領ヶ台式土器256～266。259は五領ヶ台式に特徴的な底部片。264は隆帯を貼りつけ、縄文を施文した後に、平行沈線を引く胴部片である。勝坂式土器267～295。279、288は口縁部片である。279は藤内式に見られる半円球形の装飾で、裏面は沈線がつく。288は井戸尻式も破片で、逆三角形状の区画に内部を三叉文と縦位の沈線で充填する。曽利式土器296～346。311は曽利Ⅱ式の胴部片である。隆帯を半裁竹管でナデを行い、その間を条線で充填する。321は曽利縄文系の破片である。328は水煙文土器の破片である。365は、台付甕の胴部から脚部の破片である。外面は、タテハケの後に、ナデ調整が施され、内面はナデ調整が見られる。焼成は良好である。

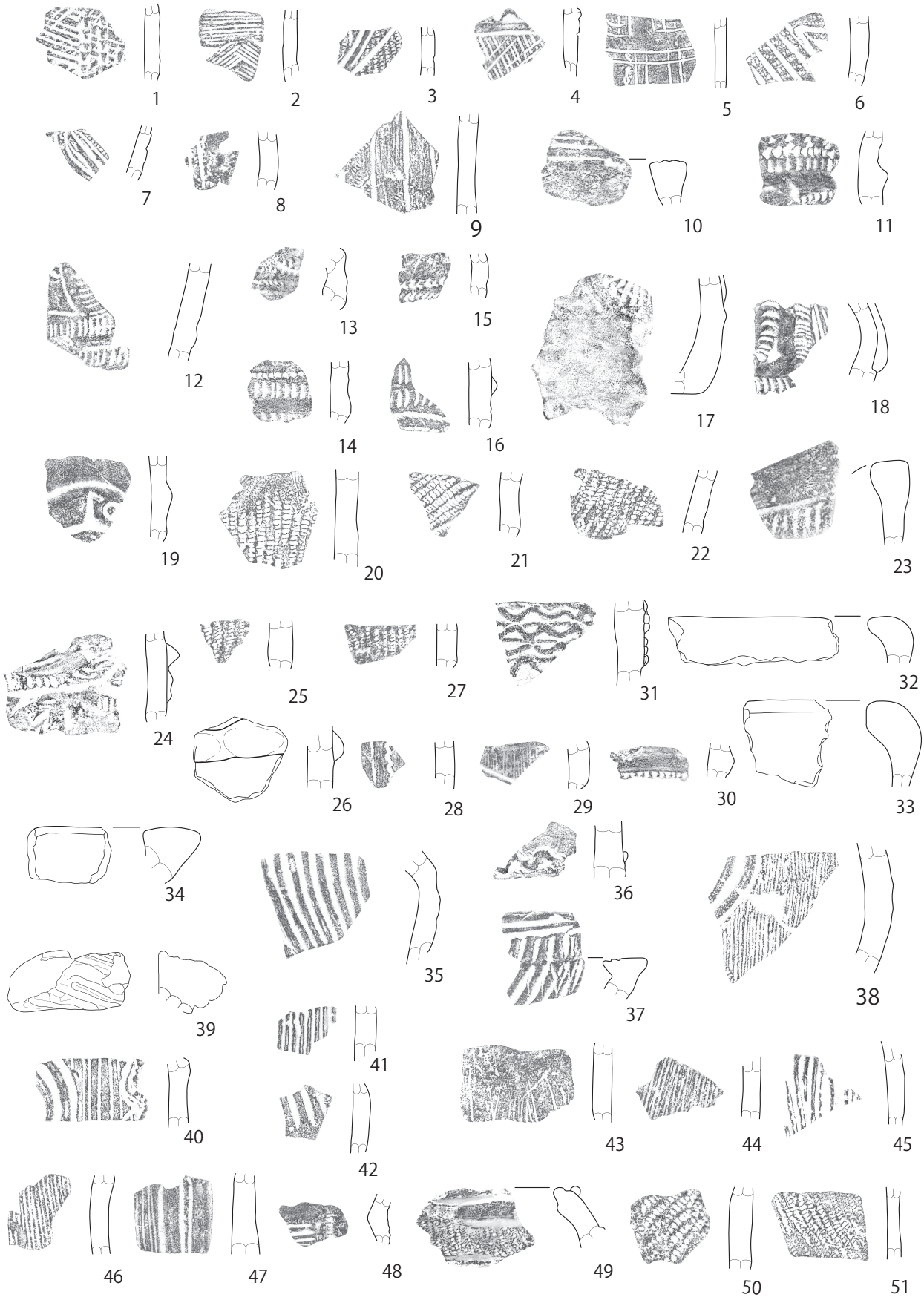
殿林遺跡（第20・21図1～39）

平成28年度表採（第20図1～30）五領ヶ台式土器１、２。１、２は五領ヶ台式の集合沈線文土器である。半裁竹管文による平行沈線が特徴である。勝坂式土器３～５。３、４は新道式土器である。ペン先状の工具で押した三角押文が特徴である。曽利式土器６～22。６～８は曽利Ⅰ～Ⅱ式の間に位置づけられる口縁部片である。６、７は無文の口縁部で内側に肥厚する。８は条線小甕の口縁部片である。９～15は曽利Ⅱ式の破片資料である。９～12は半裁竹管腹面によるナデが施された隆帯があり曽利Ⅱ式期の特徴である。13は、頸部に横位1段の波状隆帯が施文される14は、隆帯による波状の懸垂文が施文されている。15は曽利縄文系土器でLR単節斜縄文を施文する。16～19は曽利式期の口縁部片である。16は横位に隆帯を巡らせる。17～19は無文である。20は櫛歯状工具による条線を地文としており、曽利Ⅳ式と考えられる。21は指ナデによる沈線で渦を表現しており、曽利Ⅳ式と思われる。その他25～30。26は加曽利ＥⅢ式で口縁部渦巻文を、棒状工具による沈線で施文する。その上部は刺突文があり、胴部にはLR単節斜縄文が施文される。27は土製円盤である。土器の胴部を利用したものと考えられ、割れ口には擦った加工痕が認められる。

第5トレンチ（第21図31～34）平成26年度試掘調査時に出土したもので、出土量は少なく、7点出土したうち４点を図示した。すべて曽利式期に当たる。31は半裁竹管によるナデがされた隆帯と、横位の波状隆帯を持つ曽利Ⅱ式である。32はほとんどが破損しており、竹管文による縦位の条線のみが残存している。34は無文の口縁部片で、内側に肥厚しており曽利式土器と考えられる。

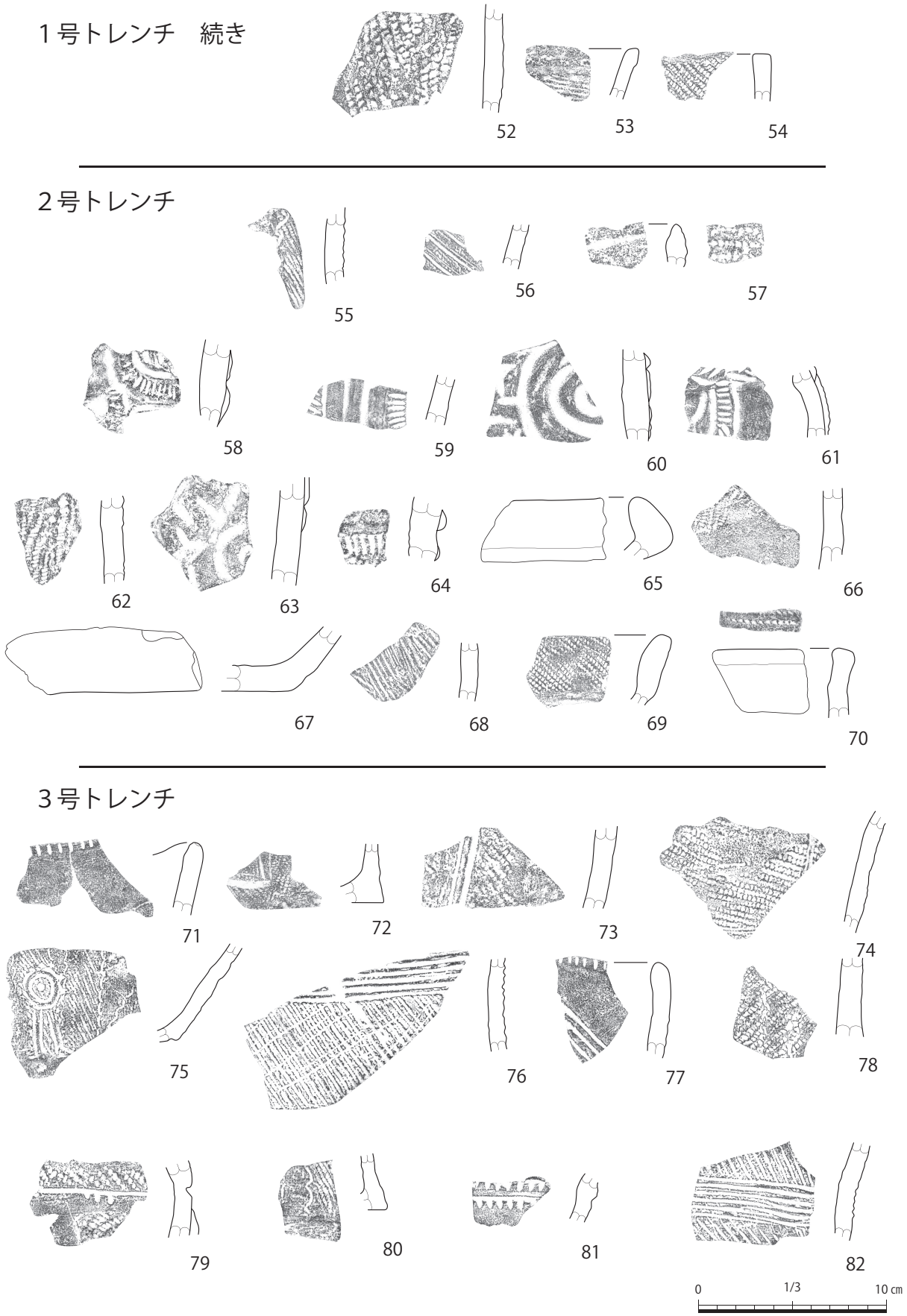
第11トレンチ（第21図35～38）第５トレンチと同様に平成26年度に調査された。36は沈線による文様が付けられている。37は胴部片で縄文と沈線で施文される。38は刻みをつけた隆帯を持ち、縄文を施文する曽利式期のものと考えられる。

住民表採（第21図39）井戸尻式２段階に多く認められる多喜窪類型土器の口縁部の突起である。この突起は４単位と考えられ、屈曲した口縁部から粘土紐を貼りつけ方形に立ち上がる。文様は沈線で施文され、半肉彫り的なモチーフとなる。



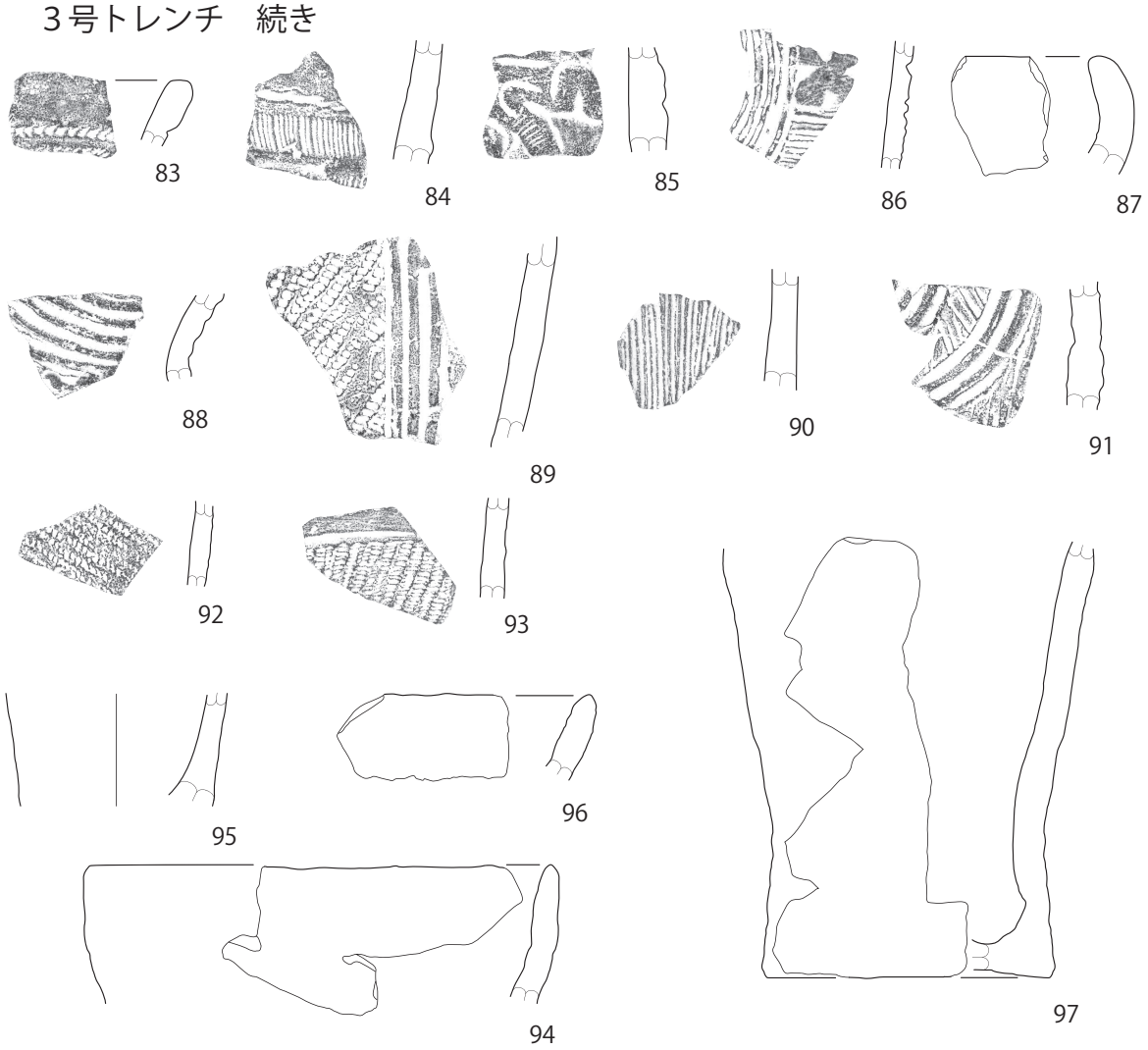
第７図　１号トレンチ出土遺物

0　1/3　10 cm

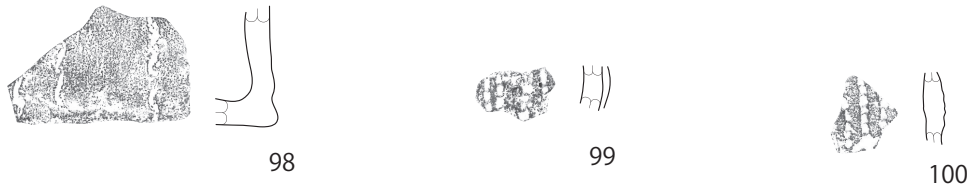


第8図　1・2・3号トレンチ出土遺物

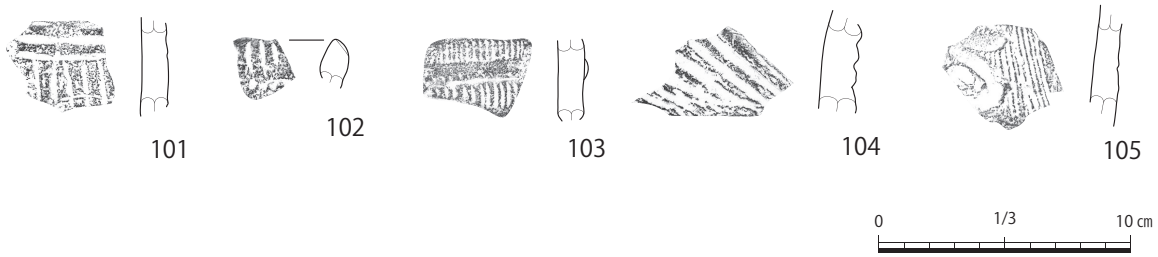
３号トレンチ　続き



４号トレンチ

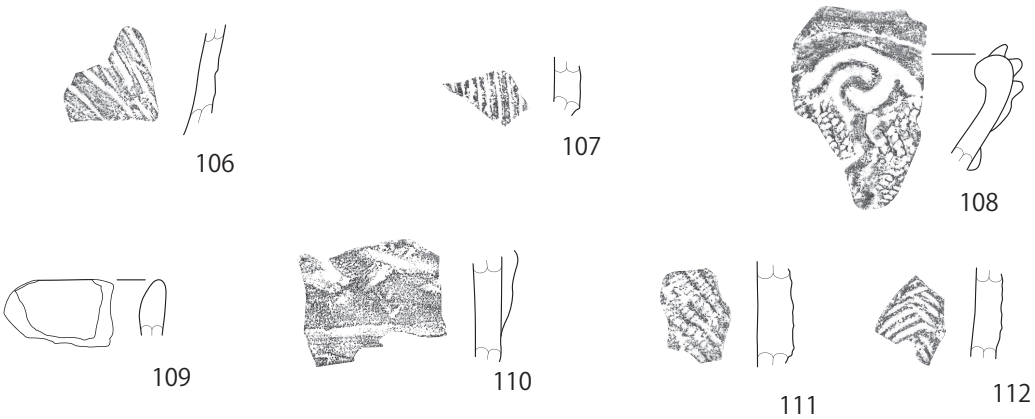


５号トレンチ

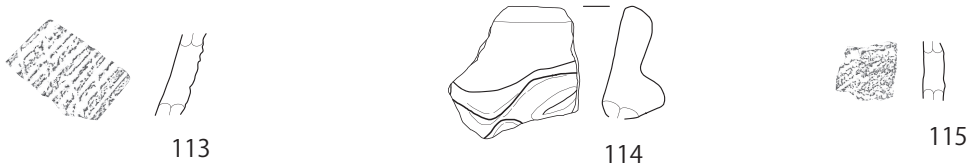


第9図　３・４・５号トレンチ出土遺物

５号トレンチ　続き

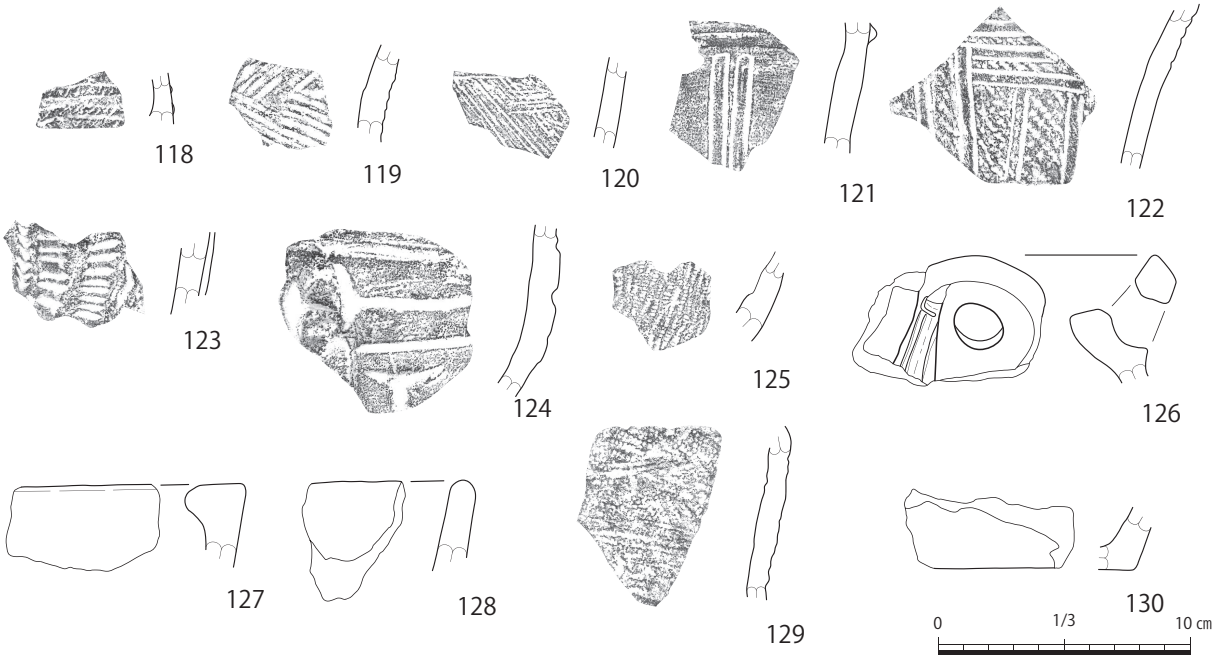


６号トレンチ



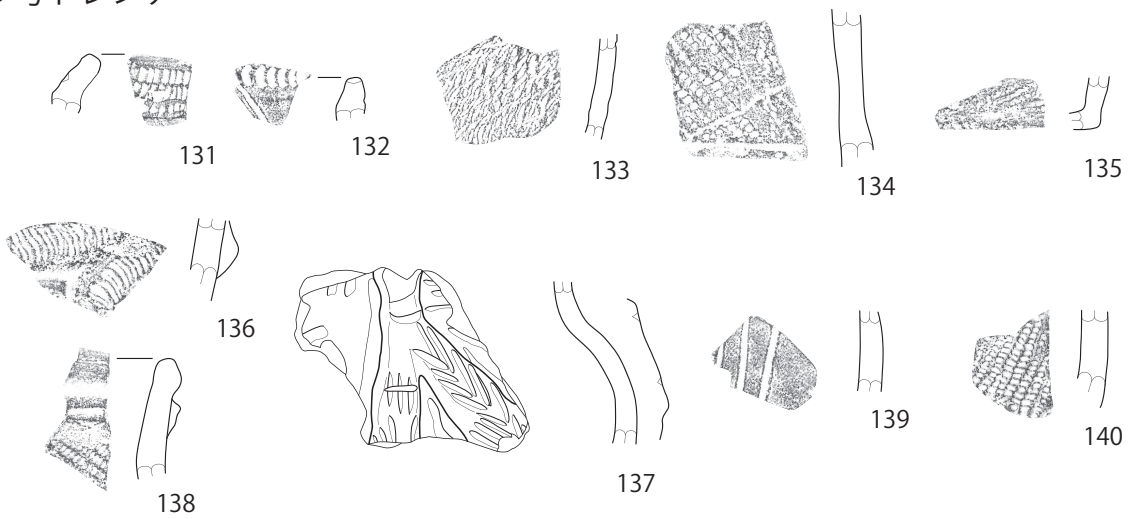
７号トレンチ

８号トレンチ

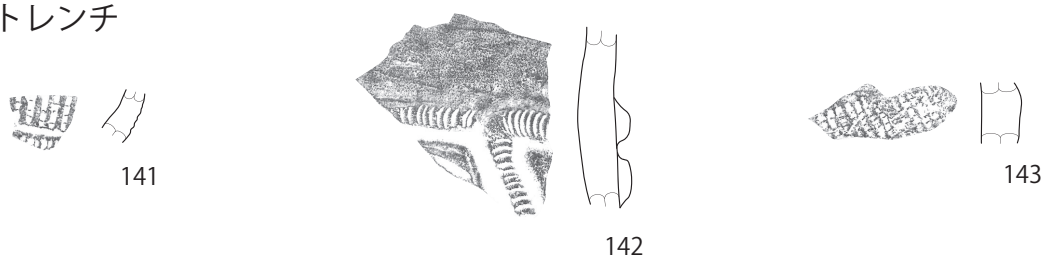


第 10 図　５・６・７・８号トレンチ出土遺物

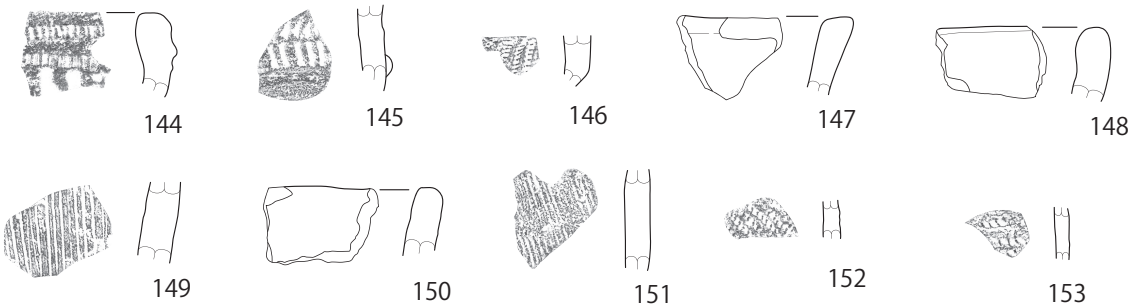
9号トレンチ



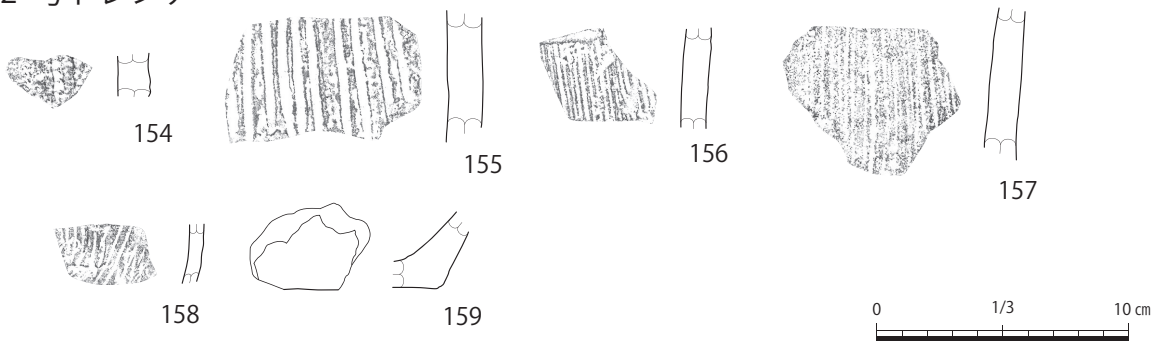
10 号トレンチ



11 号トレンチ

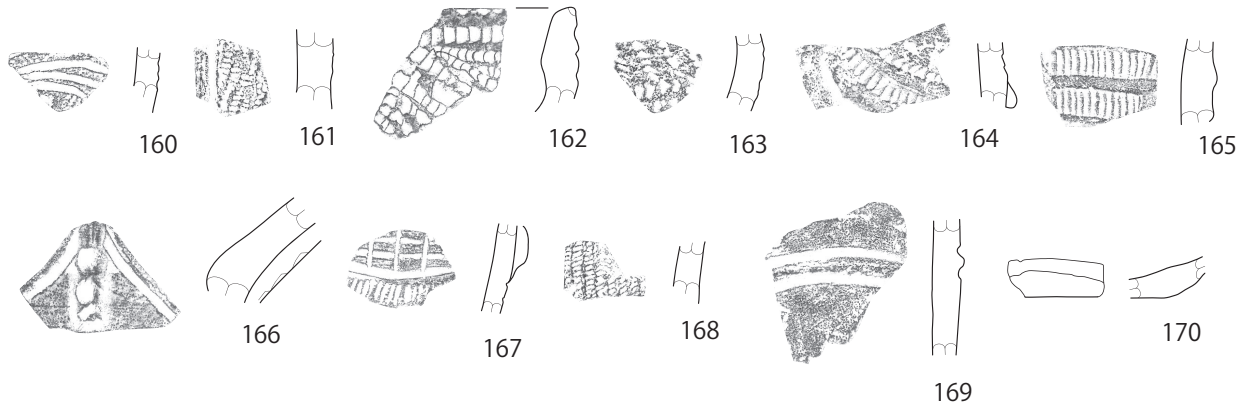


12 号トレンチ

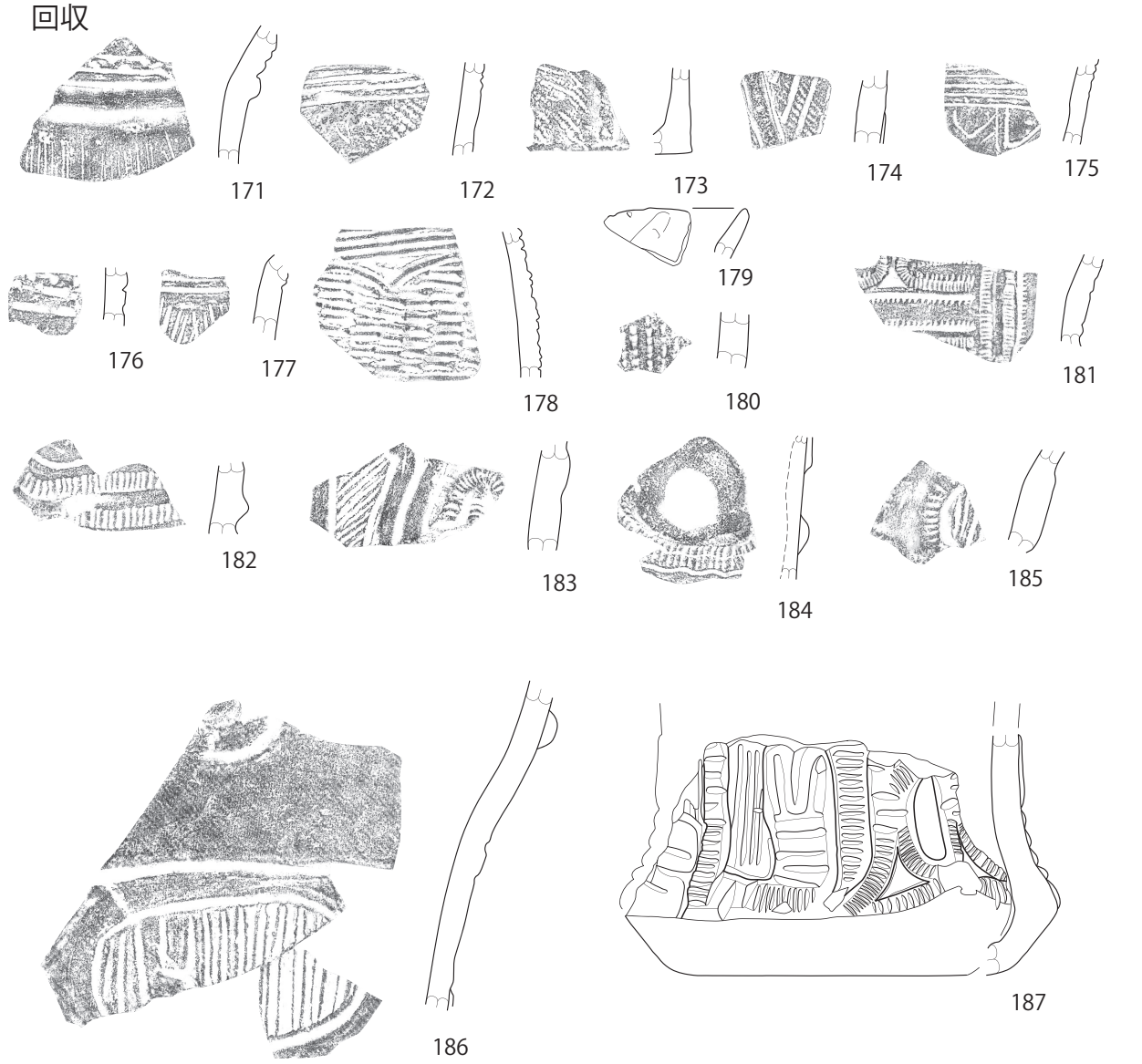


第 11 図　9・10・11・12 号トレンチ出土遺物

13 号トレンチ

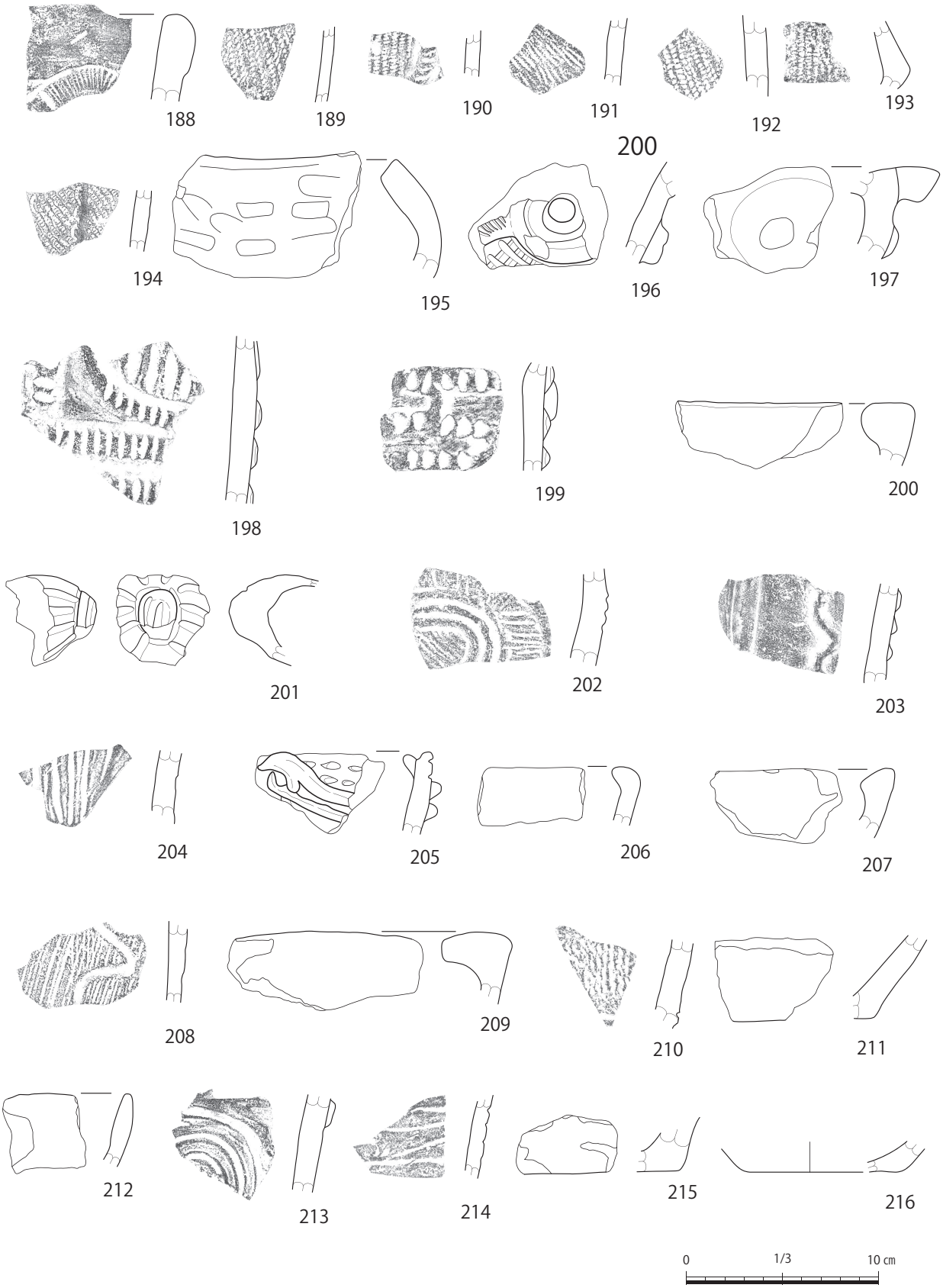


回収

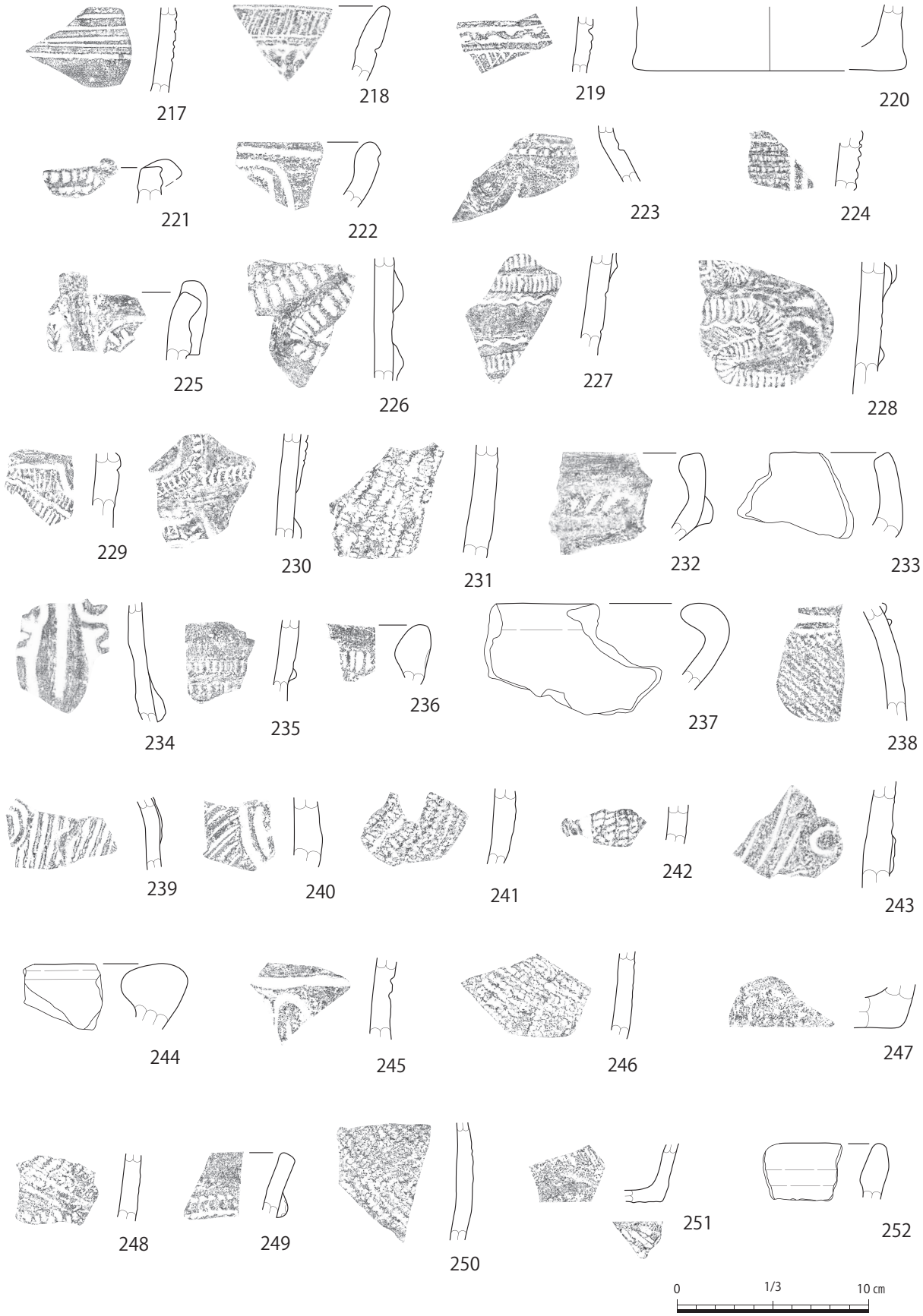


第 12 図　13 号トレンチ出土・回収遺物

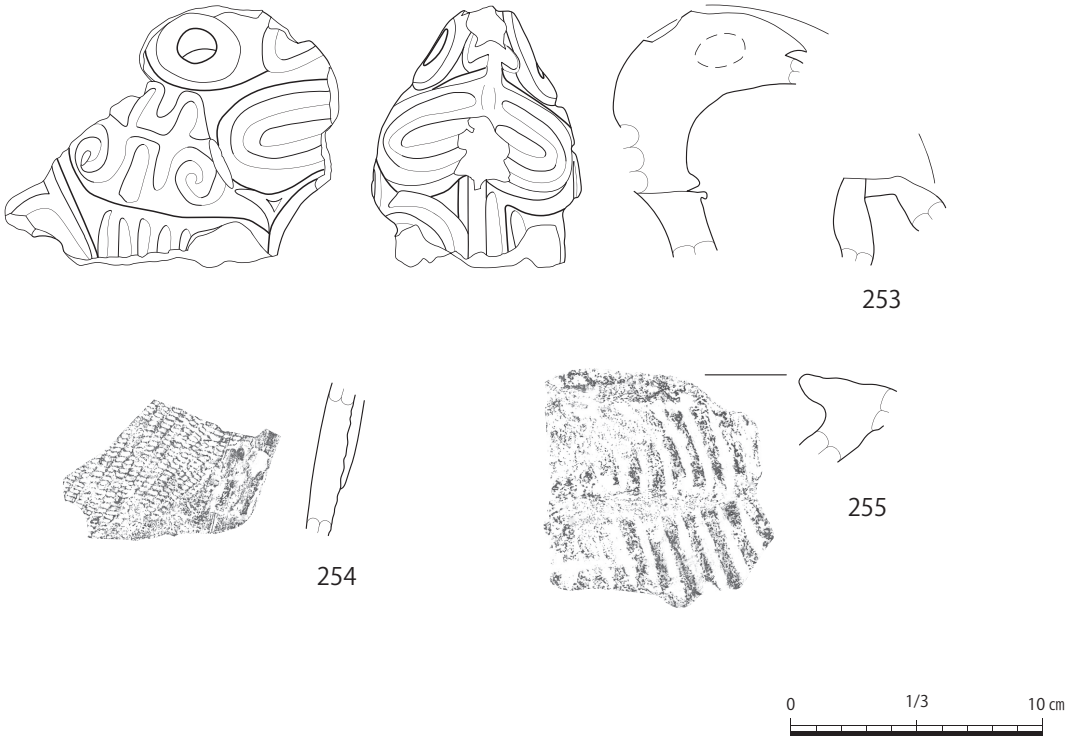
回収　続き



第 13 図　回収遺物

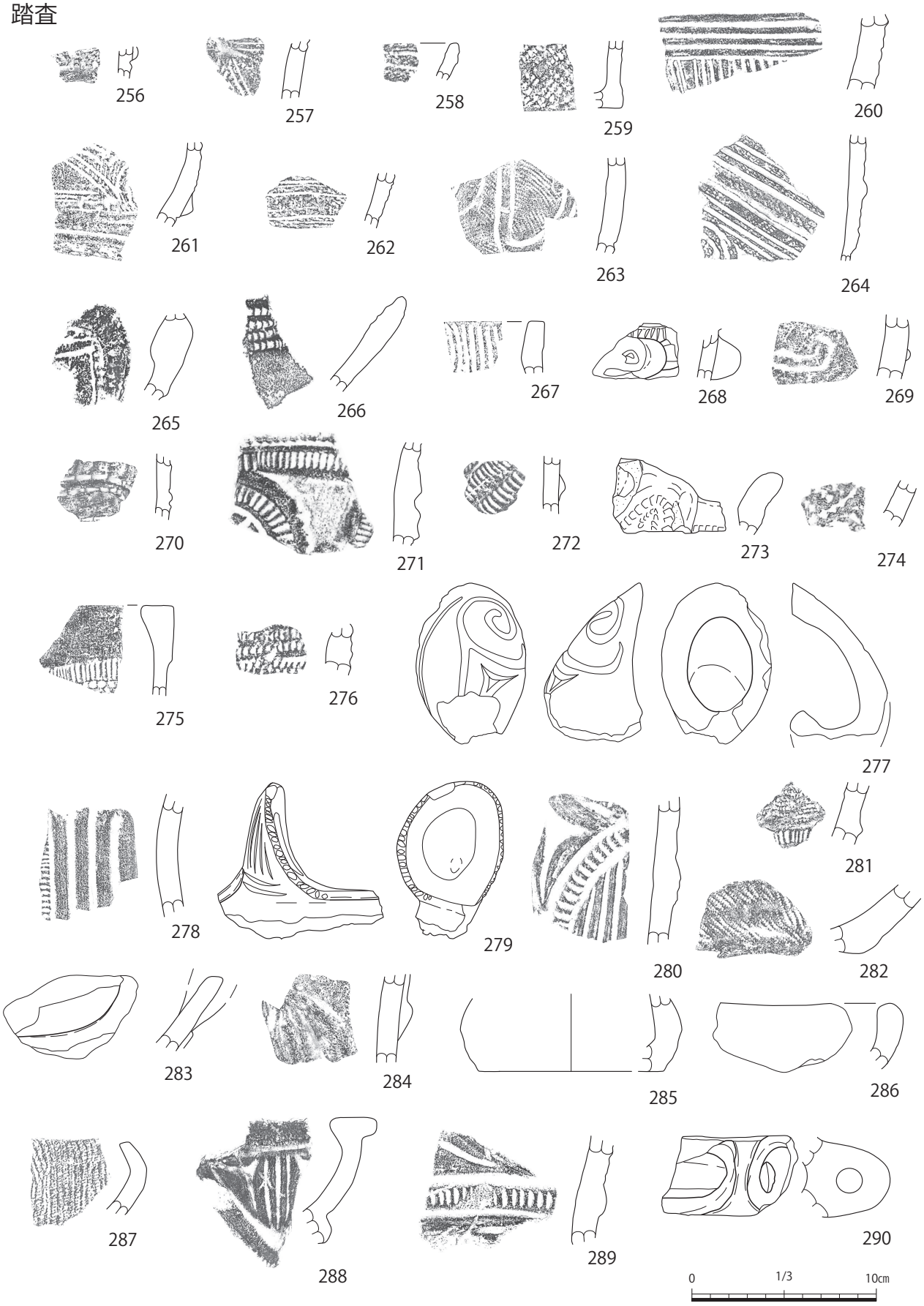

217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
0
1/3
10 cm

第 14 図　表採遺物



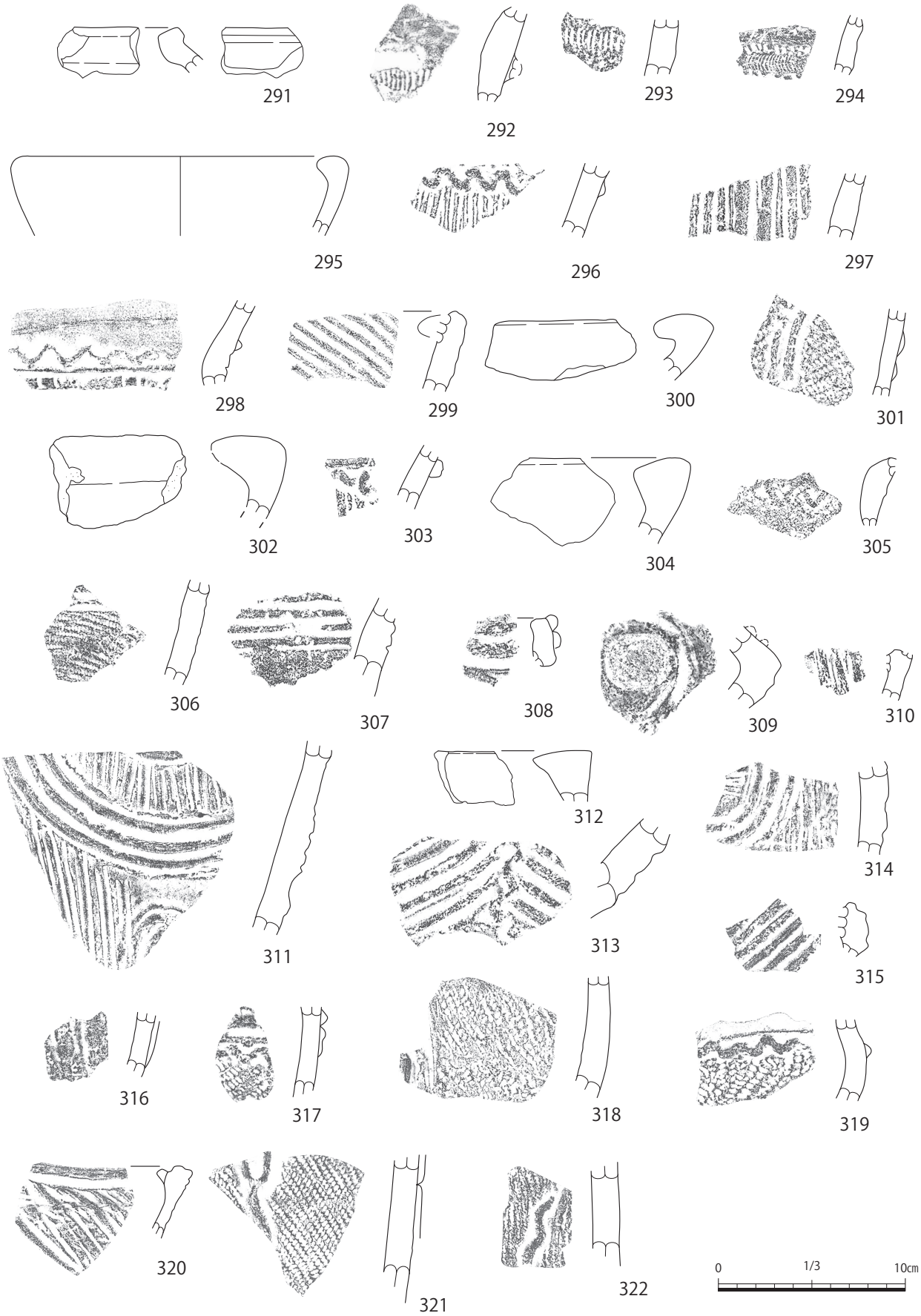
第 15 図　住民採集遺物

踏査



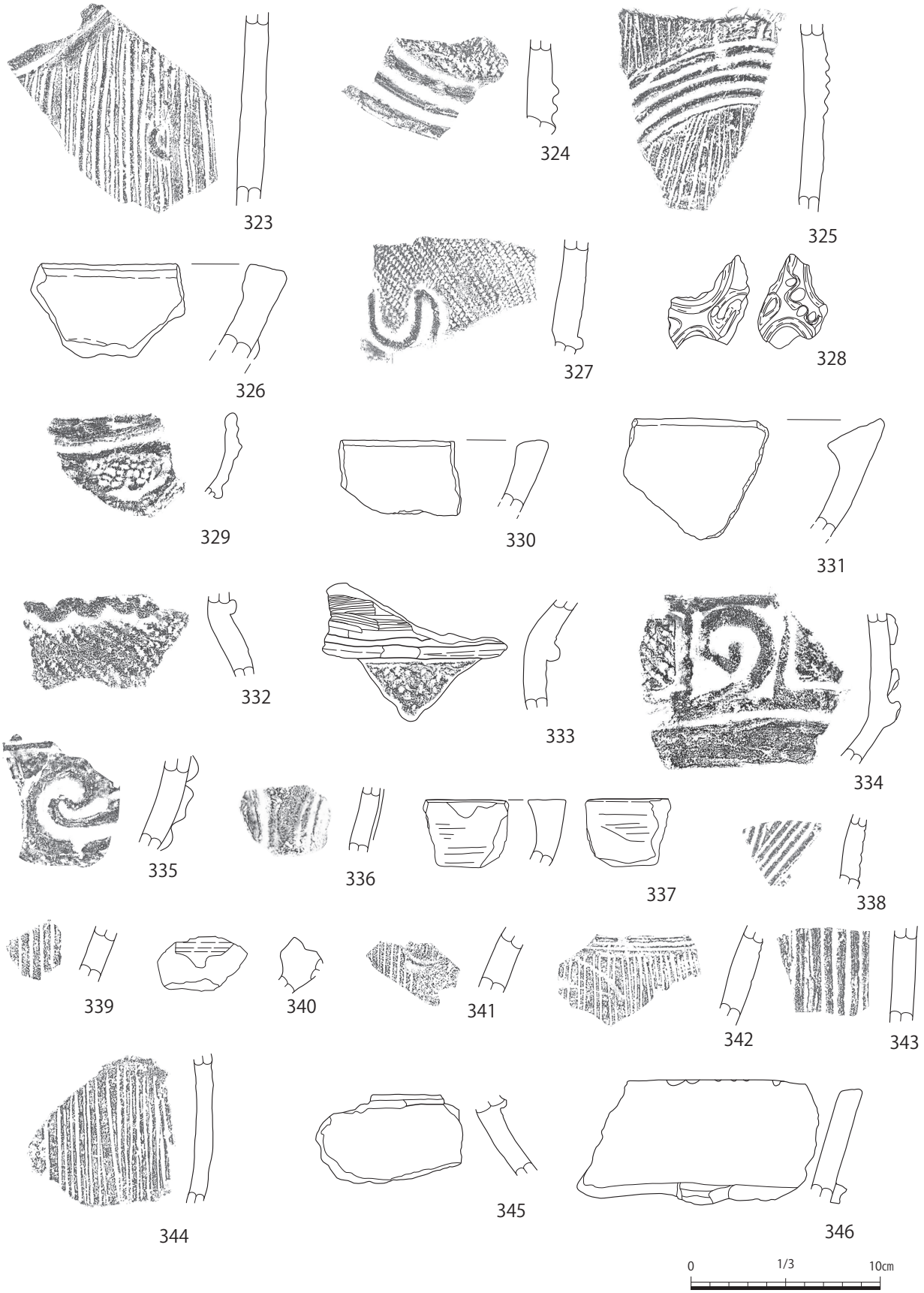
第 16 図　平成 27 年度踏査

踏査　続き



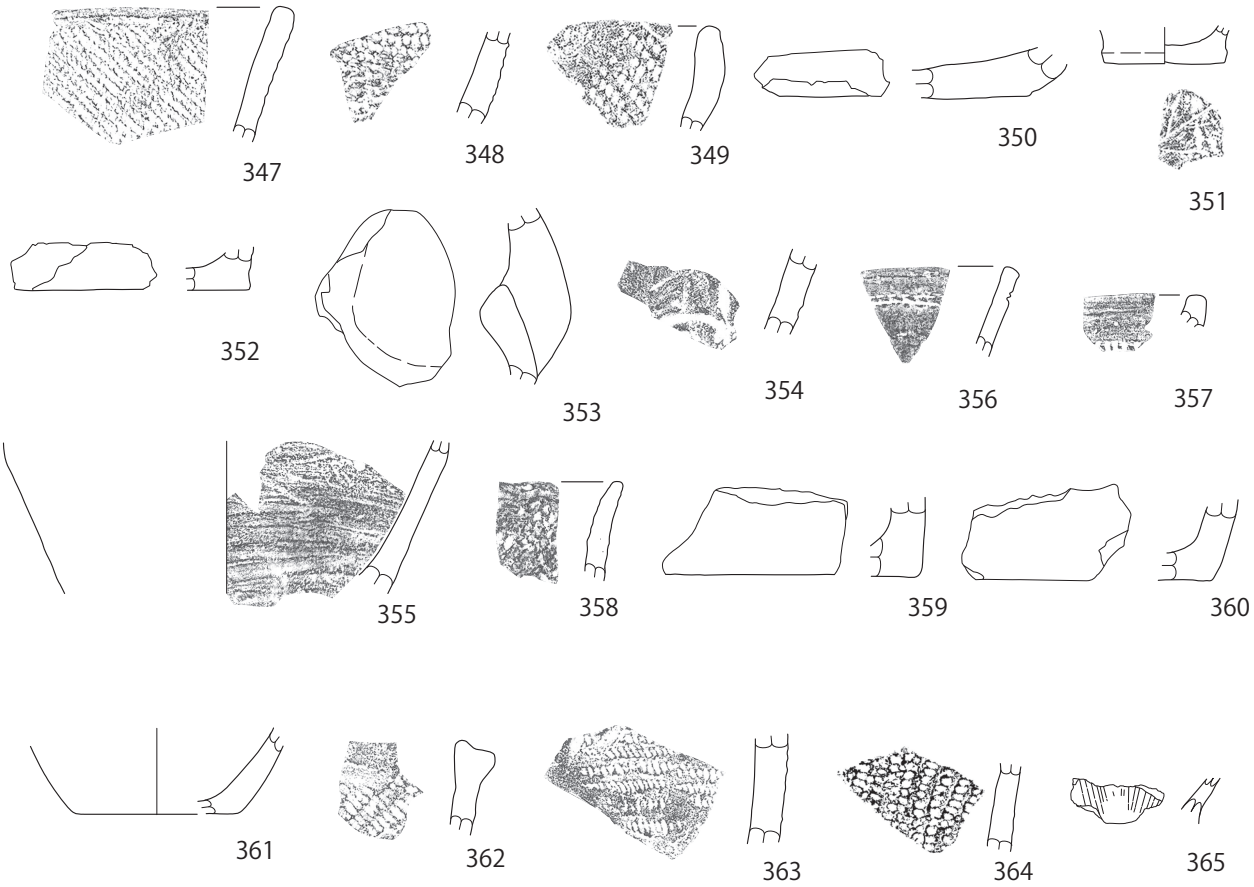
第 17 図　平成 27 年度踏査

踏査　続き



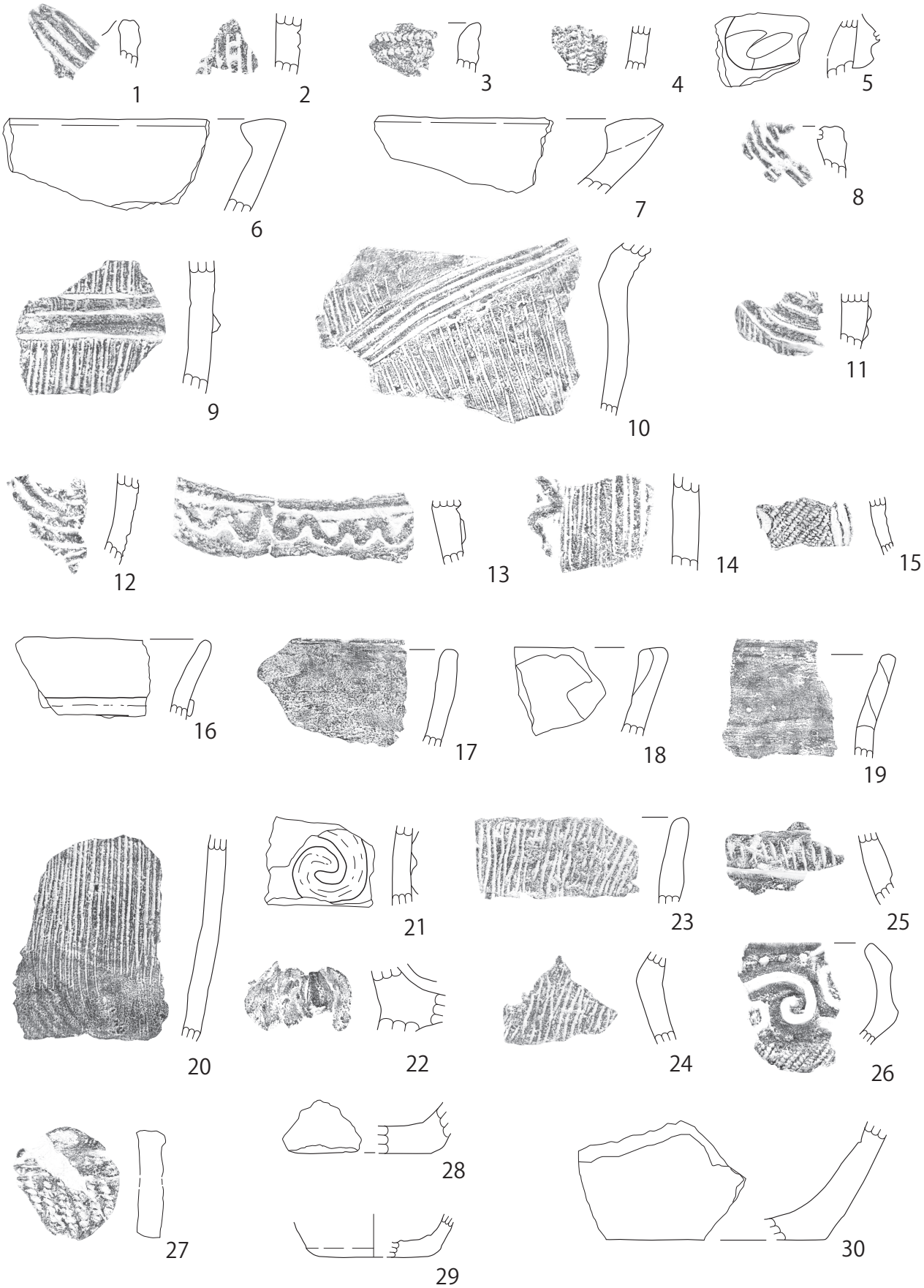
第 18 図　平成 27 年度踏査

踏査　続き



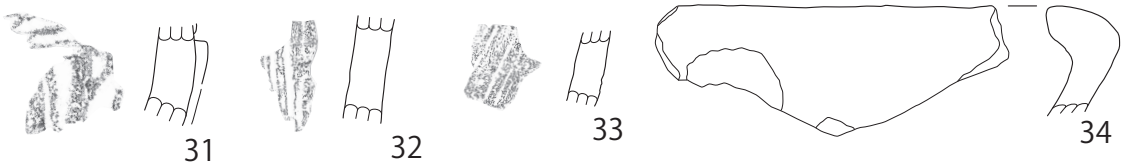
第 19 図　平成 27 年度踏査

殿林踏査



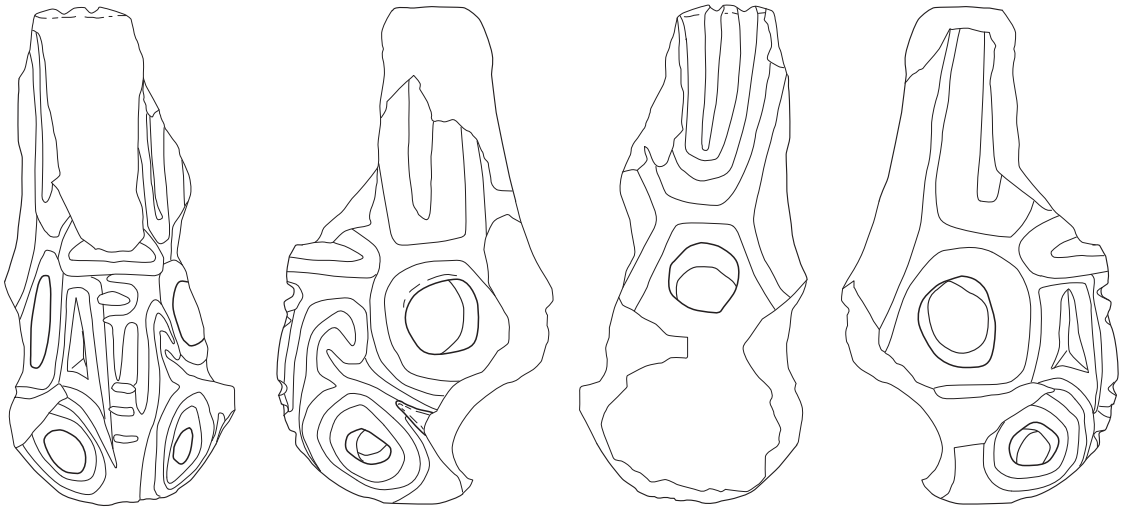
第 20 図　殿林遺跡踏査

5T 一括

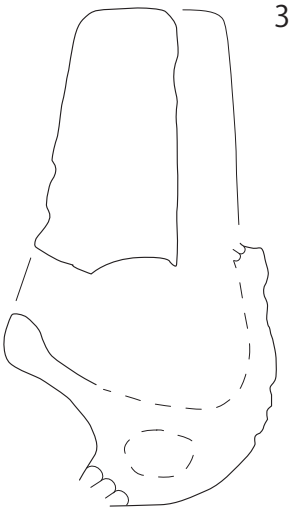


11T 一括

住民表採



39



第 21 図　5―11T 出土土器、住民採集土器

第1表　出土遺物一覧表

安道寺遺跡

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
1	深鉢		4.0		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗、金雲母	良好	諸磯c式
2	深鉢		3.9		7.5YR6/6橙	やや密	やや良好	十三菩提式
3	深鉢		2.5		7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良好	五領ヶ台式
4	深鉢		4.0		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	五領ヶ台式
5	深鉢		4.7		5YR4/4にぶい赤褐	密	良好	五領ヶ台式
6	深鉢		3.7		2.5YR4/4にぶい赤褐	やや粗、金雲母	良好	五領ヶ台式
7	深鉢		2.9		5YR6/4にぶい橙	密、金雲母	良好	五領ヶ台式
8	深鉢		2.7		2.5YR4/4にぶい赤褐			五領ヶ台式
9	深鉢		5.4		2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	加曽利E3式
10	深鉢		2.2		5YR5/6明赤褐	粗	やや不良	狢沢式
11	深鉢		4.0		5YR5/6明赤褐	密	良好	新道式2
12	深鉢		6.5		5YR5/6明赤褐	密	良好	新道式2
13	深鉢		3.4		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	新道式1
14	深鉢		3.4		7.5YR5/3にぶい褐	やや不良	やや良好	新道式
15	深鉢		2.6		2.5YR5/6明赤褐	やや密	良好	新道式1
16	深鉢		3.8		7.5YR4/3褐	やや密、金雲母	良好	新道式1
17	深鉢		6.4	(11.0)	5YR6/6橙	密	良好	新道式
18	深鉢		4.3		2.5YR5/6明赤褐	密	良好	藤内式
19	深鉢		4.7		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	井戸尻式
20	深鉢		5.2		5YR6/6橙	やや密	良好	井戸尻式
21	深鉢		3.4		5YR5/4にぶい赤褐			井戸尻式
22	深鉢		3.8		5YR5/6明赤褐			井戸尻式
23	深鉢		4.5		7.5YR6/6橙			井戸尻式
24	深鉢		4.9		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	井戸尻式
25	深鉢		2.6		7.5YR5/6明褐	やや粗	良好	井戸尻式
26	深鉢		4.4		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良好	井戸尻式3
27	深鉢		2.2		7.5YR4/2灰褐	やや粗	やや不良	井戸尻式
28	深鉢		2.5		2.5YR5/6明赤褐	やや密	良好	中期中
29	深鉢		2.5		5YR5/6明赤褐	密	良好	中期中
30	深鉢		1.9		5YR4/3にぶい赤褐	やや粗	良好	中期中
31	深鉢		4.7		7.5YR5/6明褐	やや密	良好	曽利Ⅰ式
32	深鉢		2.5		7.5YR6/6橙	やや密	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
33	深鉢		4.6		7.5YR5/6明褐			曽利Ⅰ～Ⅱ式
34	深鉢		3.0		7.5YR5/6明褐	粗	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
35	深鉢		6.0		7.5YR4/2灰褐	やや粗	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
36	深鉢		3.0		10YR6／6明黄褐	密	やや良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
37	深鉢		2.3		7.5YR6/6橙	密	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
38	深鉢		7.0		5YR5/6明赤褐	やや粗	やや良好	曽利Ⅱ式
39	深鉢		3.3		7.5YR7/6橙	粗	やや不良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
40	深鉢		3.7		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	やや不良	曽利Ⅲa式
41	深鉢		2.5		7.5YR6/6橙	密	良好	曽利式
42	深鉢		3.6		7.5YR5/6明褐	やや密	やや良好	曽利式
43	深鉢		4.1		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	曽利式
44	深鉢		3.3		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	曽利式
45	深鉢		4.2		7.5YR6/6橙	やや密	良好	曽利式
46	深鉢		4.2		10YR6/4にぶい黄橙	密	やや不良	曽利式
47	深鉢		4.2		7.5YR5/4にぶい褐	粗	やや良好	曽利式
48	深鉢		2.3		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良好	曽利式
49	深鉢		3.5		5YR5/6明赤褐	粗	やや良好	曽利式？
50	深鉢		4.3		7.5YR5/6明褐	密	不良	
51	深鉢		3.9		7.5YR6/6橙	密	良好	
52	深鉢		5.9		10YR6／6明黄褐	密	良好	
53	深鉢		2.9		10YR5/3にぶい黄褐			
54	深鉢		2.6		5YR5/6明赤褐	密	良好	
55	深鉢		3.7		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	五領ヶ台式
56	深鉢		2.4		2.5YR4/6赤褐	密	良好	五領ヶ台式
57	深鉢		2.3		2.5Y5/3黄褐	粗	やや不良	狢沢式
58	深鉢		4.1		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	藤内式
59	深鉢		2.8		2.5YR5/6明赤褐	やや密、金雲母	良好	藤内式
60	深鉢		4.7		10YR6/6明黄褐	密	やや良好	井戸尻式
61	深鉢		3.7		5YR4/6赤褐	密	良好	井戸尻式
62	深鉢		4.7		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	井戸尻式
63	深鉢		5.8		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	やや良好	井戸尻式3
64	深鉢		3.4		5YR5/6明赤褐	粗	良好	勝坂式
65	深鉢		3.3		7.5YR6/6橙	やや粗	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
66	深鉢		3.9		7.5YR5/6明褐	密	良好	曽利Ⅱ式
67	深鉢		3.5		5YR6/6橙	やや粗、金雲母	良好	曽利式

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
68	深鉢		3.1		7.5YR6/4にぶい橙	密	良好	曽利式
69	深鉢		4.5		7.5YR5/7明褐	やや粗	良好	
70	深鉢		3.8		2.5Y6/2灰黄			
71	深鉢		3.9		7.5YR3/2黒褐	粗、金雲母	良好	五領ヶ台式
72	深鉢		3.2		5YR5/6明赤褐	粗	良好	五領ヶ台式
73	深鉢		4.6		7.5YR3/3暗褐	やや粗	良好	五領ヶ台式
74	深鉢		6.2		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良好	五領ヶ台式
75	深鉢		5.2		5YR4/4にぶい赤褐	やや密、金雲母	良好	五領ヶ台式
76	深鉢		7.7		5YR4/3にぶい赤褐	密	良好	五領ヶ台式
77	深鉢		5.1		5YR5/4にぶい赤褐	やや密、金雲母	良好	五領ヶ台式
78	深鉢		3.9		2.5YR5/6明赤褐	粗	良好	五領ヶ台式
79	深鉢		4.0		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良好	五領ヶ台式
80	深鉢		3.0	(8.0)	7.5YR5/6明褐	やや密	良好	五領ヶ台式
81	深鉢		2.6		7.5YR5/6明褐	密	良好	五領ヶ台式
82	深鉢		5.2		7.5YR4/6褐	密	良好	五領ヶ台式
83	深鉢		2.7		10YR6/6明黄褐	やや密、金雲母	良好	新道式1
84	深鉢		5.1		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	藤内式
85	深鉢		4.3		7.5YR6/6橙	粗	やや良好	井戸尻式
86	深鉢		4.9		2.5YR4/8赤褐	密、金雲母	良好	
87	深鉢		4.7		7.5YR5/3にぶい褐			曽利Ⅰ～Ⅱ式
88	深鉢		4.3		5YR4/6赤褐	やや密	良好	曽利Ⅱ式
89	深鉢		8.6		7.5YR5/4にぶい褐		良好	曽利式
90	深鉢		4.9		7.5YR6/6橙	密	良好	曽利式
91	深鉢		5.4		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良好	唐草文3古段階
92	深鉢		3.9		7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良好	
93	深鉢		4.0		5YR5/6明赤褐	密	良好	
94	深鉢	(18.5)	5.6		7.5YR4/4褐	粗、金雲母	やや良好	
95	深鉢		4.6	(8.0)	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗、金雲母	やや良好	
96	深鉢		3.4		7.5YR3/2黒褐			
97	深鉢		17.7	(12.0)	7.5YR5/8明褐			
98	深鉢		4.8		7.5YR5/6明褐	密	良好	五領ヶ台式
99	深鉢		2.3		2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	狢沢式
100	深鉢		3.1		2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	新道式1
101	深鉢		3.6		7.5YR5/6明褐	やや粗	良好	五領ヶ台式
102	深鉢		2.0		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	五領ヶ台式
103	深鉢		3.0		5YR4/3にぶい赤褐	密	良好	狢沢式～藤内式
104	深鉢		3.8		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗、金雲母	良好	曽利式
105	深鉢		4.7		7.5YR4/3褐	やや粗、金雲母	良好	曽利式
106	深鉢		4.7		7.5YR6/6橙	やや密	良好	曽利式
107	深鉢		2.2		5YR6/6橙	粗	良好	曽利式
108	深鉢		4.8		10YR6/4にぶい黄橙	密	良好	曽利Ⅱ式
109	深鉢		2.5		2.5YR5/6明赤褐	やや密	良好	
110	深鉢		4.5		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良好	
111	深鉢		4.4		5YR6/6橙			
112	深鉢		3.6		7.5YR6/6橙	やや密	やや良好	
113	深鉢		5.2		5YR5/6明赤褐	密	良好	五領ヶ台式
114	深鉢		4.2		5YR5/6明赤褐	粗	良好	井戸尻式3
115	深鉢		2.3		5YR4/6赤褐	密	良好	
116	深鉢		3.7		7.5YR5/6明褐	やや密	良好	五領ヶ台式
117	深鉢		4.2		7.5YR5/6明褐	やや密、金雲母	良好	曽利Ⅱ式
118	深鉢		2.0		5YR5/4にぶい赤褐			諸磯b式
119	深鉢		3.6		5YR4/6赤褐	粗	良好	十三菩提式
120	深鉢		3.0		7.5YR5/6明褐	やや粗	良好	十三菩提式
121	深鉢		5.0		7.5YR4/4褐	密	良好	五領ヶ台式
122	深鉢		7.0		7.5YR4/4褐	やや密	良好	五領ヶ台式
123	深鉢		3.8		10YR4/4褐	やや粗、金雲母	良好	新道式1
124	深鉢		7.0		10YR6/4にぶい黄橙	密	良好	井戸尻式
125	深鉢		3.7		7.5YR5/6明褐	密	良好	井戸尻式
126	深鉢		5.1		7.5YR5/4にぶい褐			井戸尻式
127	深鉢		3.4		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	曽利式
128	深鉢		4.5		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	曽利式？
129	深鉢		6.8		7.5YR5/6明褐	やや密	良好	五領ヶ台式
130	深鉢		2.5		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	不明
131	浅鉢		2.4		2.5YR4/6赤褐	やや粗	良好	五領ヶ台式
132	深鉢		1.7		5YR4/6赤褐	密	良好	五領ヶ台式
133	深鉢		4.2		7.5YR5/6明褐	やや粗	良好	五領ヶ台式？
134	深鉢		5.5		7.5YR5/6明褐	粗、金雲母	良好	五領ヶ台式
135	深鉢		2.2		5YR4/4にぶい赤褐	やや粗	良好	五領ヶ台式
136	深鉢		3.3		5YR4/4にぶい赤褐	粗、金雲母	良好	新道式
137	深鉢		6.7		5YR5/4にぶい赤褐	粗	良好	井戸尻式

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
138	深鉢		4.6		5YR4/6赤褐	やや粗	やや良好	曽利式
139	深鉢		3.0		7.5YR3/3暗褐	やや粗	良好	
140	深鉢		3.9		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	
141	深鉢		2.1		5YR4/3にぶい赤褐	やや粗	良好	狢沢式
142	深鉢		6.8		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良好	藤内式
143	深鉢		2.3		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	井戸尻式
144	深鉢		3.2		10YR5/6黄褐			狢沢式
145	深鉢		3.6		2.5YR5/6明赤褐			新道式2
146	深鉢		2.0		7.5YR5/6明褐			井戸尻式
147	深鉢		3.2		10YR3/3暗褐			井戸尻式
148	深鉢		2.8		5YR5/6明赤褐			曽利式
149	深鉢		3.3		5YR6/6橙			曽利式
150	深鉢		3.0		7.5YR6/6橙			曽利式？
151	深鉢		4.1		7.5YR6/6橙			
152	深鉢		1.6		5YR3/3暗赤褐			
153	深鉢		2.0		5YR4/4にぶい赤褐			
154	深鉢		2.1		7.5YR4/6褐	やや密	良好	井戸尻式
155	深鉢		4.6		7.5YR5/6明褐	やや粗	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
156	深鉢		4.0		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	曽利式
157	深鉢		6.1		7.5YR5/6明褐	粗	良好	曽利式
158	深鉢		2.5		7.5YR4/6褐	密	良好	
159	深鉢		3.1		5YR4/6赤褐	粗	良好	
160	深鉢		2.7		5YR4/6赤褐	粗	良好	五領ヶ台式
161	深鉢		3.1		7.5YR5/6明褐	やや密	良好	五領ヶ台式
162	深鉢		4.7		2.5YR5/6明赤褐	やや密	良好	新道式1
163	深鉢		3.1		10YR6/6明黄褐	やや粗	良好	新道式1
164	深鉢		2.7		7.5YR6/6橙	やや粗	良好	新道式1
165	深鉢		3.3		10YR6/6明黄褐	やや粗	良好	新道式
166	深鉢		4.3		2.5YR6/8橙	粗	良好	井戸尻式
167	深鉢		3.6		10YR6/6明黄褐	やや粗	良好	井戸尻式
168	深鉢		2.4		7.5YR6/6橙	やや粗、金雲母	良好	井戸尻式
169	深鉢		5.3		2.5YR5/6明赤褐	粗	良好	曽利Ⅲ式
170	深鉢		1.7		5YR5/6明赤褐	密	良好	
171	深鉢		6.2		5YR4/4にぶい赤褐	やや粗、金雲母	良好	五領ヶ台式
172	深鉢		4.3		5YR3/2暗赤褐	密、金雲母	良好	五領ヶ台式
173	深鉢		4.0		5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	五領ヶ台式
174	深鉢		3.5		7.5YR5/6明褐	粗	良好	五領ヶ台式
175	深鉢		4.4		2.5YR4/4にぶい赤褐	粗	良好	五領ヶ台式
176	深鉢		2.4		7.5YR5/3にぶい褐	やや粗、金雲母	良好	五領ヶ台式
177	深鉢		3.8		5YR5/6明赤褐			五領ヶ台式
178	深鉢		6.9		7.5YR5/6明褐	密、金雲母	良好	五領ヶ台式
179	深鉢		2.2		7.5YR5/4にぶい褐	密	良好	五領ヶ台式
180	深鉢		2.8		5YR5/6明赤褐	密	良好	狢沢式
181	深鉢		4.5		7.5YR4/3褐	密	良好	新道式1
182	深鉢		3.4		7.5YR6/6橙	やや粗	良好	新道式1
183	深鉢		5.2		7.5YR5/6明褐	粗	良好	藤内式
184	深鉢		6.4		5YR5/4にぶい赤褐	粗	良好	藤内式
185	深鉢		4.8		5YR5/6明赤褐	やや粗、金雲母	良好	藤内式
186	深鉢		16.4		5YR4/6赤褐	密	良好	藤内式～井戸尻式
187	深鉢		10.3	(18.0)	2.5YR5/4にぶい赤褐			井戸尻式1
188	深鉢		4.7		7.5YR5/3にぶい褐	やや粗	やや不良	勝坂式
189	深鉢		4.1		10YR6/4にぶい黄橙	密	やや良好	井戸尻式
190	深鉢		2.4		7.5YR6/4にぶい橙			井戸尻式
191	深鉢		3.7		5YR4/4にぶい赤褐			井戸尻式
192	深鉢		4.7		7.5YR6/6橙	やや密	良好	井戸尻式
193	深鉢		3.7		5YR5/6明赤褐	やや粗、金雲母	良好	井戸尻式
194	深鉢		3.5		7.5YR4/3褐	やや密	良好	井戸尻式
195	深鉢		6.2		10YR5/4にぶい黄褐			井戸尻式
196	深鉢		5.8		10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良好	井戸尻式
197	深鉢		5.6		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良好	井戸尻式
198	深鉢		8.6		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良好	井戸尻式3～曽利Ⅰ式
199	深鉢		5.8		7.5YR6/6橙	やや密	良好	井戸尻式3
200	深鉢	(29.0)	3.2		7.5YR6/4にぶい橙			井戸尻式
201	深鉢		4.7		7.5YR6/4にぶい橙			勝坂式
202	深鉢		5.1		7.5YR6/6橙	粗	良好	曽利Ⅱ式
203	深鉢		5.8		2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良好	曽利Ⅱ式
204	深鉢		4.0		2.5YR5/6明赤褐	やや粗、金雲母	良好	曽利Ⅱ式
205	深鉢		4.0		7.5YR5/4にぶい褐	粗	良好	曽利Ⅱ式
206	深鉢		2.9		5YR5/6明赤褐	やや密	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式
207	深鉢		3.8		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良好	曽利Ⅰ～Ⅱ式

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
208	深鉢		4.7		5YR4/3にぶい赤褐	粗、金雲母	良好	曽利Ⅲ式
209	深鉢	(29.0)	3.8		7.5YR6/4にぶい橙			曽利式
210	深鉢		4.7		7.5YR6/4にぶい橙	粗	良好	曽利式
211	深鉢		4.6		5YR5/6明赤褐	やや密、金雲母	良好	曽利式
212	深鉢		3.8		5YR4/6赤褐	やや粗	やや良好	曽利式
213	深鉢		5.3		2.5YR5/6明赤褐	密	良好	
214	深鉢		4.5		7.5YR6/6橙	密	良好	
215	深鉢		2.8		5YR5/6明赤褐	粗	良好	
216	深鉢		1.6	(9.6)	10YR6/4にぶい黄橙	密	良好	
217	深鉢		4.4		5YR4/4にぶい赤褐			五領ヶ台式
218	深鉢		3.7		7.5YR6/6橙			五領ヶ台式
219	深鉢		2.9		7.5YR5/4にぶい褐			五領ヶ台式
220	深鉢		3.5	(14.0)	5YR5/6明赤褐			五領ヶ台式
221	深鉢		2.1		10YR4/3にぶい黄褐			狢沢式
222	深鉢		3.5		5YR4/3にぶい赤褐			狢沢式
223	深鉢		2.9		2.5YR5/6明赤褐			狢沢式
224	深鉢		3.2		7.5YR4/4褐			狢沢式
225	深鉢		4.5		2.5YR5/6明赤褐			狢沢式～新道式
226	深鉢		6.6		10YR6/6明黄褐			新道式
227	深鉢		5.3		7.5YR5/6明褐			藤内式
228	深鉢		6.8		7.5YR5/6明褐			藤内式
229	深鉢		3.9		7.5YR5/6明褐			藤内式
230	深鉢		5.6		5YR4/6赤褐			藤内式～井戸尻式
231	深鉢		5.9		7.5YR6/6橙			井戸尻式
232	深鉢		4.2		7.5YR5/6明褐			井戸尻式
233	深鉢		3.9		5YR6/6橙			井戸尻式
234	深鉢		5.9		5YR6/6橙			井戸尻式3
235	深鉢		4.3		7.5YR5/6明褐			勝坂式
236	深鉢		3.1		5YR4/4にぶい赤褐			勝坂式
237	深鉢	(26.0)	5.8		5YR5/6明赤褐			曽利Ⅰ式
238	深鉢		6.2		7.5YR6/6橙			曽利Ⅱ式
239	深鉢		3.7		5YR5/6明赤褐			曽利Ⅱ式
240	深鉢		3.7		7.5YR6/6橙			曽利Ⅲ式
241	深鉢		3.9		5YR6/6橙			曽利式
242	深鉢		2.1		10YR5/4にぶい黄褐			曽利式
243	深鉢		5.1		10YR5/6黄褐			曽利式
244	深鉢		3.3		7.5YR5/4にぶい褐			曽利式
245	深鉢		4.4		5YR5/6明赤褐			
246	深鉢		4.2		5YR4/6赤褐			
247	深鉢		2.3	(13.0)	7.5YR5/6明褐			
248	深鉢		3.4		7.5YR5/6明褐			
249	深鉢		3.3		5YR5/6明赤褐			
250	深鉢		6.1		10YR4/3にぶい黄褐			
251	深鉢		3.1		5YR6/6橙			
252	深鉢		2.9		7.5YR7/6橙			
253	深鉢		9.6		10YR6/6名黄褐			井戸尻式
254	深鉢		6.05		10YR5/6黄褐	白色粒子、黒雲母、金雲母	良好	曽利Ⅱ式
255	深鉢		3.5		7.5YR5/6明褐	白色・赤色粒子、石英、雲母	良好	曽利Ⅱ式
256	深鉢		1.9		5YR4/6赤褐	やや粗	良	五領ヶ台式
257	深鉢		3.2		7.5YR4/2灰褐	やや粗	良	五領ヶ台式
258	深鉢		2.1		2.5YR5/6明赤褐	密	良	五領ヶ台式
259	深鉢		3.7	(10.0)	5YR5/4にぶい赤褐	密	良	五領ヶ台式
260	深鉢		5.0		7.5YR6/4にぶい橙	密	良	五領ヶ台式
261	深鉢		4.8		10YR4/4褐	やや密	良	五領ヶ台式
262	深鉢		2.9		7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良	五領ヶ台式
263	深鉢		5.7		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	五領ヶ台式
264	深鉢		5.0		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	五領ヶ台式
265	深鉢		5.3		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	五領ヶ台式
266	浅鉢		5.2		2.5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	五領ヶ台式
267	深鉢	(19.0)	2.9		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	狢沢式
268	深鉢		3.0		10YR6/4にぶい黄橙	密	良	狢沢式
269	深鉢		3.7		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	狢沢式
270	深鉢		3.7		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良	狢沢式
271	深鉢		6.8		2.5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	狢沢式
272	深鉢		3.25		7.5YR4/6褐	やや粗	良	新道式1
273	深鉢		4.2		2.5YR4/4にぶい赤褐	やや密	良	新道式1
274	深鉢		2.9		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	新道式2
275	深鉢		4.8		7.5YR4/4褐	やや粗	良	新道式2
276	深鉢		2.9		7.5YR3/4暗褐	やや粗	良	新道式2
277	深鉢		8.8		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	藤内式

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
278	深鉢		7.7		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	藤内式～井戸尻式
279	深鉢		8.5		5YR6/3にぶい橙	やや密	良	藤内式
280	深鉢		8.3		7.5YR5/6明褐	粗	良	井戸尻式
281	深鉢		3.8		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	井戸尻式
282	深鉢		3.6		7.5YR5/6明褐	やや密	良	井戸尻式
283	深鉢		4.1		10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良	井戸尻式3
284	深鉢		5.0		7.5YR6/6橙	やや密	良	井戸尻式
285	深鉢		4.5	(10.0)	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	井戸尻式1
286	深鉢	(26.0)	3.6		7.5YR5/4にぶい褐	やや密	良	井戸尻式
287	深鉢	(11.0)	4.0		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良	井戸尻式
288	深鉢	(25.4)	6.8		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	井戸尻式3
289	深鉢		5.9		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	井戸尻式
290	深鉢		4.3		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	井戸尻式
291	有効鍔付？		2.7		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	勝坂式
292	深鉢		5.2		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	勝坂式
293	深鉢		3.7		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	勝坂式
294	深鉢		3.3		7.5YR6/6橙	やや密	良	勝坂式
295	深鉢	(16.8)	4.2		5YR6/6橙	やや密	良	井戸尻式
296	深鉢		4.0		7.5YR4/6褐	やや粗	良	曽利Ⅰ式
297	深鉢		4.5		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	曽利Ⅰ式
298	深鉢		5.4		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅰ式
299	深鉢		4.3		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
300	深鉢		3.4		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
301	深鉢		5.0		10YR5/6黄褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
302	深鉢		4.4		5YR6/6橙	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
303	深鉢		3.5		5YR4/6赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
304	深鉢		4.6		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
305	深鉢		4.0		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗		曽利Ⅱ式
306	深鉢		5.8		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
307	深鉢		5.7		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
308	把手		2.8		5YR5/3にぶい赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
309	深鉢		4.6		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
310	深鉢		3.0		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
311	深鉢		12.3		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
312	深鉢		2.9		7.5YR6/4にぶい橙	密	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
313	深鉢		5.3		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
314	深鉢		5.1		10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良	曽利Ⅱ式
315	深鉢		3.1		7.5YR5/4にぶい褐	やや密	良	曽利Ⅱ式
316	深鉢		3.1		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
317	深鉢		4.9		7.5YR6/4にぶい橙	やや密	良	曽利Ⅱ式
318	深鉢		6.5		7.5YR4/1褐灰	やや粗	良	曽利Ⅱ式
319	深鉢		4.9		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
320	深鉢	(16.0)	3.7		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
321	深鉢		7.9		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
322	深鉢		6.0		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
323	深鉢		11.3		7.5YR5/6明褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
324	深鉢		5.3		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
325	深鉢		10.8		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
326	深鉢		5.0		10YR6/6明黄褐	粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
327	深鉢		6.9		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
328	深鉢		5.0		5YR6/4にぶい橙	やや密	良	曽利Ⅱ式
329	深鉢	(9.0)	4.5		10YR6/4にぶい黄橙	やや密	良	曽利Ⅱ式
330	深鉢	(28.0)	3.8		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
331	深鉢		6.2		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
332	深鉢		5.0		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
333	深鉢		7.3		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
334	深鉢		8.1		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅱ式
335	深鉢		6.4		7.5YR5/3にぶい褐	やや粗	良	曽利Ⅲ式
336	深鉢		4.3		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅳ式
337	深鉢	(19.0)	3.6		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗		曽利式
338	深鉢		3.8		10YR4/3にぶい黄褐	やや粗	良	曽利式
339	深鉢		3.5		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利式
340	深鉢		2.8		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利式
341	深鉢		3.5		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良	曽利式
342	深鉢		5.5		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良	曽利式
343	深鉢		5.0		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	曽利式
344	深鉢		8.2		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利式
345	深鉢		4.7		5YR4/4にぶい赤褐	やや粗	やや良	曽利式
346	深鉢	(30.0)	6.5		10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良	曽利式
347	深鉢		5.35		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
348	深鉢		4.4		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	
349	深鉢		4.1		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
350	深鉢		6.0		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	
351	深鉢		1.5	(4.8)	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	
352	深鉢		1.8	(16.0)	5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	
353	深鉢		6.7		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
354	深鉢		3.4		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	
355	深鉢		5.9	(13.0)	7.5YR6/6橙	やや密	良	
356	深鉢		3.5		7.5YR3/2黒褐	密	良	
357	深鉢		1.7		5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良	五領ヶ台式
358	深鉢		4.2		7.5YR6/6橙	やや密	良	
359	深鉢		3.2	(16.0)	5YR6/6橙	やや粗	良	
360	深鉢		3.3	(14.0)	7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
361	深鉢		3.4	(6.8)	2.5YR5/4にぶい赤褐	やや密	良	
362	深鉢		4.1		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	
363	深鉢		5.6		7.5YR5/4にぶい褐	やや粗	良	
364	深鉢		4.2		7.5YR4/3褐	やや粗	良	
365	S字甕		1.8		10YR4/3にぶい黄褐	黒雲母、砂粒	良	古墳時代

殿林遺跡

番号	器　　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　　調	胎　　土	焼　成	時　　代
1	深鉢		3.5		10YR4/1褐灰	やや粗	良	五領ヶ台式
2	深鉢		3.7		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	五領ヶ台式
3	深鉢		3.2		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	新道式2
4	深鉢		2.5		7.5YR6/6橙	石英、黒雲母？金雲母	良好	新道式
5	深鉢		4.1		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	勝坂式
6	深鉢		5		7.5YR6/6橙	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
7	深鉢		4.1		5YR5/4にぶい赤褐	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
8	深鉢		2.8		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利式
9	深鉢		7.3		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利式
10	深鉢		10.1		7.5YR6/6橙	やや粗	良	曽利Ⅱ新式
11	深鉢		3.2		10YR4/2灰黄褐	やや粗	良	曽利Ⅱ新式
12	深鉢		4.2		10YR4/3にぶい黄褐	黒色粒子、石英、金雲母	良好	曽利Ⅱ式
13	深鉢		3.5		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
14	深鉢		5.9		7.5YR6/6橙	やや粗	良	曽利Ⅱ式
15	深鉢		3.2		7.5YR4/1褐灰	やや密	良好	曽利Ⅱ式
16	深鉢		4.4		7.5YR6/6橙	やや粗	良	曽利式
17	深鉢		5.3		10YR5/3にぶい黄褐	やや粗	良	曽利式
18	深鉢		4.8		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
19	深鉢		5.65		2.5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利Ⅰ～Ⅱ式
20	深鉢		11.3		5YR5/6明赤褐	やや粗	良	曽利式
21	深鉢		4.8		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良	曽利Ⅳ式
22	深鉢		3.7		7.5YR4/4褐	白色粒子、石英、金雲母	良	曽利式
23	深鉢		4.7		10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	良	曽利式
24	深鉢		5.9		7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	曽利式
25	深鉢		4		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
26	深鉢		5.6		10YR5/4にぶい黄褐	やや密	良	加曽利E3式
27	土板		5.8		10YR5/4にぶい黄褐	やや粗	良	
28	深鉢		2.8		5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
29	深鉢		2.3	(6.0)	7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	良	
30	深鉢		6.4	(16.0)	10YR6/4にぶい黄橙	粗		
31	深鉢		4.3		5YR6/4にぶい橙			曽利Ⅰ式
32	深鉢		4.7		7.5YR3/1黒褐			曽利式
33	深鉢		3		7.5YR6/4にぶい橙			曽利式
34	深鉢		5		7.5YR5/4にぶい褐			
35	深鉢		2		5YR5/4にぶい赤褐			井戸尻式
36	深鉢		2.5		2.5YR5/4にぶい赤褐			曽利式
37	深鉢		6.1		7.5YR6/6橙			曽利式
38	深鉢		5.1		10YR5/4にぶい黄褐			曽利Ⅱ式
39	深鉢		19.8		5YR5/4にぶい赤褐	白色砂礫、雲母、黒色砂粒	良好	井戸尻式2

第２節　石器

安道寺遺跡（Ｈ26年度試掘調査）

試掘の結果、64点の石器が出土した。その多くは打製石斧とそれを作る際の剥片であった。その中でも特徴的なもの、状態の良いものを14点図示した。また、黒曜石などを石材とした小型の石器も出土したが、図示するべき資料は確認できなかった。

打製石斧（第22図1～6、第23図8・10・12～14）1～3・9・10号トレンチから出土した11点を図示した。短冊形と草鞋形の中間の形状が大半だが、中には明確な短冊形も認められる（3、14)。大きさは10cm程度のものが多いが、中には15cm程度のもの（6、10）も認められる。加工は縁辺のみの資料も多く（4、12)、素材剥片の剥離面を残している例も多い。着柄痕が確認できる資料もあるが、顕著ではない（2、4、14)。6は厚みがあり、細かな剥離が見られないことから未製品の可能性が考えられる。石材は全て頁岩と、それ由来のホルンフェルスである。

礫斧（第23図9）10号トレンチから1点出土した。棒状の礫の一端に片側のみ剥離痕が確認できる。刃部は折損しており、確認できない。剥離が一面しか確認できないこと、打製石斧とは異なり珪質頁岩が用いられていることから、遺物ではない可能性も考えられる。

磨製石斧（第23図11）13号トレンチから1点出土した。刃部は両刃であり、平面形の先端がやや突き出している。表裏両面を磨いており、素材剥片を伺うことはできない。表裏両面とも線条痕が認められ、大半が縦方向だが、一部横方向も認められる。上部は折損している。石材はやや淡い緑色凝灰岩である。

石皿（第22図7）8号トレンチから1点出土した。扁平な円礫を素材としている。表面中央部に摩耗した凹み部が認められる。凹み部に線条痕は認められない。残存しているのは１／４程度であり、残りは失われている。石材は輝石安山岩である。

安道寺遺跡（Ｈ27年度分布踏査）

全部で31点の石器を採集した。その多くは打製石斧とそれを作る際の剥片であった。その中でも特徴的なもの、状態の良いものを10点図示した。また、黒曜石を石材とした小型の石器も採集できたが、図示できる資料はない。

打製石斧（第24図15～17・19・20、第25図22～24）8点を図示した。草鞋型（15～17、19、22～24）が大半だが、１点のみ分銅型（20）が出土している。大きさは10cm程度のものが大半だが、中には完形で15cmを超えるもの（20）も認められる。加工は縁辺のみの資料も多く（16、19)、素材剥片の剥離面を残している例も多い。どの資料も、着柄痕が顕著に確認できない。石材は頁岩と、それ由来のホルンフェルスである。

石匙（第24図18）18は粗製の石匙である。やや横長の剥片を素材として、刃部を下縁、右側縁に設定している。右側縁の加工が表裏両面から施されているのに対して、下縁の刃部は裏面のみ加工が施されている。つまみ部を作り出すため、裏面の両側縁に加工を施しているが、数度の剥離に止まっている。加工は刃部とつまみ部周辺のみであり、全体的に素材剥片の形状を残している。石材は緑色凝灰岩である。

21は幅広な剥片を素材として、その一縁に連続した加工を施し刃部としている。加工は表面のみであり、素材剥片の形状を良く残している。右半部を折損している。刃部の形状から石匙に分類したが、つまみ部も確認できず、それ以外の器種である可能性も考えられる。石材はホルンフェルスである。

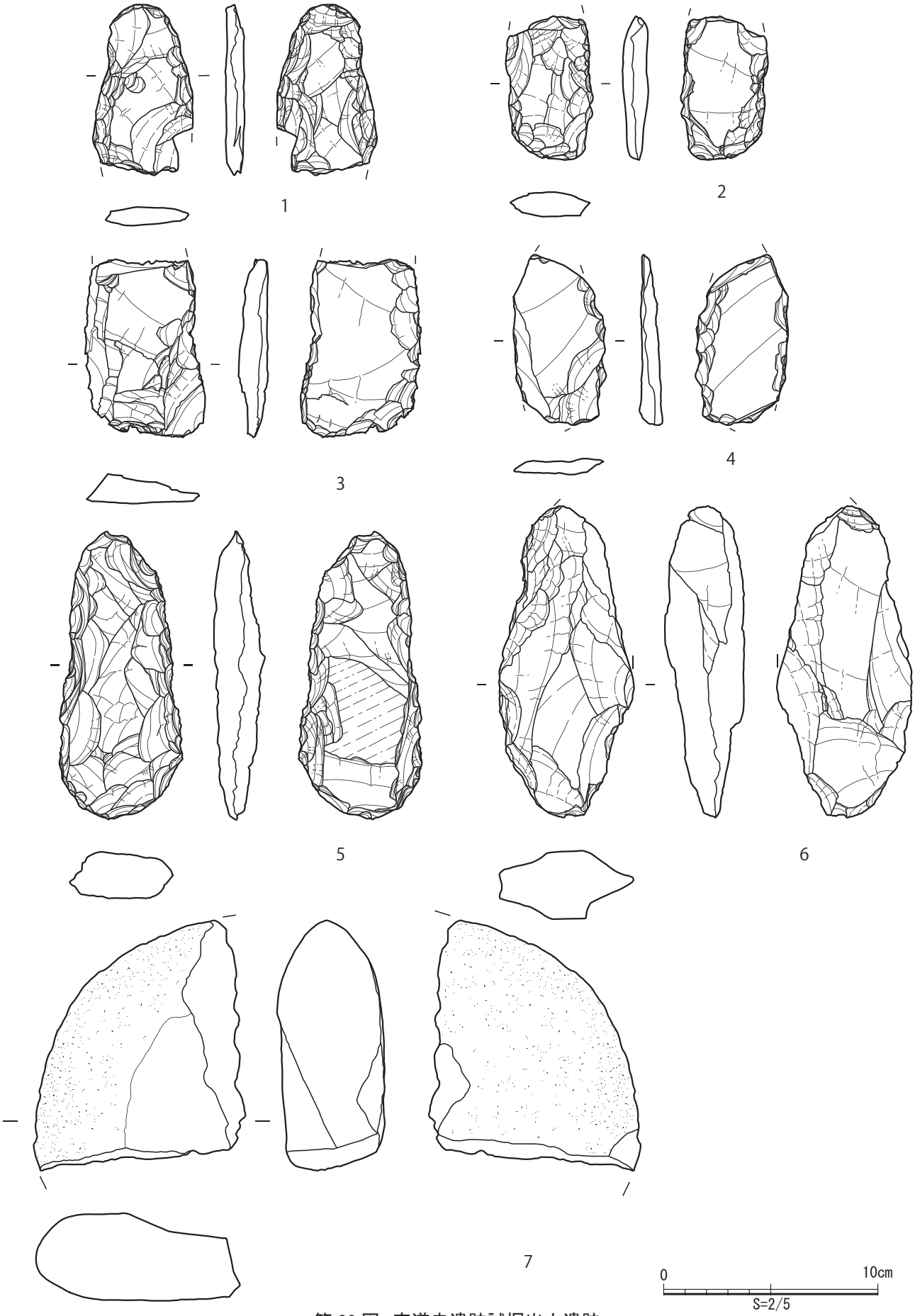
殿林遺跡（H26年度試掘調査）

試掘の結果、石器は出土しなかった。

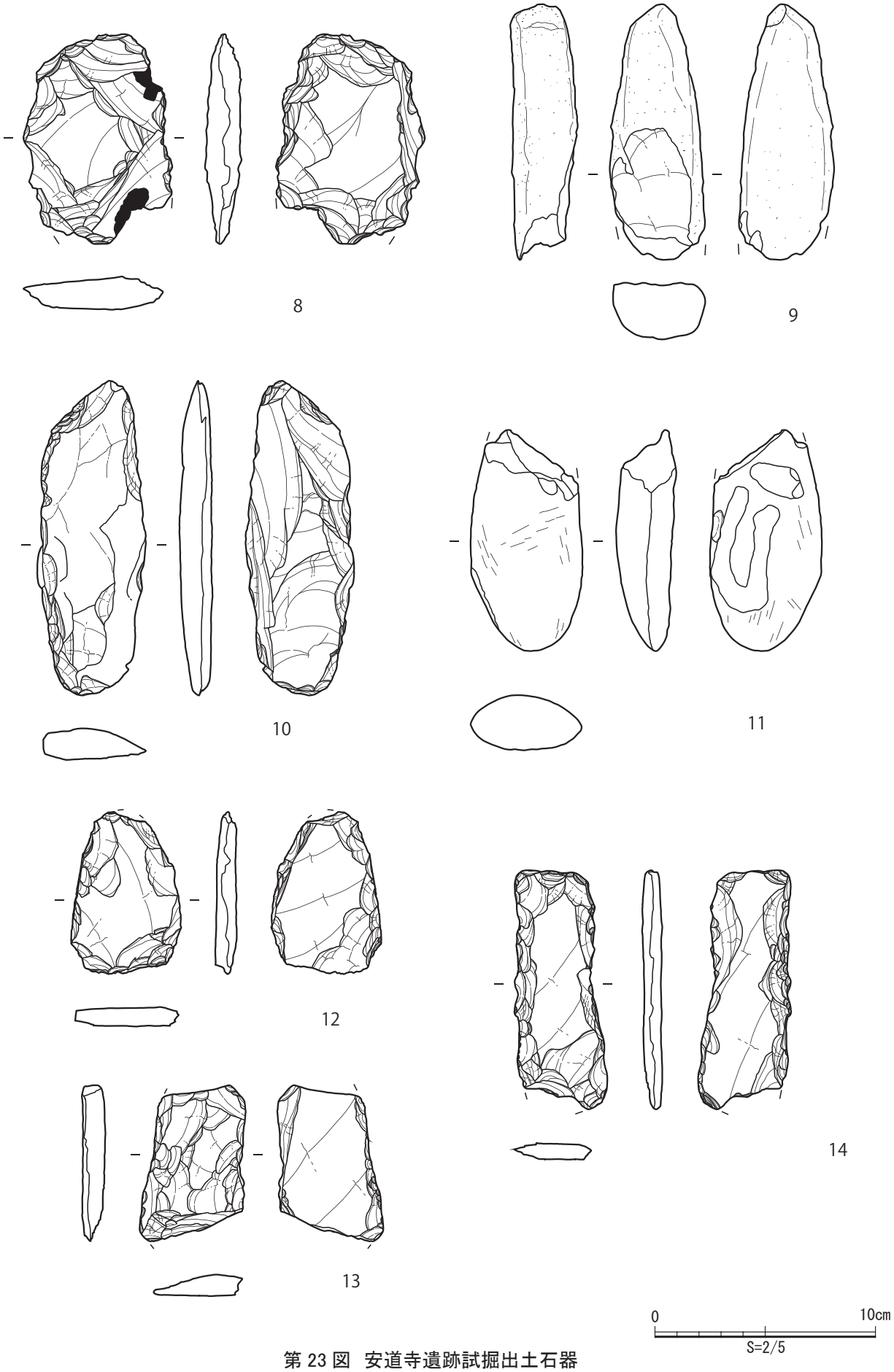
殿林遺跡（H27年度分布踏査）

全部で３点の石器を採集し、そのうち1点を図示した。

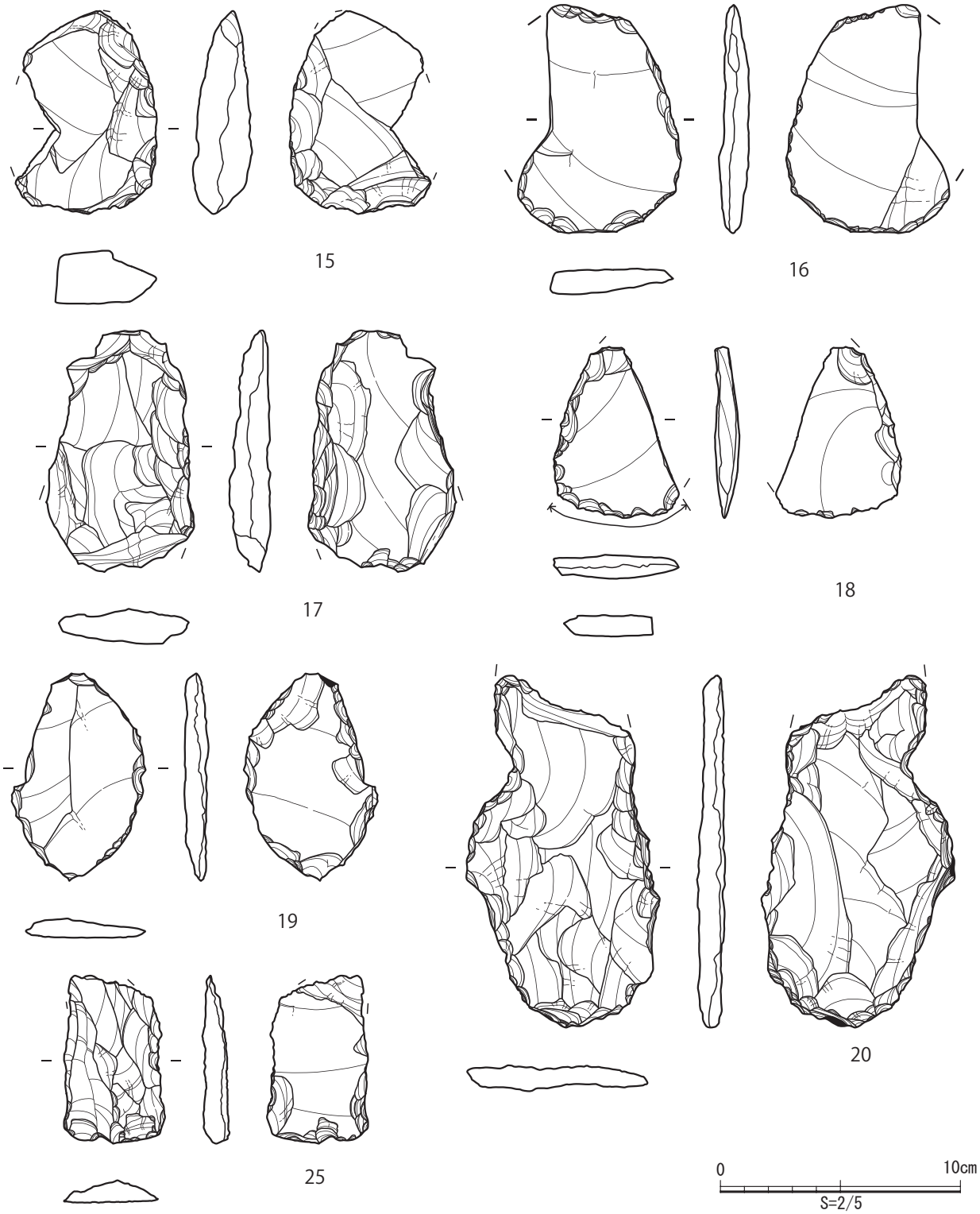
打製石斧（第24図25）25は短冊形の打製石斧である。全体的に加工に乏しく、特に裏側は主要剥離面が大部分残存している。打製石斧から剥がれ落ちた剥片を再利用していると推測される。石材は頁岩である。



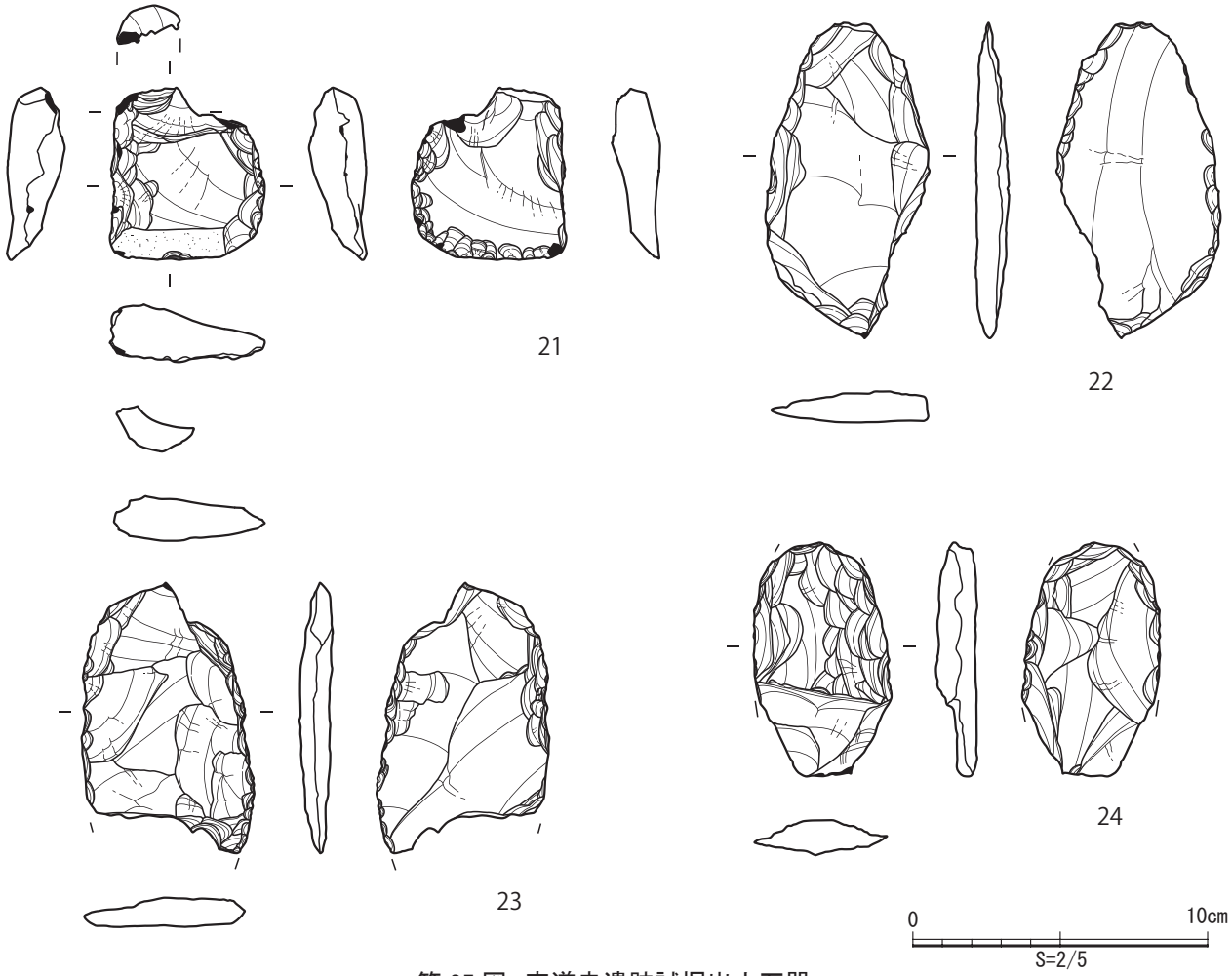
第 22 図　安道寺遺跡試掘出土遺跡



第 23 図　安道寺遺跡試掘出土石器



第 24 図　安道寺遺跡・殿林遺跡分布踏査採集石器



第 25 図　安道寺遺跡試掘出土石器

第2表　安道寺遺跡石器観察表

図版番号	ﾄﾚﾝﾁ	地番	器種	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	注　　記	備　　考
1	1T	1182	打製石斧	頁岩	(8.0)	(4.7)	0.9	40.7	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘1T一括	
2	2T	1182	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(6.7)	4.1	1.2	43.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘2T一括	
3	2T	1182	打製石斧	頁岩	(8.3)	5.6	1.4	67.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘2T一括	
4	3T	1182	打製石斧	頁岩	(8.0)	4.3	1.1	36.8	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘3T一括	
5	3T	1182	打製石斧	頁岩	13.5	5.7	2.4	188.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘3T一括	
6	5T	1191	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(14.5)	6.3	3.7	314.3	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘5T一括	
7	8T	1185	石皿	輝石安山岩	(11.7)	(9.8)	5.0	644.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘8T一括	
8	9T	1185	打製石斧	頁岩	(9.5)	(6.7)	1.6	105.6	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘9T一括	
9	10T	1169-2	礫斧？	珪質頁岩	(11.6)	4.3	3.1	187.1	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘10T一括	遺物でない可能性あり
10	11T	1165	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	14.3	4.9	1.5	120.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘11T一括	
11	13T	1159-1	磨製石斧	緑色凝灰岩	(10.0)	5.1	2.1	187.1	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘13T一括	
12	表採		打製石斧	頁岩	(7.4)	5.0	1.0	44.4	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘表採	
13	表採		打製石斧	頁岩	(7.1)	(4.8)	1.1	45.1	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘表採	
14	表採		打製石斧	頁岩	(10.8)	4.2	0.9	54.2	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2015試掘表採	
15		1157-1	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	8.4	(5.9)	2.5	116.2	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1157-1P543	
16		1142	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(9.6)	(6.8)	1.3	81.9	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1142	同一注記あり
17		1142	打製石斧	頁岩	(10.1)	(6.1)	1.7	107.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1142	同一注記あり
18		1146	石匙？	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(7.1)	(5.2)	1.0	42.5	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1146P410	石匙以外の可能性あり
19		1147南	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	8.7	5.6	1.0	43.9	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1147南P432	
20		1189	打製石斧	頁岩	(14.6)	(8.0)	1.2	148.1	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1189P581	
21		1185	石匙	硬質細粒凝灰岩	5.8	5.2	1.9	62.4	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1185P522	同一注記あり
22		1185	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(10.7)	5.6	1.1	66.7	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1185P522	同一注記あり
23		1185	打製石斧	頁岩	(9.2)	7.8	1.2	61.3	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1185P522	同一注記あり
24		1185	打製石斧	頁岩	(8.0)	4.7	1.3	49.4	ｱﾝﾄﾞｳｼﾞ2016ﾄｳｻ1185P522	同一注記あり

第3表殿林遺跡石器観察表

図版番号	ﾄﾚﾝﾁ	地番	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	注　　記	備　　考
25		236	打製石斧	頁岩	(7.0)	4.2	1.1	33.3	ﾄﾉﾊﾞﾔｼ2016236P161	

第４章　総括

第１節　土器

分布状況

本節では、平成27年度に実施した踏査の結果から、安道寺遺跡・殿林遺跡が位置する段丘別に土器を分類した結果を述べる。安道寺遺跡の範囲内には、北から南へ延びる段丘が３本ある。これらを「東側」、「中央」、「西側」とする。殿林遺跡では北東から南西に延びる段丘が３本あり、これも「東側」、「中央」、「西側」とした。

安道寺遺跡では東側と中央の段丘上から遺物を多量に採集した。共に曽利式が多く見つかっている。東側と中央では、曽利式以前の様相について若干の差異が認められる。中央段丘には、五領ヶ台式と勝坂式が東側と比べて多い。具体的には、東側の段丘には五領ヶ台式はなく、勝坂式は５点確認したのみであるが、中央の段丘には五領ヶ台式が３点、勝坂式が11点認められた。なお、西側の段丘面からは、明確な結果は得られなかった。

あくまで、踏査結果によるもので点数が少ないという課題が残るが、中央の段丘面には曽利式以前の集落の中心があり、その後曽利式期に安道寺遺跡全体に広がっていった可能性が指摘できる。

殿林遺跡は、西側の段丘で遺物を多く採集したが、安道寺遺跡のような傾向を掴むに至らなかった。

釣手土器について

今回記載する釣手土器はすでに報告済みの土器である（山梨県埋蔵文化財センター 2018）。安道寺遺跡範囲内の土地所有者が偶然発見したもので、出土地点が明確な資料ではない。しかし、その形・文様は釣手土器の型式変化を考えるうえで重要なものである。

本資料は、二窓式でブリッジの頂点には顔面把手が施される。文様は井戸尻式に特徴的なイノシシを模したモチーフを持ち、その他細部の文様も井戸尻式によく見られるものである。この土器の注目されるべきところは、曽利式期に多く見られる二窓式の器形と、井戸尻式の文様がセットとなっているという点であり、二窓式の成立段階にあたる釣手土器と位置付けられ全国的にも珍しいものである。

第２節　石器

分布状況

安道寺遺跡の分布踏査の結果、31点の石器を採集し、その大半は遺跡中央の段丘上から確認された。その中でも段丘の西側の１～10 号トレンチの周辺から、多くの石器が見つかっている。この周辺は過去の発掘調査でも縄文時代の遺物が多く出土しており（山梨県教育委員会編1978、甲州市教育委員会編2011）、集落の主体部と考えられる。また、遺跡中央の段丘と東側の段丘の境付近（11 ～ 13号トレンチ）の周辺からも、石器が確認された。殿林遺跡では分布調査にて３点の石器しか見つかっておらず、分布状況を考察することはできなかった。

出土石器の器種

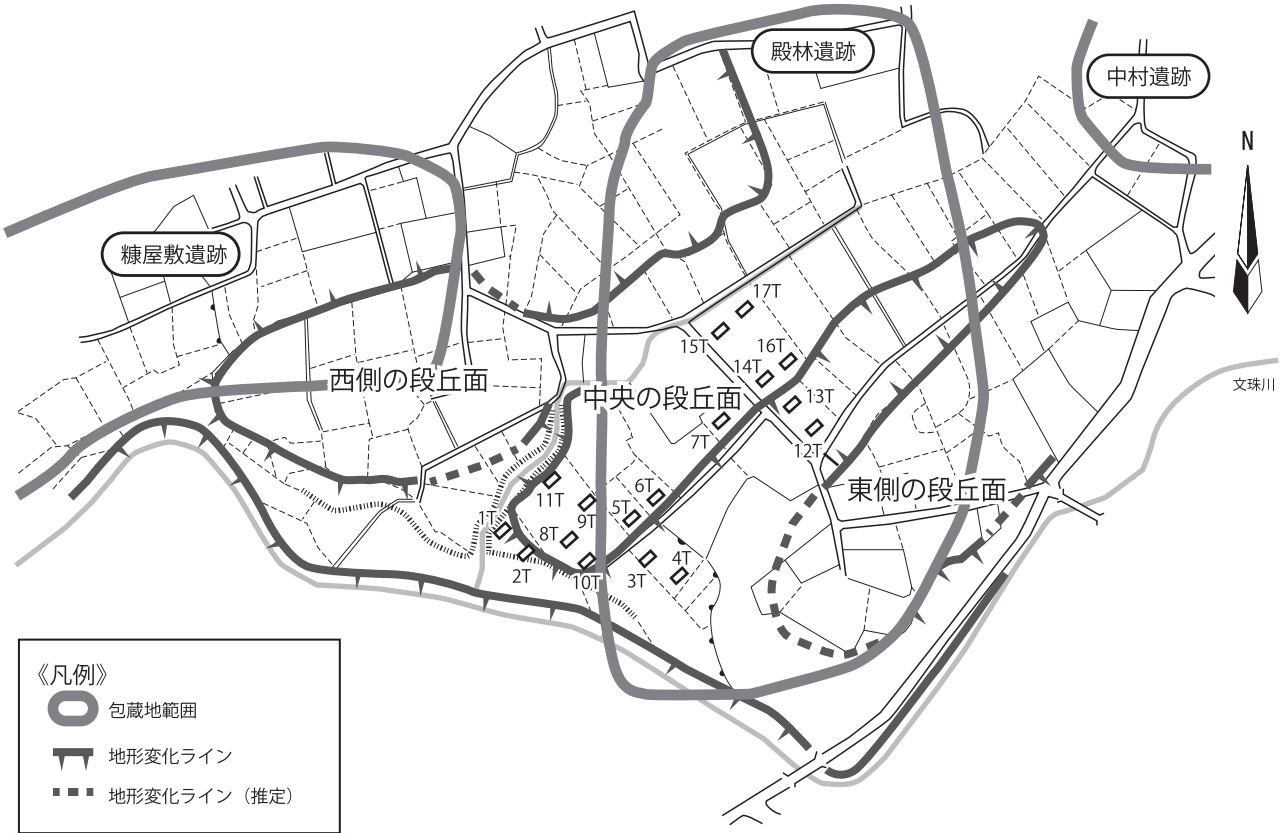
安道寺遺跡では、試掘調査、分布踏査において、合わせて95点の石器が確認された。その中でも、打製石斧と、それに関連する剥片は73点確認されており、全体の約３／４を占めている。その他の器種では、磨製石斧１点、石匙２点が出土している。小型の石器で、例えば石鏃などの主猟具や掻器、削器、石錐などの加工具は確認できなかった。分布踏査で採集を行う中で、小型の石器より打製石斧の方が見つけやすいという精度の課題はあるが、試掘調査においても同様の傾向を見せることから、打製石斧が主体となる石器組成は本遺跡の特徴であると言える。打製石斧は一般的に土掘具と考えられており、竪穴の掘削や根菜類の採集に使われたと考えられている。断片的な調査のため、判然としないが、そうした生業が主体であったことがうかがえる。

出土石器の石材

打製石斧に用いられている石材は、頁岩とそれ由来のホルンフェルスがほとんどである。これらは付近の河床もしくは礫層から採取した在地の石材であると考えられる。また、数点の水晶が見つかっているが、遺跡の北側約1.5㎞に位置する竹森地域をはじめとして水晶の産地が周辺に点在しており、そうした産地から持ち込まれたことが推測される。水晶は安道寺遺跡から約1.5km北東に離れた重郎原遺跡でも少量出土しており（山梨県教育委員会編1972)、この地域の特徴であると考えられる。

遠隔地の石材としては、黒曜石が8点確認されているが、全て透明度が高く、信州産であることが推測される。また、石匙のうち1点は桂川由来と思われる緑色凝灰岩を用いており、郡内地域あるいは相模川流域から持ち込まれたと考えられる。

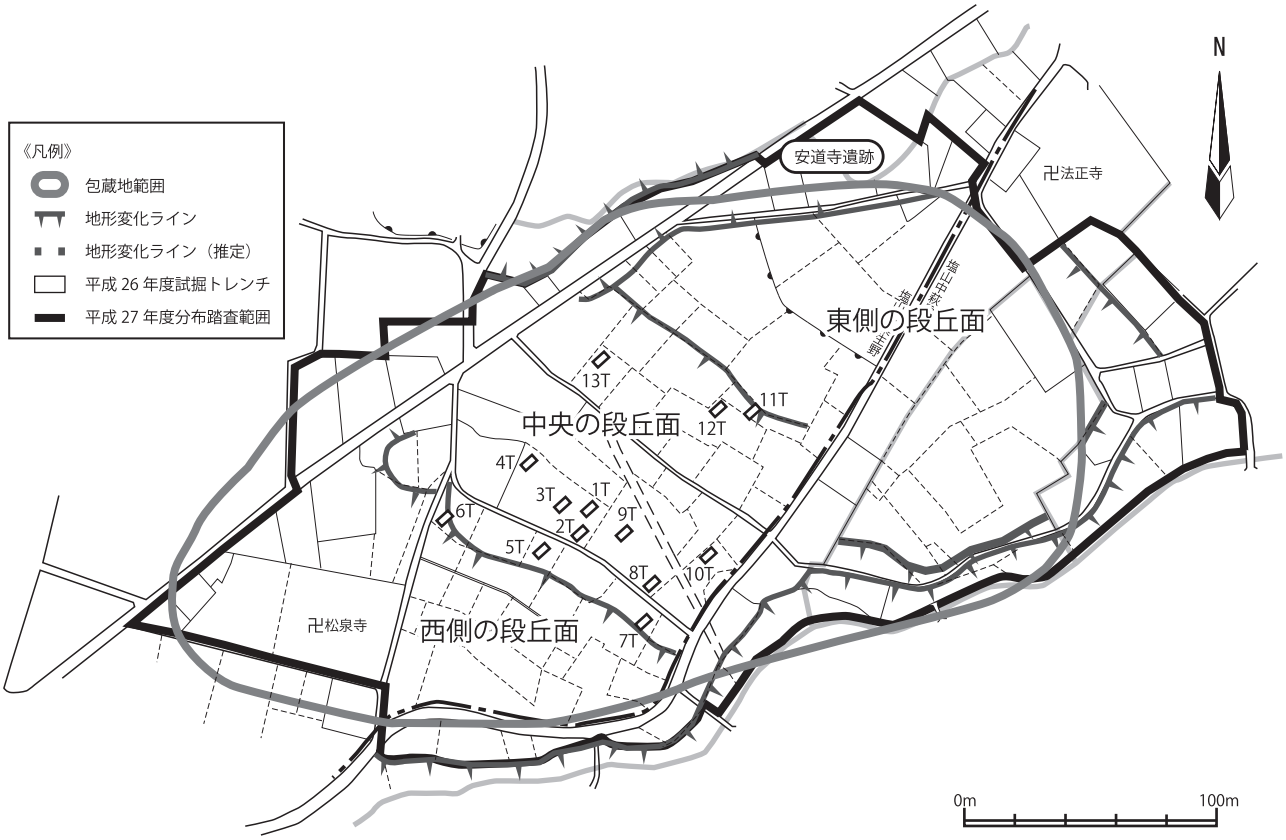
塩山市史編さん委員会1996『塩山市史』史料編　第一巻　原始・古代・中世　塩山市
甲州市教育委員会編2011「安道寺遺跡」『平成21年度市内遺跡発掘調査等事業報告書』甲州市教育委員会
山梨県教育委員会編1972『重郎原遺跡』山梨県教育委員会
山梨県教育委員会編1978『安道寺遺跡調査報告書（概報)』山梨県教育委員会
山梨県埋蔵文化財センター編2018『山梨県内分布調査報告書』山梨県教育委員会



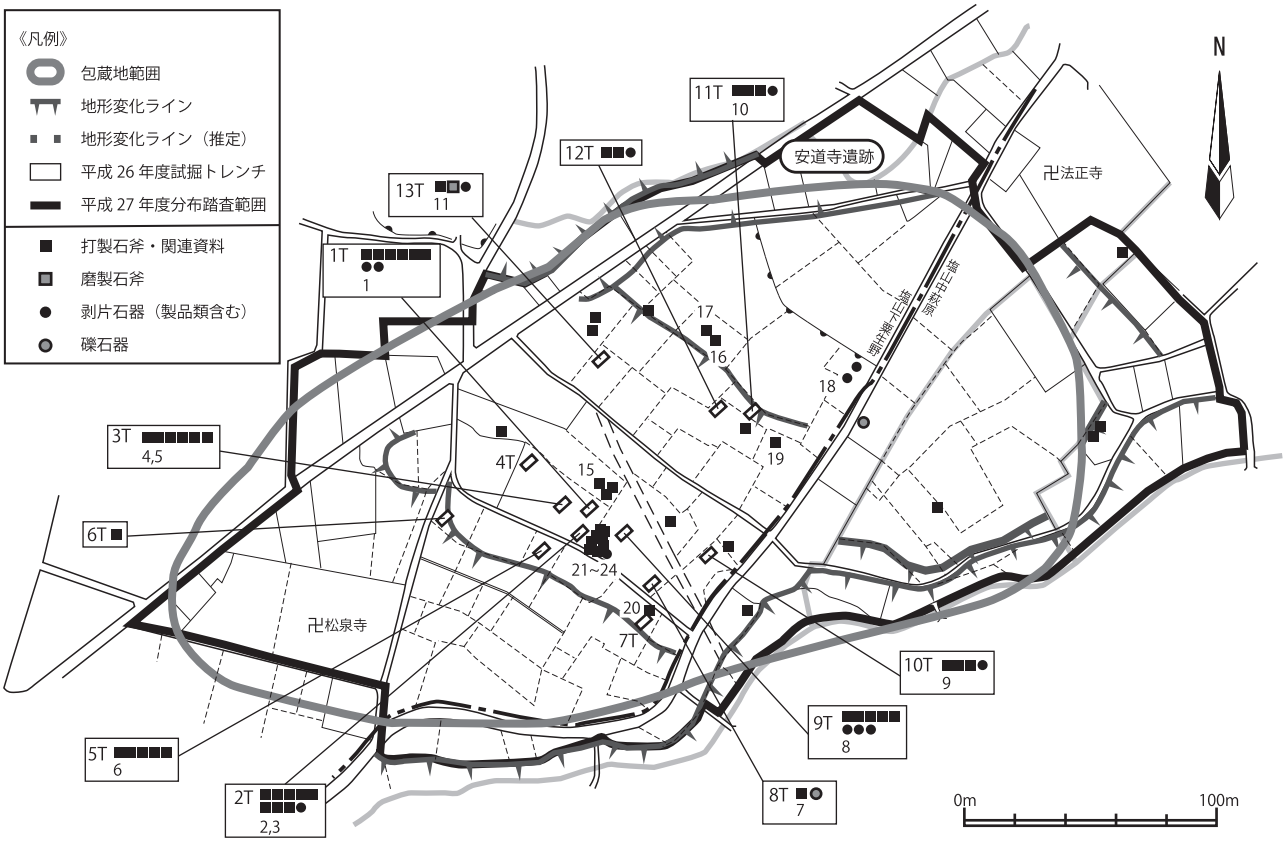
第 26 図　殿林遺跡周辺調査範囲と段丘位置図

第3表　安道寺遺跡　石材表

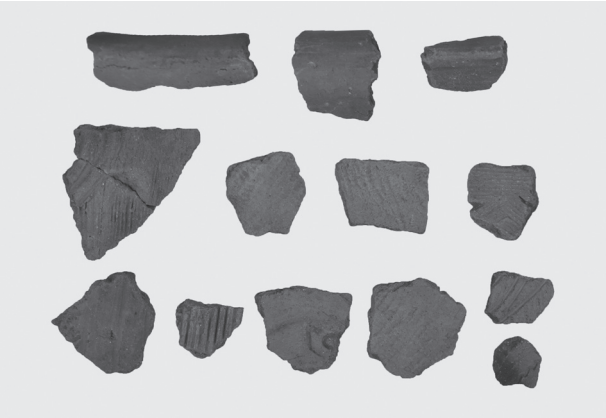
	H26年度												H27年度	計
	1T	2T	3T	5T	6T	8T	9T	10T	11T	12T	13T	回収・表採	採集	
頁岩	4	3	4	0	0	1	2	2	1	1	1	4	8	31
ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	2	5	2	5	1	0	3	0	2	1	0	2	19	42
珪質頁岩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
緑色凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
黒曜石	1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	1	8
水晶	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	5
石英	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
細粒砂岩	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	3
輝石安山岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
計	8	9	6	5	1	2	8	4	4	3	3	11	31	95



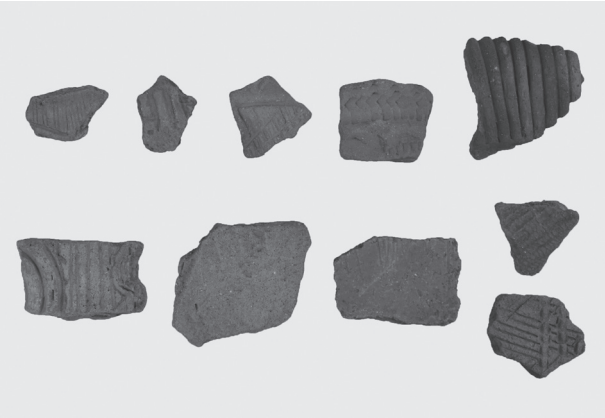
第 27 図　安道寺遺跡調査範囲と段丘位置図



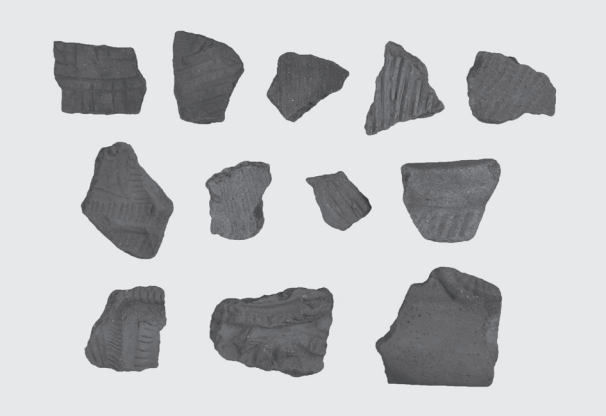
第 28 図　安道寺遺跡石器出土位置図（器種別）



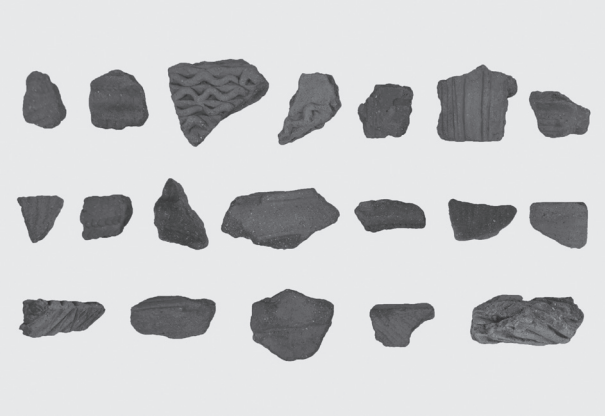
安道寺遺跡　出土土器①（1号トレンチ）



安道寺遺跡　出土土器②（1号トレンチ）

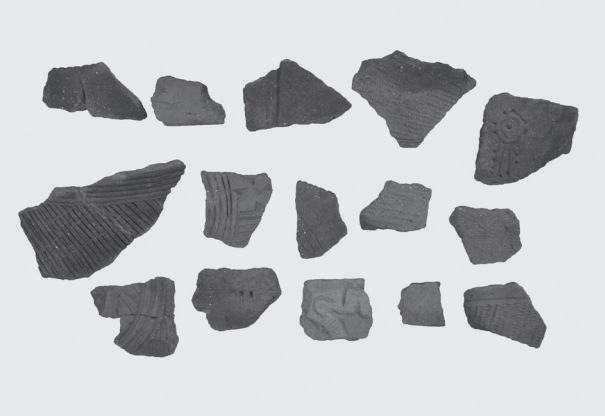


安道寺遺跡　出土土器③（1号トレンチ）

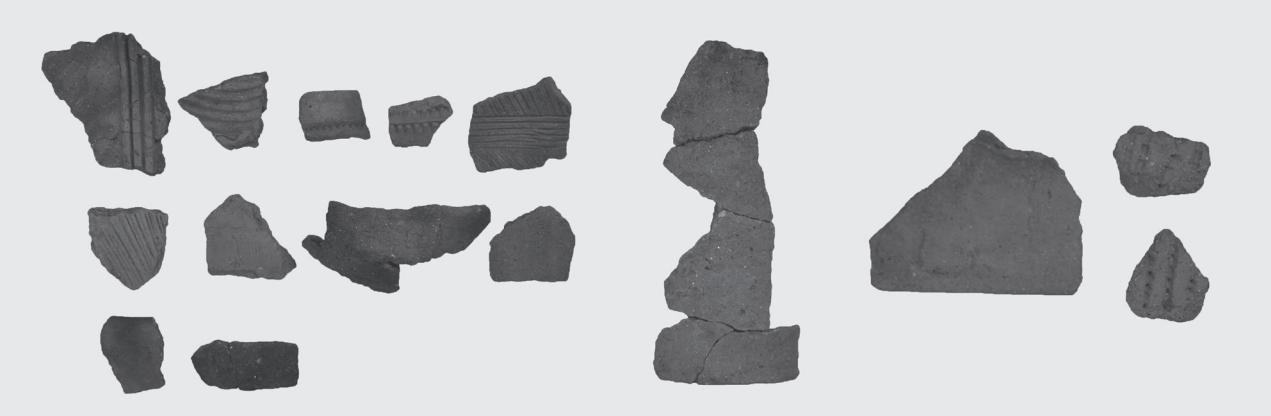


安道寺遺跡　出土土器④（1号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑤（2号トレンチ）



安道寺遺跡　出土土器⑥（3号トレンチ）



安道寺遺跡　出土土器⑦（3号トレンチ・4号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑧（5～7号トレンチ）

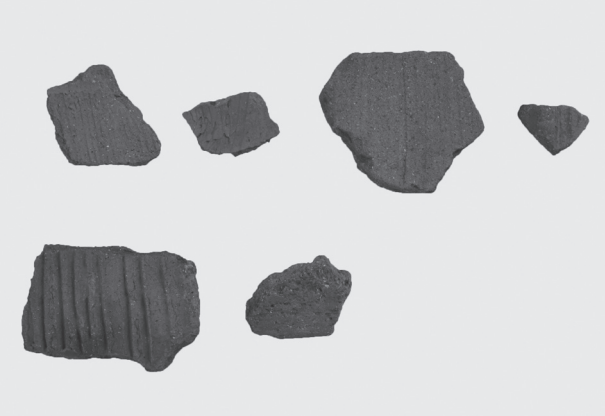
安道寺遺跡　出土土器⑨（8号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑩（8号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑪（9号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑫（10 号トレンチ）

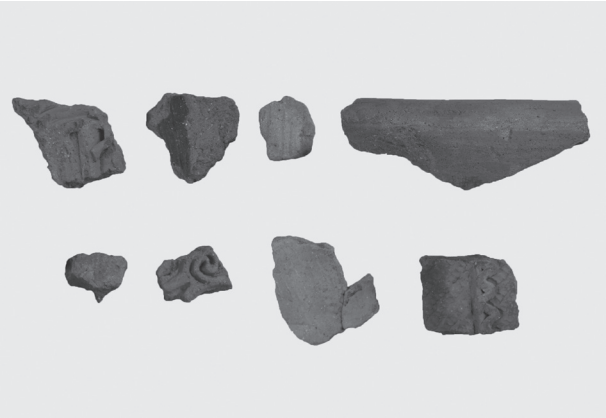
安道寺遺跡　出土土器⑬（11 号トレンチ）



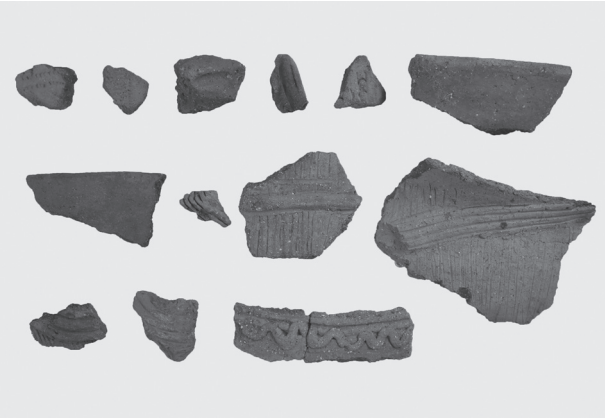
安道寺遺跡　出土土器⑭（12 号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑮（13 号トレンチ）

安道寺遺跡　出土土器⑯（13 号トレンチ）



殿林遺跡　表採土器①

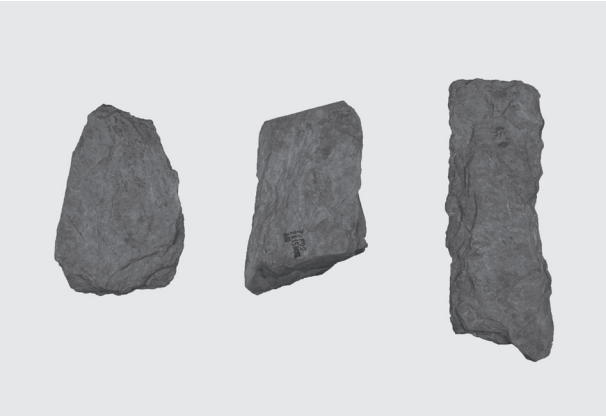


殿林遺跡　表採土器②

殿林遺跡　表採土器③

殿林遺跡　表採土器④

安道寺遺跡　出土石器



安道寺遺跡　出土石器

安道寺遺跡　採集石器

安道寺遺跡　採集石器

殿林遺跡　採集石器

安道寺遺跡　釣手土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまなしけんないぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	山梨県内分布調査報告書（平成31年・令和元年）
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	327集
著者名	深澤一史・柴田亮平・御山亮済・熊谷晋祐・岩永祐貴・北澤宏明・佐賀桃子
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923　Tel　055-266-3016
発行年月日	2020年3月19日

	事業名・遺跡名	所在地	調査面積	調査対象面積	調査期間
1	中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事（笛吹市～富士川町）地内　試掘	山梨県笛吹市～富士川町地内	約40,000㎡	1,625㎡	平成31年2月4日～令和元年12月18日
2	中央新幹線成島保守基地建設工事　試掘《二又第2遺跡》	山梨県中央市成島地内	31,082㎡	813㎡	平成31年1月28日～令和元年7月2日
3	中央新幹線高下作業ヤード建設工事　試掘	南巨摩郡富士川町高下407外	2,129㎡	94㎡	令和元年6月3日～4日
4	新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設事業　試掘《北畑南遺跡》	山梨県笛吹市石和町東油川地内	8,996.53㎡	813㎡	令和元年5月27日～7月2日
5	一般国道411号御屋敷拡幅事業《馬場平遺跡》	山梨県甲州市塩山上萩原地内	49㎡	7,200㎡	令和元年5月15日～8月1日
6	公園施設（四ツ目垣）設置工事《国指定史跡甲府城跡》	山梨県甲府市丸の内一丁目49,66	78㎡	7㎡	令和元年6月11日～14日
7	大月警察署上谷交番建設工事　試掘《三ノ側遺跡》	山梨県都留市田原地内	12㎡	60.8㎡	令和元年9月26日
8	高速自動車国道中部横断自動車道新設工事　試掘《包蔵地外》	山梨県南巨摩郡南部町矢島地内	99.1㎡	1,500㎡	令和元年12月11日～13日
9	県立北杜高校蹄洗場建設事業　立会《原町農業高校前遺跡》	山梨県北杜市長坂町渋沢1007-19	1.14㎡	14.7㎡	令和元年10月17日
10	中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事（笛吹市）地内　踏査	山梨県笛吹市境川町坊ケ峰地内		約4,500㎡	平成31年2月20日
11	中央新幹線への電力供給に伴う山梨県内の送電線建設事業	山梨県西八代郡市川三郷町内			令和元年12月5日
12	国営施設機能保全事業に先立つ詳分布調査事業《殿林遺跡・安道寺遺跡》	山梨県甲州市上萩原・中萩原・下粟生野地内		殿林遺跡約55,00㎡安道寺遺跡約70,000㎡	平成31年1月7日～令和元年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第327集
山梨県内分布調査報告書（平成31年・令和元年）
印刷日　2020年3月12日
発行日　2020年3月19日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL　055-266-3016
FAX　055-266-3882
E-mail：maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp
印刷所　株式会社 峡南堂印刷所